



文化財愛護  
シンボルマーク

# 堤 回 遺 跡

昭和 61 年 3 月

松江市土地開発公社  
松江市教育委員会

## 正 誤 表

P 10	$\ell$ 6	S K - 0 1	→ S K - 0 2
P 16	$\ell$ 13	2 - 1 5	→ 2 - 1 3
P 23	$\ell$ 19	2 - 3 9	→ 2 - 3 8 36
P 27	$\ell$ 17	2 - 5 8	→ 2 - 5 9
P 27	$\ell$ 19	2 - 5 9	→ 2 - 5 8
P 27	$\ell$ 26	2 - 6 2	→ 2 - 6 3
P 27	$\ell$ 27	2 - 6 3	→ 2 - 6 2
P 49	$\ell$ 1	第 2 層褐出土	→ 第 2 層褐色土
P 49	$\ell$ 10	( 第 3 4 図 4 - 1 1 )	→ ( 第 3 4 図 4 - 1 0 )
P 53	$\ell$ 3	4 - 4	→ 4 - 1 4
P 55	$\ell$ 12	頸部から外反して	→ 頸部から外向きに
P 60	$\ell$ 9	( 5 - 5, 12, 15, 73 )	→ ( 5 - 5, 12, 15 )
P 60	$\ell$ 11~12	口縁部と肩部の境を内面 から指頭により調整して いるものもある。( 5 - 73 )	→ 又、碗形土器( 5 - 73 )は、 口縁が大きく開き、そこから真 直ぐ下り底部付近で内傾する。 調整は外面タテハケ、内面横方 向のヘラ削りを施す
P 60	$\ell$ 15	( 5 - 1 0 9 )	→ ( 5 - 9 6 )
P 65	$\ell$ 1	小型壺は、	→ 小型壺( 5 - 61, 62 )は、
P 65	$\ell$ 8	須恵器壺身 4、 壺蓋 1	→ 須恵器壺身 5、
P 65	$\ell$ 18	低脚壺は脚	→ 低脚壺( 5 - 5 7 )は脚
P 65	$\ell$ 24	壺蓋( 5 - 9 0 )は、	→ 壺身( 5 - 9 0 )は、
P 66	$\ell$ 1	あり、いずれも須恵器を 同伴している。	→ あり、単純口縁のものは、いづ れも須恵器を同伴している。
P 83 第 57 図		番号なしの須恵器	→ 6 - 6 8
P 106	$\ell$ 15	5 - 1 1 1 )	→ 5 - 9 4 )
P 114 第 6 表		☆ S I - 1 4	→ ☆ S I - 2 0



第2調査区 SI-21全景



第6調査区 SI-01出土赤色塗彩土師器

## 序文

このたび、関係者の努力により、松江市西川津町所在、堤廻遺跡の報告書が刊行されたことは、まことに喜ばしい限りであります。

この遺跡の所在した丘陵は松江市教育委員会の重要施策である松江市立第二中学校校舎の移転改築用地でありましたが、図らずも工事着手直後にこの遺跡が発見され、早速に事前調査を実施する必要が生じました。

この松江二中校舎の移転改築工事も、当教育委員会としましてはぜひとも計画どおり進めることが必要であり、こうした校舎建築ならびに埋蔵文化財の調査保護という事業はいずれも教育委員会の業務としてすこぶる重要な位置を占めるものであり、一時はこれがために苦慮いたしました。

幸い関係各方面の絶大な努力により、建築工事との調整を図りながら調査を実施することができましたことに対し、関係者各位に衷心より謝意を申しのべる次第であります。

この報告書が広く研究者の方々の地域研究の資料として活用されることを切に願っております。

昭和 61 年 3 月

松江市教育委員会

教育長 内田 荣

## 凡 例

1. 本書は、松江市立第二中学校移転用地造成事業に伴ない松江市土地開発公社から依頼を受け、昭和 58 年 6 月から昭和 59 年 5 月までに実施した堤廻（つつみざこ）遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査の組織は次のとおりである。

主体者 松江市教育委員会 教育長 内田 荘

調査員 岡崎雄二郎（主事） 中尾秀信（主事） 遠藤浩己（調査員） 秦 誠司  
(調査員) 錦織慶樹（嘱託員） 萩雅人（嘱託員） 今岡一三（嘱託員）  
佐々木稔（調査補助員） 渕古涼子（調査補助員）

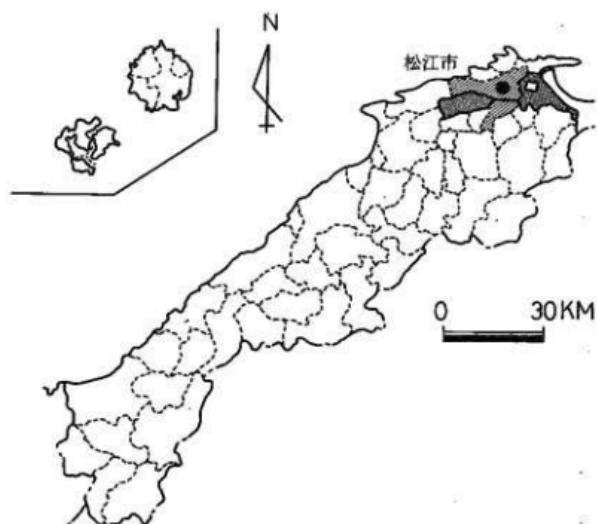
事務局 石飛進（社会教育課長） 中西宏次（文化係長）

3. 発掘調査に際しては、松江市土地開発公社及び松江市教育委員会施設課から多大な協力を得た。
4. 検出遺構及び出土遺物の性格については、山本清（島根大学名誉教授）渡辺貞幸（島根大学助教授）松本岩雄（県文化課）内田律夫（県文化課）西尾克己（県文化課）の諸氏から有益なる指導を得た。記して感謝の意を表する次第である。
5. 出土遺物及び箇面の整理は、渡部美枝、安藤美知枝、小村明子、佐々木稔、瀬古涼子、錦織慶樹が主として担当した。
6. 出土遺物の実測は、土師器を萩雅人、今岡一三、須恵器を昌子寛光が担当した。
7. 本書の編集は、中尾、岡崎、錦織、萩、今岡、佐々木、瀬古、昌子が協議してすすめた。
8. 本書の執筆分担は下記のとおりである。

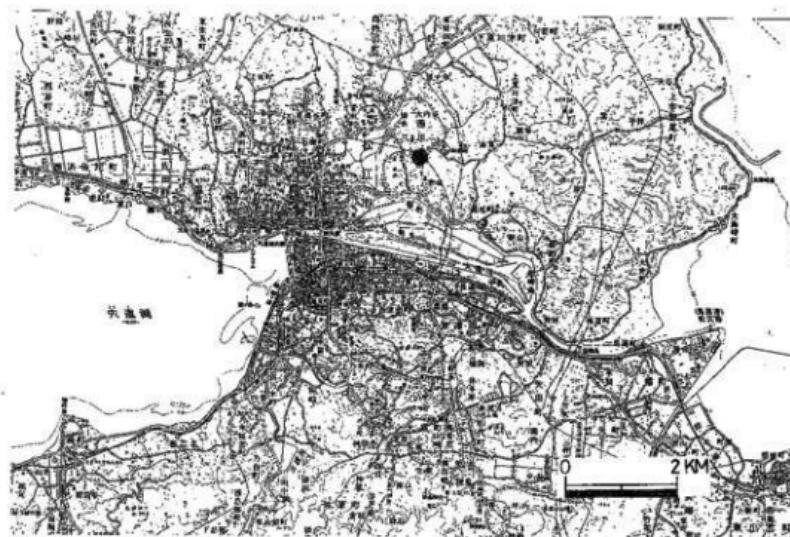
- I 調査に至る経過（岡崎）、II 周辺の歴史的環境（岡崎）、III 調査の概要の内、第1調査区（中尾）第2調査区（萩）第3調査区（今岡）第4調査区（佐々木）第5調査区（中尾）第6調査区（岡崎）、IV 出土遺物の検討の内、1. 土師器について（今岡）  
2. 出土須恵器の検討（昌子）、3. 滑石製模造品について（岡崎）、V 遺構の検討（萩）  
VI 小結（岡崎）

# 目 次

I 調査に至る経過 .....	1
II 周辺の歴史的環境 .....	5
III 調査の概要 .....	9
1. 第1調査区 S I 0 5, S I 0 9 .....	9
2. 第2調査区 S I 0 6, S I 0 7, S I 0 8, S I 1 8 S I 2 1, S B 0 1, S B 0 2, その他のピット .....	13
3. 第3調査区 S I 1 0~S I 1 5 .....	34
4. 第4調査区 遺物包含層 .....	46
5. 第5調査区 S I 1 6, S I 1 7, S I 1 9, S I 2 0, 小結 .....	56
6. 第6調査区 S I 0 1~S I 0 4, S K 0 1, S K 0 2, S D 0 1, 古墳推定地 .....	70
IV 出土遺物の検討 .....	90
1. 土師器について .....	90
(1) はじめに .....	90
(2) 器種構成 .....	90
(3) 墓庭跡出土土師器の編年的位置について .....	94
(4) まとめ .....	96
2. 出土須恵器の検討 .....	105
(1) はじめに .....	105
(2) 出土須恵器の出土状態と器種について .....	105
(3) 出土須恵器の編年について .....	107
(4) まとめ .....	109
3. 滑石製模造品について .....	111
V 造構の検討 .....	114
1. はじめに .....	114
2. 積穴住居 .....	114
3. 堀立柱建物 .....	117
4. まとめ .....	118
VI 小 結 .....	124



位 置 図



## I 調査に至る経過

松江市教育委員会では木造老朽校舎であった第二中学校を移転改築するため約1.6km北東に離れた西川津町の川津幼稚園南の丘陵地と谷間の計60,000m<sup>2</sup>を用地にあて昭和58年5月から伐開作業に入っていた。

造成区域については、昭和58年1月開発協議を受けたが、周知の遺跡は該当しなかったので開発行為は実施段階に入っていたわけだが、昭和58年5月23日たまたま伐開区域を踏査した県文化課職員から土器の破片を発見したとの通報があり、早速岡崎が現地を訪れたところ、伐開した材木を搬出するためのいわゆる金馬道によって削られた丘陵の断面から土師器の破片がさらに数片見つかった。

この破片の発見された尾根の上部を見るとかなりの平坦面があり何らかの遺構があるものと推定された。又、西側に一つ隔てた丘陵の先端部にも小規模の古墳らしい高まりが認められた。

そこで、用地造成事業を所管する教育委員会施設課及び造成工事を受託した松江市土地開発公社と協議し事前に発掘調査を実施してみることになった。

当初行った第一次調査は、堤廻遺跡（尾根平坦地）と堤廻古墳推定地の二箇所である。堤廻遺跡は松江市西川津町字堤廻3402-1番地に、堤廻古墳推定地は松江市西川津町字堤廻3402-1番地に所在する。

調査は昭和58年6月1日から同年7月7日までの29日間を要して行った。調査の結果丘陵尾根平坦面には何ら遺構は確認されなかったが、西側斜面の上部から裾部にかけて計4軒の竪穴式住居を検出した。いずれも出土土器から古墳時代の中期（西暦5世紀後半頃）の住居跡と分かり島根県下の集落遺跡研究と川津地区の郷土史研究に一石を投じることになった。

この第一次調査が一応終了した後、ブルドーザーが工事用の進入路を開削した際、道路横の崖面から、またしても土器片が発見され、遺跡がかなり広範囲に所在していることをうかがわせた。

そこで、再度施設課と協議し、県文化課の指導も得ながら、造成区域のほぼ全域にわたってトレンチを設定し、遺構、遺物の有無を確認することになった。

これが、第二次調査であり、昭和58年11月16日から昭和59年5月12日までの内128日間を要して実施した。

調査の結果、古墳時代前期の住居跡3軒、古墳時代中期の住居跡14軒、掘立柱建物2軒の他、多数の須恵器、土師器を発見した。

第一次と第二次の調査を総合した結果は下表のとおりである。

住居 No	平面形	規 模 (m) 床面積(m)	側溝幅-深さ cm	柱主 穴数	主軸 方向	その他のピット 土器、鉢跡	遺 物	時 期	備 考
1	隅丸方 形	東西 南北 4 m × 2 m 以上 壁45~65cm	15~2~3	4		東壁中央部に特 殊ピット2	須恵器(大形蓋 蓋環類) 土師器(長頸壺 2、高壺) 滑石製臼玉2	堤畠Ⅱ期	
2	隅丸方 形	3.6×1.2以上 壁40cm	14~32~ 6~10	0		住居外西側にピ ット1	須恵器(蓋壺、 有蓋高壺) 土師器(壺、甕 高壺)	堤畠Ⅱ期	
3	方形	2.5以上× 6.2以上 壁45cm	20~35~ 5~20	2			須恵器片 土師器(壺、甕 高壺)	堤畠Ⅱ期	住居が重複か 拡張の可能性 あり
4	方形	2.2以上×4.2 壁40~70cm	12	不明		ピット幾枚17個 北東隅に特殊ピ ットSK-01	須恵器(壺、高 壺脚部) 土師器(壺、甕 高壺) 滑石製臼玉3 碧玉管玉研磨 未製品1 磁石	堤畠Ⅱ期	周辺に排水施 設と思われる 溝がめぐる
5	不明	東西 南北 4.5以上 壁70cm	20~50~20	不明		ピット7 土壙1(特殊ピ ット?) (焼土を含む)	土師器(高壺、 甕)	堤畠Ⅱ期	スラッグ状の 焼土
6	方形	東西 南北 3 m × 5 m 以上 壁24~32cm	なし 中央ピットか ら溝が壁にの びる	3		特殊ピット1	須恵器(蓋壺、 高壺脚部) 土師器(壺、甕 高壺、低脚壺 瓶、瓶)	堤畠Ⅱ期	
7	方形	1.5 m以上× 3.7 m 壁20~50cm	10~12~6	4		特殊ピット1 (炭化物、焼土 含む)	住居内からの遺 物なし	堤畠Ⅰ期	SI-08に切 られる

住居 No.	平面形	規 模 (m) 床面積 (m <sup>2</sup> )	側溝幅-深さ (cm)	柱主 穴数	主軸 方向	その他のピット 土壙、勾跡	遺 物	時 期	備 考
8-a	隅丸長 方形	3.4 m × 4.1 m	重構造 SD-01 8~10~2~5 SD-02 15~20~5	不明		特殊ピット 1	8-a と 8-b の土器の区別が できなかった	堤壠Ⅰ期	
8-b	隅丸長 方形	6 m × 6.5 m 壁 74 cm	15~20~5	4		その他ピット 10 特殊ピット 1	土師器 (壺、甕、 高環、低脚环、 鼓形器台)	堤壠Ⅰ期	建て替え時、 貼床を施す
9	不明	南北 4.5 m	20~10	不明		ピット 7	土師器片 (壺、 甕、高環)	堤壠Ⅱ期	SK-02と切 合う
10	方形	東西 南北 2.6 m × 0.9 m 壁 30 cm	12~5~10	不明		特殊ピット 1	土師器片 (高環、 环)	不明	
11	隅丸方 形	南北 6 m 壁 30 cm	15~20~ 5~10	2		その他のピット 1 (炭化米を含んでいた)	土師器 (甕、小 形壺形土器) 炭化米	堤壠Ⅱ期	加工段の可能 性有
12	方形	東西 南北 3.4 m 以上 × 4.8 m 壁 35~45 cm	20~30~ 8~12	4		その他のピット 6	土師器 (壺、甕、 手づくね、高環)	堤壠Ⅲ期	S1-14と外 15を切る
13	方形	東西 南北 4.1 m × 5.6 m 壁 54 cm	20~10	4		その他のピット 5 (内特殊ピット 1)	須恵器 (壺环、 有蓋高環、把手)	堤壠Ⅲ期	
14	不明	1.0 m 以上 × 2.0 m 以上	20~8	不明		不明	床面からの遺物 なし	S1-12 より先行	
15	不明	南北 6 m 壁 50 cm	20~5	不明		不明	土師器 (高環、 小壺)	S1-12 13、14 より先行	
16	方形	東西 南北 4.8 m × 3.2 m 以上 壁 70 cm	40~50~ 7~10 溝内より炭化 物を検出	不明		ピット 1	土師器 (壺、高 環)	堤壠Ⅲ期	
17	方形	東西 4.8 m 壁 70 cm	なし	なし		なし	須恵器 (壺环、 高環) 土師器 (甕、把 手) 勾玉	堤壠Ⅲ期	周辺に排水施 設と思われる 溝があらぐる

住居 No	平面形	規模 (m) 床面積 (m <sup>2</sup> )	側溝幅-深さ (m)	柱主 穴数	主軸 方向	その他のピット 土壙、痕跡	遺 物	時 期	備 考
18	不明	東西 南北 1 m × 1.2 m 以上 以上	10~14-5	3		なし	なし	堤壠Ⅱ期	他のピット群 と切合う
19	方形	4 m × 5 m 以上 以上 壁 20 cm	住居内を「コ」 の字状にめぐ る 25-10	不明		ピット 2 特殊ピット 1	須恵器 (蓋、坏) 土師器 (壺、小 形态、高坏)	堤壠Ⅲ期	
20	多角形	東西 南北 5.5 m × 7 m 以上 以上 壁 70 cm	12~20-5	4		ピット (支柱穴 か) 特殊ピット	土師器 (壺、壺 手づくね) 須恵器 (壺、壺)	堤壠Ⅲ期	特殊ピット内 から多量の土 器が出土
21-a	長方形	東西 4.2 m × 5.2 ~5.8 m	20~40-6 ~10	2			土師器 (壺、壺)	堤壠 I 期	
21-b	長方形	5.5 m × 6 m 壁 50 cm	26-10	3		東壁に円形の特 殊ピット 3 西壁に方形の特 殊ピット 1	土師器 (壺、壺 高坏、坏)	堤壠 I 期 後半~ II 期前半	ベッド状造構 建て替え時、 貼床を施す
SB- 01	梁桁間 行 2 × 4	3.0 m × 5.2 m		10	N 36°E	-	土師器 (高坏、 壺)	堤壠Ⅲ期	
SB- 02	2 × 3	4.5 m × 3.6 m		8	W 21°E	-	なし	不明	

## II 周辺の歴史的環境

### ◆タテチョウ遺跡 島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡調査報告書』昭和56年3月

国立島根大学の南方水田地帯の西川沖地内を流下する朝酌川河川敷を中心に東西南北400～500mの範囲に所在する大規模な低湿地遺跡。

昭和49～50年、52年、そして59、60年の調査で縄文時代早期から奈良・平安時代にわたる膨大な量の遺物が出土。

出土品は、各時代の土器の他に弥生時代の木製農耕具類、建築用材、土笛（陶埙）、磨製石劍、石戈の鋒様石器、銅鐸、舌様棒状石製品、分銅型土製品、土馬、「驛」と墨書のある須恵器坏など多種多様の遺物が出土、特に縄文、弥生文化研究上貴重な資料が発見された。

### ◆西川津遺跡 島根県教育委員会『西川津遺跡詳細分布調査報告書』昭和56年3月

タテチョウ遺跡から北へ約1.5km上流の朝酌川河川敷を中心とした低湿地遺跡。

縄文時代早期から各時代の遺物が大量に出土。

弥生時代の木製農耕具類、木器、石包丁、石鎌、炭化米、臼、杵、磨製石斧、獸の骨、石巖、投弾、釣針、ヤス、モリ、タモ、ヤマトシジミの貝塚などが出土。

### ◆柴遺跡 島根県文化財愛護協会『主要地方道松江一境線バイパス関係埋蔵文化財調査報告』1976・3

島根県文化財愛護協会が県道松江・境港線バイパス工事に先立ち、昭和51年1月から2月にかけて調査。堅穴住居跡2軒と古墳の周溝部分4箇所を確認した。住居跡の内1号住居跡は、一辺約6.5mの方形を呈し、壁高は約15cm、中央に1.2×0.5m、深さ10cmの炉跡がある。主柱穴は4本あり、柱間は一辺3.8mの方形となる。土器は土師器の壺、高坏で古墳時代前期のもの。2号住居跡は、一辺5m前後（推定）のもので、中央部に0.38×0.3m、深さ0.02mの浅い精円形の炉跡様のものあり。土器は土師器の壺、高坏、蓋、低脚坏の破片でやはり古墳時代前期のもの。

柴I地区の周溝は、幅1m、深さ30cmで、一辺10m近くの方墳が推定される。出雲国4型式の須恵器と円筒埴輪の小片が出土。住居跡付近の周溝は、いずれも一辺10m前後の方墳の周溝の一部と思われ、2号溝からは、土師器高坏2個体分、3号溝からは、須恵器の蓋坏（山陰III期）が出土している。

### ◆山崎古墳 松江市教育委員会『山崎古墳』1984

標高36m前後の丘陵最高所に立地。一辺19m、高さ約2mの基盤上に中央部で55cmの

盛土を施している。

南北長 3.35 m、東西幅 2 m、深さ 15 cm の略方形の掘り方の内側に長さ 2.4 m、幅 60 cm の範囲で木棺が埋えられていたと思われる。

又、掘り方の東北角から長さ 4 m、幅 20 cm、深さ 27 cm の細長い排水溝が埴縁へ続き、溝内には下半部に角礫が多数積み重ねられていた。

副葬品は刀 1 口、剣 4 口、鉗 2 本、鐵鎌 47 本以上。5 世紀後半頃の朝的川南部の有力豪族の墓で、鐵製武器類を多数保有することによって、この地域を掌握していたものと推定される。

#### ◆柴古墳群 松江市教育委員会『柴古墳群』 1985

標高 25 m 前後の低丘陵上に 3 基所在。1 号墳は、丘陵の先端部にあり、直径 7 m、高さ 15 m の基盤の上に 30 cm ほど盛土したもの。基盤上の旧表土中より古墳時代前期の壺の破片が出上。2 号墳は、直徑 10 m、高さ 10 cm の円形の基盤に、15 ~ 40 cm の盛土を施す。墳丘表面や盛土中から、5 世紀中頃の須恵器大型壺の破片が故意に破碎された状態で約 100 片出土。主体部は、幅 30 cm、長さ 2 m 余りの土壤があったが、前述の須恵器片が入り込んでいる以外副葬品は皆無であった。

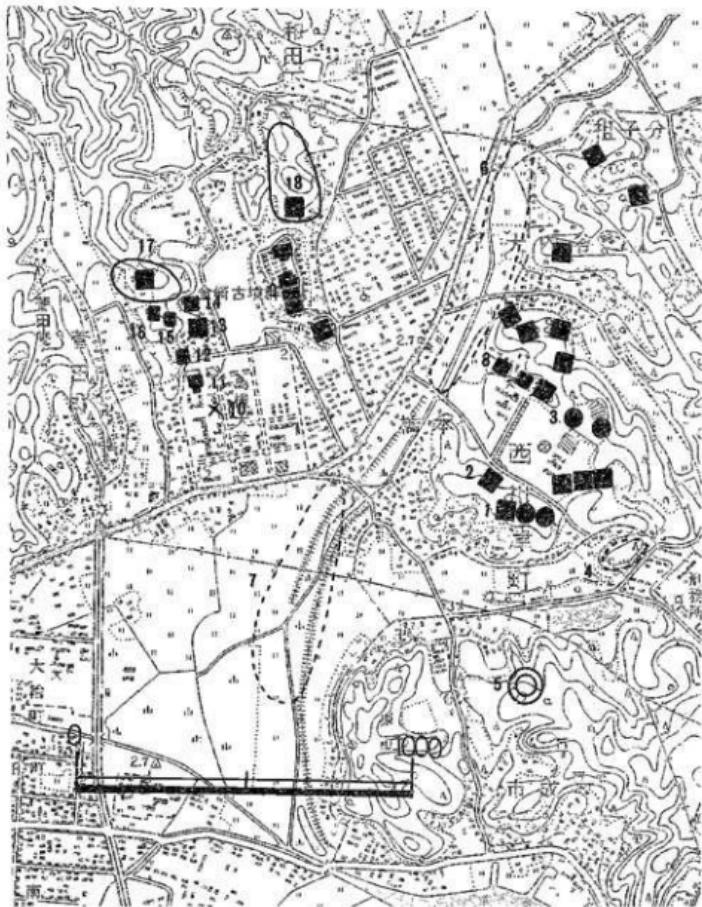
3 号墳は 10 × 11.5 m、高さ約 20 cm の方形基盤の上に 5 ~ 20 cm の盛土を施すもの。主体部は長さ 3 m、幅 1 m の長方形の礫床を有する墓壙で東部に枕石があった。副葬品は皆無であった。

これらの古墳は、5 世紀代に相前後して築造されたものと推定される。

#### ◆金崎古墳群 松江市教育委員会『史跡金崎古墳群』 1977

第 1 号墳 全長 32 m の前方後方墳。前方部長 12 m、同幅 14 m、同高 1 m、くびれ部の幅 10 m、後方部長 20 m、全長 32 m、同幅 23.5 m、同高 3 m を計る。後方部には主軸に平行する竪穴式石室がある。石室は、長さ 3.8 m、幅 1.35 m、高さ 1.0 m を計る。石室内からは、須恵器（脚付壺 1、長頸壺 1、異形連管小壺 1、器台 1、壺 4、有蓋高壺 2、無蓋高壺 5）計 15 個、鐵製品計 5 点（漆塗鞘付直刀 1 口、鉗 1、剣 1、U 字型鍬先 1、刀子 1）、青銅製品計 2 点（仿製内行花文鏡 1 面、紡錘車輪製品 1）、玉類（子持勾玉 2、碧玉製練玉 2、碧玉製管玉 4、碧玉製勾玉 5、瑪瑙製勾玉 6、水晶製垂飾 1、ガラス製小玉及び滑石製円玉多數）が出土している。石室は、やや大きめの割石を積み重ね、床面は礫床、天井石は、厚み 15 cm 前後の大石 6 枚を重ねている。

前方部は、地山をかなり削り取り、その上に盛土を 3 m 近く、硬くつき固めている。據には、高さ 70 cm ほどの石垣状の列石がめぐっている。



1. 柴古墳群
2. 山崎古墳
3. 馬込古墳群
4. 柴遺跡
5. 堤畝遺跡
6. 西川津遺跡
7. タテチヨウ遺跡
8. 馬込山古墳群
9. 金崎古墳群
10. 菓師山古墳
11. 青田丘古墳
12. 小丸山古墳
13. 宮田1号墳
14. 宮田2号墳
15. 浜弓1号墳
16. 浜弓2号墳
17. 上浜弓古墳群
18. 福山古墳群

第1図 周辺の遺跡分布図

**第2号墳** 第1号墳の南側に隣接する。一辺約10m、高さ1mを計る。古墳の割の線は、わずかに東辺と南辺で認められる。墳頂部には、盗掘の凹地も認められ、墳丘は、全体にくずれている。円筒埴輪片などは見当たらない。

**第3号墳** 第2号墳の南側に所在する。2号墳と3号墳との間には、幅10mの平坦地があるが、加工したものであろう。一辺20m、高さ2mを計る。墳頂部は盗掘され凹地が認められる。墳裾からは円筒埴輪片が発見されている。

**第4号墳** 第3号墳の東西約90mの尾根上に立地する。ここは、金先山の丘陵の突端に位置する。方墳というよりは、長方形墳と呼ぶにふさわしく、長辺26.5m、短辺17mを計る。その差9.5mもある。墳裾には、葺石が散在している。高さは3mあり、墳頂部は、同じく平坦な長方形となっている。当古墳は四隅が幾分突出気味であり、安来市荒島一帯で確認されている四隅突出型方墳の可能性も無くはない。

**第5号墳** 第1号墳の北方100mばかりの尾根の突端に位置する。全長22mの前方後方墳である。前方部長5m、幅7.5m、高さ1m、後方部長17m、幅20m、高さ2.5mを計る。前方部は、比較的短小である。後方部上端から円筒埴輪片と須恵器高坏が出土している。

**第6号墳** 一辺20m前後、高さ1.5~2mの方形状の墳丘を有し、盛土は殆どない。主体部は、礫床を有する木棺直葬墓で、土壤は長さ5m、幅70cm、深さ20cmを計る。その床面には、長さ4.5m、幅48~45cm、厚み7~8cmの小躰が敷いてあった。遺物はなし。昭和38年、調査中に消滅。

**第7号墳** 第6号墳の西北に接して位置する。12×7.5m、高さ2.5mの方墳。内部構造、副葬品ともに認められなかった。昭和38年、消滅。

**第8号墳** 第7号墳の西北に隣接して営まれた方墳。一辺9.4×7m、高さ1.5mを計る。第9号墳と本墳との中間から埴輪円筒片2個が発見されたが、所属は不明である。内部主体は、中央部に長さ2.6m、幅30~22cm、深さわずかばかりの狭長な墓壙が掘られている。遺物は何ら検出されなかった。昭和38年、消滅。

**第9号墳** 第8号墳から西へ33mの丘陵突端に営まれた方墳。14m×11m、高さ1.5mを計る。内部主体は、不明であるが、墳頂部で表土から30cm余りの盛土中から、須恵器蓋坏3合、甕1個、鐵鎌1束がほぼ同一平面から発見された。昭和38年、消滅。

**第10号墳** 第5号墳の南側下方に位置する方墳である。一辺11×12m。高さは2m。内部主体、副葬品とも検出されなかった。昭和38年、消滅。

**第11号墳** 第10号墳の東側に接して営まれた方形墳。一辺9m、高さ2m、墳丘東北隅

から埴輪細片が採集されている。内部主体は、長方形の土壙で幅 85~90 cm、深さ 30~40 cm を計るが、長さは不明である。副葬品は何ら検出することが出来なかつたが、土壙外の位置で須恵器壙と思われる細片 4 個が発見されている。この他、埴丘西北側の地山面から縄文式土器片が 1 個体分発見されたが、これは、晩期の変形土器である。昭和38年、消滅。

### III 調査の概要

#### (1) 第1調査区

本調査区は堤壠遺跡の最西端の標高 20 m ~ 25 m のなだらかな斜面上に位置する。昭和58年6月の第一次調査が終了したあの造成工事中に、これと向かい合う西側丘陵斜面（第二次調査の第2調査区）と丘陵西端の工事用進入路から丘陵に上る入口付近（第1調査区）で土器片が採集されたので調査を行つたものである。当初、本調査区はこの土器出土地点を中心として 20 m × 20 m の方形グリッドを N 20° E に設定し調査を開始したが、グリッド北側と東側で住居跡が検出されたため調査区を拡張する必要が生じ、結局全発掘面積は 788 m<sup>2</sup> となった。

本調査で検出した遺構は竪穴式住居跡 2 棟（S I - 05, S I - 09）、溝（S D - 01）、土壙 2（S K - 01, S K - 02）、及び柱穴状遺構 8 であった。

##### ◆ S I - 05

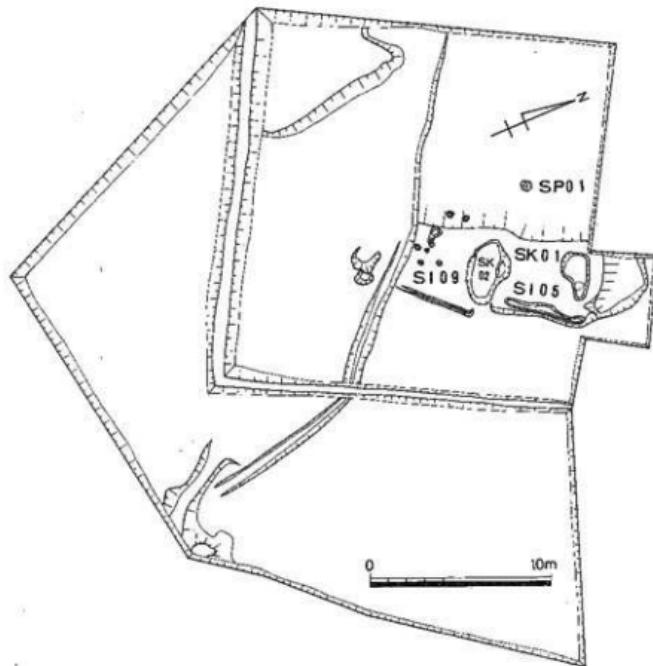
本調査区の北東側に、上端幅 75 cm の南北に走る落ち込みが検出されたので、これを拡張したところ、南北 4.5 m で南には直角に変化する、高低差 70 cm の階段状の遺構との内面に沿う形で、幅最大 50 cm、深さ 20 cm の溝が検出された。

また北側では東西 2.5 m、南北 1.7 m にわたり、赤褐色の焼土がスラッグ状に検出されたほか、周辺には土師器片や土鏡が出土したので住居跡であると考えられたが、柱穴等は検出出来なかつた。北側の拡張区域は約 3 m ほどで急な斜面となつて終つていた。

土師器片はいずれも劣化が激しく非常に脆い状態となっており細片が多く実測不能な遺物が多かつた。わずかに高壙 1 片と甕片 1 片が実測可能であった。

1-01 第5図は高壙部片である。口縁立ち上がり部分での直径は 10.2 cm を計る。壙部と脚部の取り付け部の直径は 3.6 cm を計る。壙部と口縁の境がわずかに段状を呈する。手法等は不明瞭であった。

1-02 は口径 14.0 cm を計る。甕片と思われる。内外面とも黄褐色を呈し、最大 1.5 mm の砂粒を混合する。口縁部は内外面ともナデ調整、体部は外面にハケ目調整、内面ヘラ削り調



第2図 第1調査区平面図

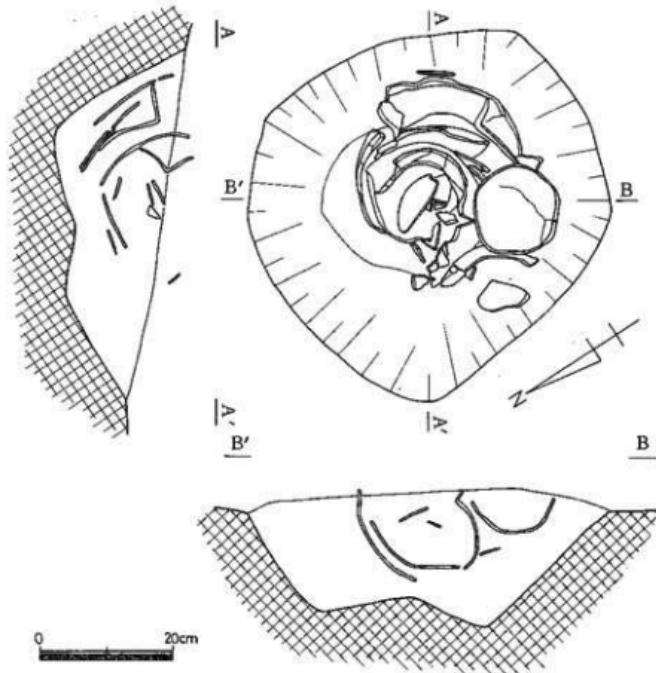
整痕がみえる。

いずれも須恵器の出現に相前後する時期のものと考えられる。

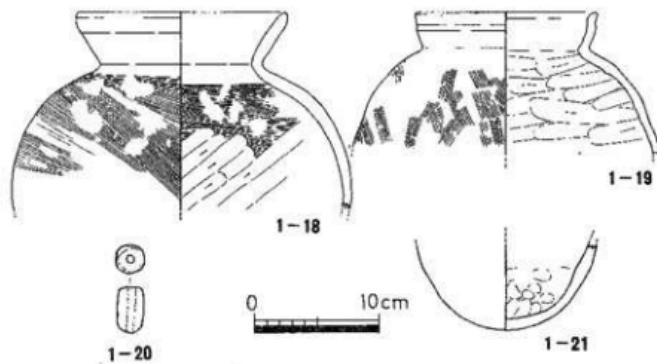
#### ◆SI-09

SI-05の南側に隣接する。SI-05と同様に東側で上端幅20cm、深さ10cm、南北長4.5mの溝が検出されたが、SI-05との間には東西長3.7m、南北長2.4mの土壌(SK-01)があって北端は西に直角に折れ曲がったところで終り、明確な住居跡のプランは検出できなかった。南側は、本調査区の南東角から斜に走る幅1.0m、深さ20cmの溝(SD-01)によって切られて不明であった。この住居跡内には、直径20~25cm、深さ20cmの柱穴状のピットが4穴と、東西長1.2m、深さ25cmの土壌状の遺構が、又、住居跡西端と思われる位置で、径30cm、深さ20cmの柱穴状ピットが3穴検出された。

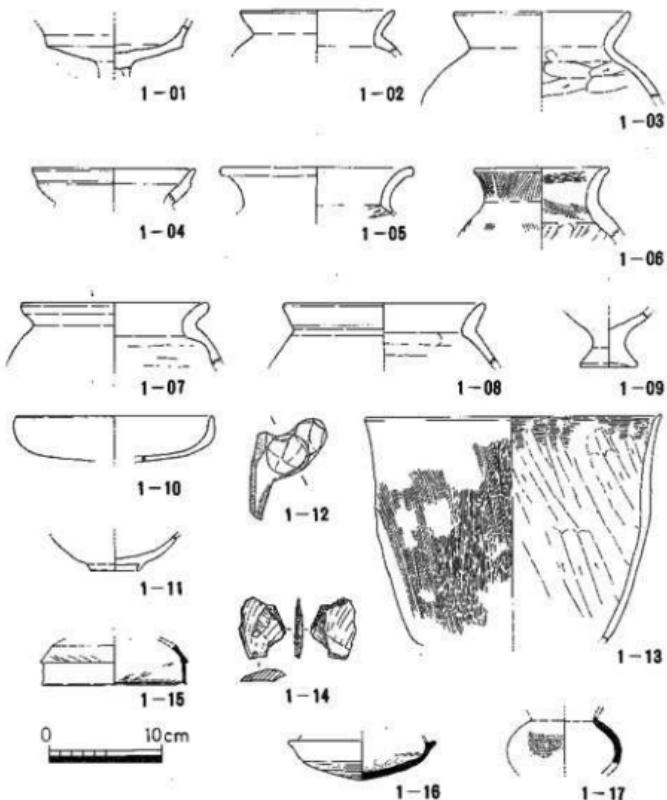
遺物は、東側の溝に沿った1mほどの円形内に土師器片が集中して検出された。この土器群は大きいもので10cmほどあり、その数90片以上にのぼったが、いずれも劣化が著しく



第3図 SP 01実測図



第4図 SP 01出土遺物実測図



第5図 第1調査区出土遺物実測図

実測は困難であった。他に須恵器等の遺物はなかった。

◆SD-01

本調査区の南東角より始まり、調査区中央を通り西側に至る幅最大1.0m、深さ20cm、の溝状の遺構が検出されたので、これをSD-01と呼称した。

遺物はSI-09付近の溝北側に土師器片が2片出土した他は無く、性格も不明であった。あるいは山水の自然排水路かもしれない。

◆SK-01

SI-05とSI-09の中間に於ける土壌で、東西長3.7m、南北長2.4m、深さ35cmを計る。遺構は、この境内に土師器片が数片検出された他は無かった。

#### ◆ SK - 0 2

S I - 0 9 及び S D - 0 1 の南側で検出された東西長 1.4 m、南北長 1.3 m の土壌で西側部分を欠いた円弧状を呈していた。遺物は無かった。

#### ◆ SP - 0 1

ピット状の遺構は S I - 0 9 内で 7 箇所検出したが、他に S I - 0 5 の西側 5 m のところで、径 54 cm、深さ 20 cm のピットが 1 箇所検出された。この中には底部を欠いた土師質の甕と、环 2 個がおかれていた。（第 3 図）

1-18 は、このうち甕の破片を復元したものである。口縁外径 17.0 cm、胴部最大径 27.0 cm を計る。胎土は 8 mm ほどの小石を含んでおりやや粗いが、焼成は良く保存状態も良好であった。内面は黄褐色を呈するが、外面はススが付着しかなり使い込んだ様子がうかがえる。口縁は球形の体部から「く」の字に外反してのびており、端部には粘土を張り付けた痕跡が認められる。外面、内面口縁部はハケ目調整。胴部に至りヘラ削り調整痕がある。

本調査区は他の調査区と比較して、傾斜が少なくある程度の平坦面を有していたので、住居を営む条件としては容易であると考えられたが、調査の結果は、住居跡と認めうる遺構は 2 棟しかなく、しかもこれらの柱穴については確定出来なかった。また遺物の保存状態も悪く、時期的な確証を得られる好資料も乏しかった。ただ、SP - 0 1 内の甕片等から考えると、古墳時代の中期に隣接、相前後して営まれていたように思われる。又、堤廻遺跡の他のすべての住居跡と比べて見ても、新しい時期に属するものではないかと考えられる。

#### (2) 第 2 調査区

第 2 調査区は、遺跡のほぼ中央部にあたる尾根間の付け根部にあたるところに位置する。南は第 5 調査区と隣接し、北東部は削り取られてそのまま北側斜面へと急傾斜する。

調査は、20 m × 20 m のグリッドを設定し、調査区西側で竪穴住居 3 棟、東側で約 50 個のピット群、及びその間に竪穴住居 1 棟を検出した。ピット群は、まだ続くものと思われたため、さらに南側へ隣接して 20 m × 7 m の拡張区を設定した。この拡張区で、10 個余りのピットと南側に竪穴住居を 1 棟検出できた。

以上検出した遺構は、竪穴住居跡は計 5 棟、ピット 64 個で、ピット群は掘立柱建物遺構と考えられ、2 棟を復元した。（竪穴住居跡は、5 棟の内 2 棟に建て替えが認められた）

これらの遺構は、竪穴住居が古墳時代前期～中期、堀立柱建物は古墳時代中期 1 棟、不明 1 棟である。

◆ SI - 0 6

第2調査区の北端緩斜面に位置し、SI - 0 8 の北に存在する。

住居の北東部半分は、工事用の進入路を作った時に削平されおり、南西側の残存部で東西軸3m、南北軸5mを計る。平面形は方形である。床面はほぼ平坦であり、深さは西壁で32cm、南壁で24cmあった。側溝は認められなかった。ピットは4個を数え、はっきりと柱穴と考えられるものはないが、P - 0 2、P - 0 3、P - 0 4は西壁に沿って1列に並ぶことから、支柱穴の可能性を残す。P - 0 1の埋土からは、土師器の高壺が出土し、南壁に向かって幅20cm、長さ70cmの溝が走る。（第8図、土器観察表）

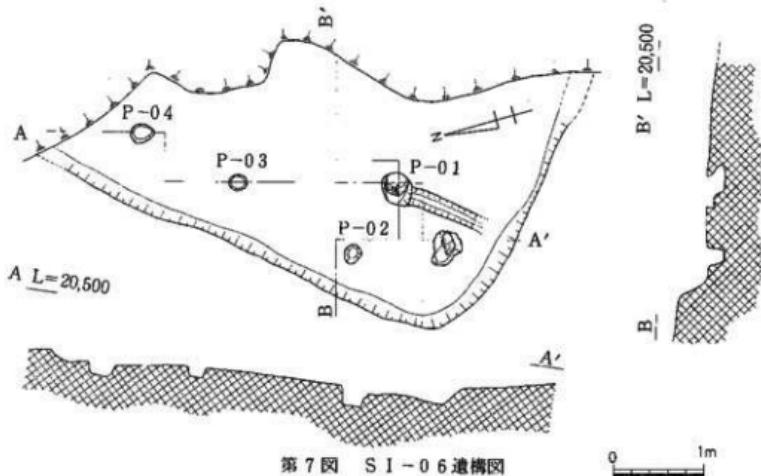
各柱穴プランは、P - 0 1は東西35×南北36×深さ20cm、以下同じくP - 0 2は20×20×20、P - 0 3は20×20×10、P - 0 4は22×24×24を計る。

床面からは、焼土や炭化物は検出されなかった。（第7図、第9図）

遺物は、住居の南西隅で、多数の土師器片と若干の須恵器片を検出したが、図化できたのは土師器が壺1、甕1、高壺8、低脚壺4、楕3、腹形土器6（うち把手1）、埴輪片1、須恵器が蓋壺1、壺身2、甕口縁1、高壺脚部1である。床面には40×30×15cmの転石があった。（第10図）



第6図 第2調査区全体図



第7図 SI-06 遺構図

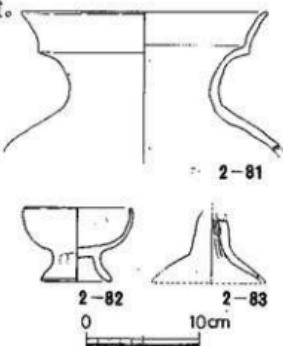
土師器をみると、小型壺の口縁2-01は、斜上方に立ち上がり、口縁端部で外反する。外面は橙色で、内面は暗橙色でやや硬い。

壺2-02は、「く」の字状口縁で、端部がやや肥厚する。頸部外面に、ハケ目痕が残る。内面頸部より下にヘラ削りを施す。外面は黒いススが付着し、黒褐色で内面は赤褐色。胎土は硬い。

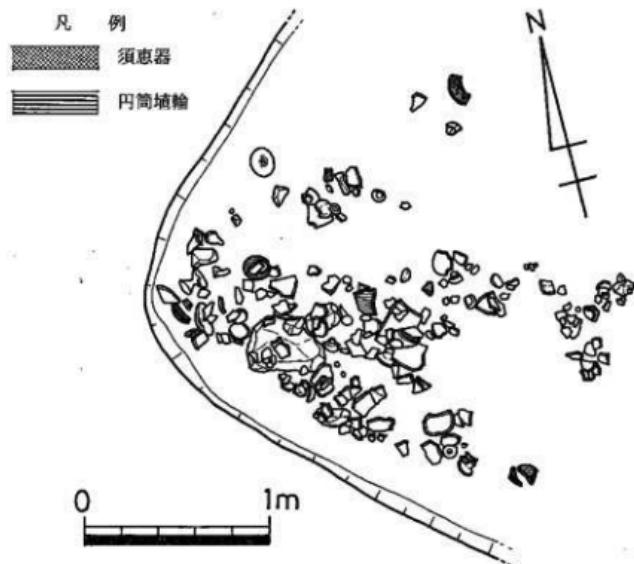
高壺2-03、2-09は、口縁部が外反して開き、接合部の段はわずかに残る。2-03、2-09ともに剥離が激しい為、内外面とも調整は不明。2-03は外面が赤褐色、内面は淡橙色。2-09は内外面とも赤褐色でやや軟質。

2-04は、椀状の壺を持つもので、接合部差し込み式。脚柱部は円筒形で、裾部で屈曲し「ハ」の字状に開く。内面は、斜下方へ一気に下り、平坦部に至る。脚部外面はヘラ磨きで、その下から内面にかけて横ナデである。壺部は摩滅激しく不明。外面壺部から脚部にかけ赤色顔料を塗る。色調は赤褐色で硬質である。

2-05は壺部が内彎しながら立ち上がり、口縁端部近くで外反して開く。脚柱部は外反



第8図 SI-08, SI-06 P01内出土遺物実測図



第9図 S I - 0 6 遺物出土状況図

し、裾部で屈曲しやや内弯しながら開く。内面は中程で稜をつくり、端部へ至る。調整は、脚柱部内面にハケ日を残す以外は不明。色調は赤褐色。

2-06は、楕状の坏部のみで、口縁端部は内面に傾き、段をなす。内面底部に暗文状のヘラ磨きを施す。その他は、調整不明。赤褐色で胎土硬い。

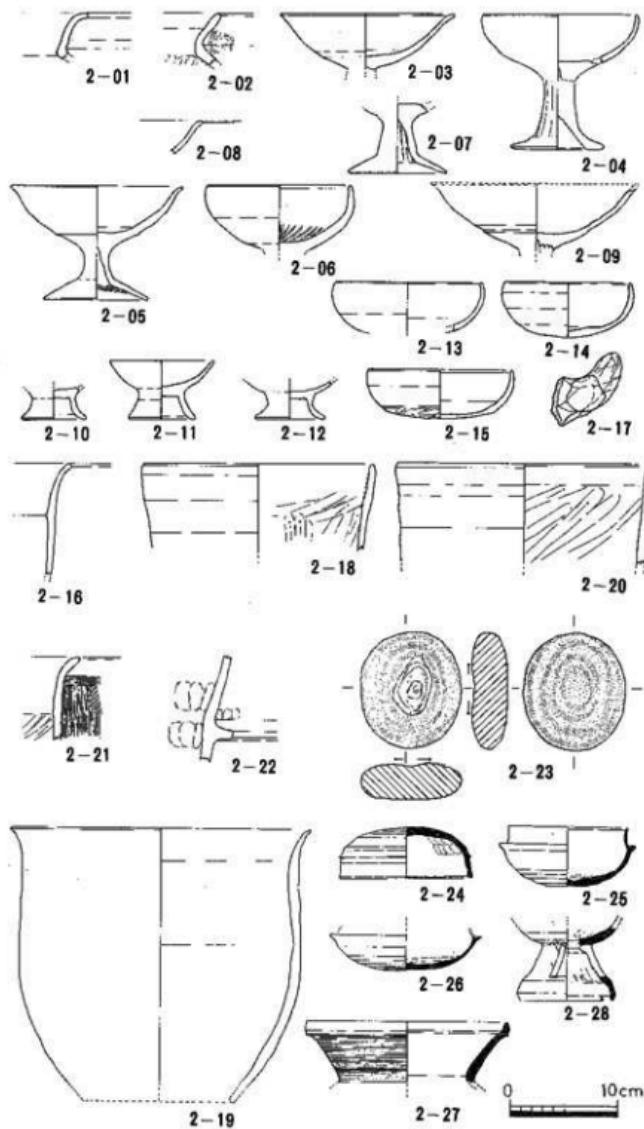
2-07は、脚柱部のみで内面にナデを施し、外面は不明。色調は赤褐色でやや軟質。

2-08は、赤褐色で硬く薄い。

低脚坏は2-10、2-11、2-12がある。脚部は外面が外反しながら開き、内面は水平な天井部より外反しながら開き、端部に至る。坏脚部は、外反しながら斜上方に立ち上がり、端部でわずかに内向する。器厚は薄く、調整は脚部内外面ともナデ、もしくは横ナデ。坏部外面はナデ、内面不明。色調はとともに赤褐色で胎土硬い。

椭形土器2-13、2-14、2-15はいずれも器厚が薄く、口縁端部がやや内傾し、丸底もしくは丸底に近い平底をもつ。

2-15は底部欠損の為、高环となることも考えられる。調整は外面口縁部から内面にかけて横ナデ、又はナデ、外面底部に横方向のヘラ削りを施す。2-15は内外面とも横ナデ、2-13は調整不明。色調は、2-15が淡赤褐色で胎土がやや軟らかく、2-13、



第10図 S I - 0 6 出土遺物実測図

2-14は赤褐色で硬い。

瓶形土器2-16、2-19、2-21は口縁が大きく外反して開き、そこから真直ぐ下り底部付近で内彎しながら内側へ狭くなる。2-18、2-20は口縁からやや内彎しながら真直ぐ下方にのびる。口縁部は細くシャープなもの（2-19）と、やや厚いもの（2-16、2-18、2-20、2-21）とがある。把手2-17は外上方に向く円柱状で、全体的にヘラ削りにより面を整える。2-16、2-19は剥離が激しく調整はよくわからないが、口縁部横ナデ、その下に継のハケ目がわずかに残る。2-18は外面は不明、内面ヘラ削り。2-21は内面、口縁部横ナデ、その下は継のハケ目、それ以下は横ハケ。内面ヘラ削り。2-20は口縁内外面横ナデ。色調は2-19が淡橙色、2-16、2-17が乳白色、2-18は赤褐色、2-20、2-21は橙色で、胎土はいずれも硬い。

この他、土師器では実測不可能ではあるが、高坏の破片が多量に検出され、大型甕の胴部や瓶形土器の破片も見受けられた。

埴輪片2-22は、円筒埴輪の口縁部付近でタガが1段残る。内外面、及びタガは風化し、調整もわかりにくいか外面のタガ上部と内面に指頭圧痕が残る。2-23は、住居の削平されていった北側斜面から検出された。

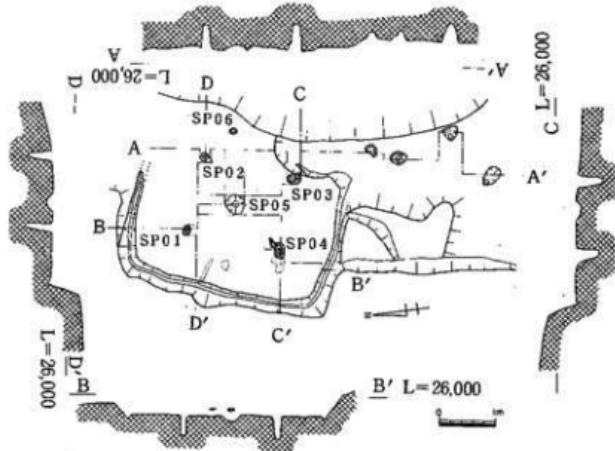
次に、須恵器では蓋坏の蓋2-24はほぼ完形。天井部はやや丸みをおび、天井部と口縁部を界する稜は、短いながら鋭い。口唇には段がつく。調整は天井部外面の3分の2前後までヘラ削りを施し、内面は指頭圧痕が残る。ろくろ回転方式は右回り。薄青灰色で胎土は堅微。蓋坏の坏は、2-25と2-26があり、2-25はやや外反しながら上方にたちあがり、口唇部に段をなす。受部は斜外方向にのび、底部はやや丸みを帯びる。調整は底部外面に2分の1程の回転ヘラ削りを施し、内面は指で整えた後、回転ナデで粘土接合痕と見られる粘土のすじが周回する。ロクロ回転方向は右回り。灰白色で胎土はやや軟質、2-26は立ち上がりを欠く。受部は横方向にのび、端部は薄くやや鋭い。底体部は口縁に比して浅く、底部は比較的平底に近い。底部外面2分の1弱に弱い回転ヘラ削り、内面には回転ナデが施されている。ロクロ回転方向は右回り。灰白色で胎土はやや軟らかい。

甕口縁2-27は、ゆるやかに外反しながら斜上方に立ち上がり、端部を上方へ屈曲させており、口縁端部にわずかな凸線がめぐる。端部内面には一条の沈線文を施す。口縁端部から内面にかけて横ナデを施す。ロクロ回転は左回り。白灰色で、胎土は堅微。高坏脚部2-28は、わずかに内彎しながら「ハ」の字状に開き、端部で稜を作り内向する。坏部外面回転ヘラ削り、内面横ナデ、脚部内外面ともに横ナデ、一部をヘラ削りする。内外面に自然釉付着。緑灰色で、胎土は硬く、堅微。長方形孔が四方向にある。

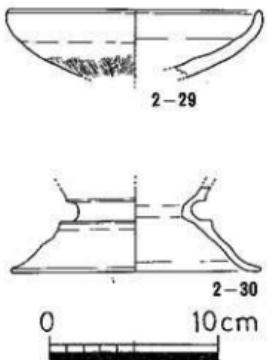
以上の遺物のうち、2-22の円筒埴輪片は、地山面から40cm以上も上の出土であることや、埴輪片が1片のみしかないことから、住居跡と直接関係はないものと思われる。近辺に古墳はないが、今回の調査以前に消滅してしまった古墳に使用されたものと考えられる。

#### ◆ S I - 0 7

第2調査区の中央部西端に位置し、東側半分をS I - 0 8に切られている。平面形は方形で西壁で3.7m、南北軸の残存部で1.5mを計る。床面はほぼ平坦で、深さは西壁で50cm、北壁で20cmある。側溝は、幅10~12cm、深さ6cmのU字状で、南壁、北壁とも3m程度伸びて切られている。ピットは6個を数え、P 1、P 2、P 3、P 4は配置と深さから、主柱穴と考えられる。床面中央のP 5は径40cmの範囲で焼土が広がり、その中央部に径18cm程の炭化物を含んだプランであった。これを掘り下げるところ、皿状の浅い掘込みで、灰跡と考えられる。各柱穴プランは、P 1より東西18cm×南北12cm×深さ36cm、P 2は16×20×42、P 3は24×20×48、P 4は28×18×38、P 5は34×34×10、P 6は10×14×10を計る。この他、住居外の南側にピット4個を検出したが、S I - 0 7との関わりや、性格は不明である。（第11図）



第11図 S I - 0 7 遺構図



第12図 S I - 07 遺物実測図

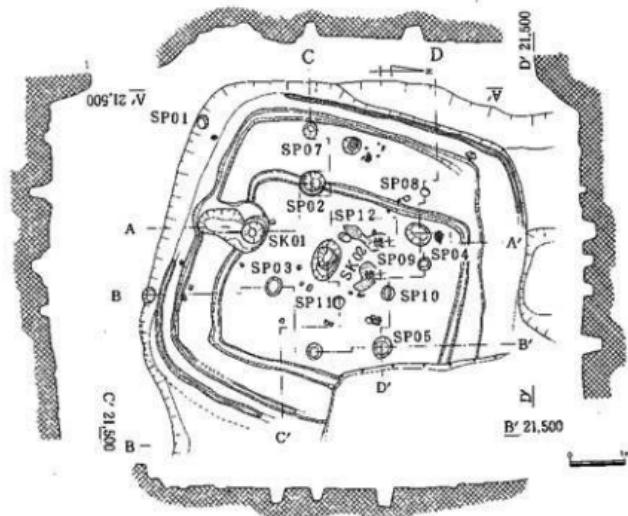
遺構に伴った遺物はなかった。楕円土器2-29は住居跡の南側、削り取られて一段低くなった場所の埋土より検出したもので高窓の窓部の可能性が強い。調整は、外面底部ハケ目、口縁部から内面にかけて横ナデ、内面底付近で不定方向のナデ。赤褐色で胎土は硬い。鼓形土器2-30は、住居外西側の埋土中より検出された。器形は小型で稜はやや丸みを帯び、シャープな感じを欠き、口唇部は外に開く。外面から内面上半部は横ナデ、下半部は窓削りを施すと思われるが摩滅激しく単

位は不明。赤褐色で胎土は軟質である。住居跡内からの出土遺物がないため、遺物から見た時期判定はできない。遺構の切りあい関係が、S I - 07 の南北の壁の一部と東壁がS I - 08 に切られていることから見て、S I - 08 に先行する時期のものと考えられる。

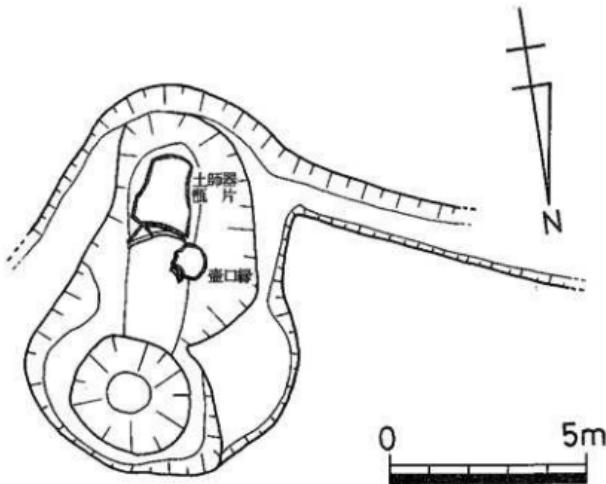
#### ◆ S I - 08

2区の中央よりやや西にずれたところに位置し、東にはピット群があり、西は西壁がS I - 07 の東壁を切った形で隣接する。北東隅は工事の進入路で削平されている。平面形は、隅丸方形で東西軸6m、南北軸6.5mを計る。床面は2段になっており、側溝は3重に廻り建て替えがあったと考えられる。当時のものは、東西軸3.4m、南北軸4.1mの小規模な長方形住居で床面は南から北へやや傾斜している。建て替え後の深さは、西壁で最大74cm、北壁で最小10cmを計る。又、東壁の範囲は側溝により確認された。側溝としてはSD-03が当時のものと考えられ、東西3.4m×南北4m、幅15~20cm、深さ5cmのU字状を呈する。建て替え時の側溝SD-01は、幅8~10cm、深さ2~5cmの浅いものでU字状を呈し、SD-02は幅15~20cm、深さ5~10cmでU字状である。ピットは大小14個を数えるが、当時の主柱穴と思われるものは、確認できなかった。建て替え後の柱穴はP2、P3、P4、P5の主柱以外に、P13、P14が支柱に使われた可能性を残す。

柱穴のプランは、P2より東西46cm×南北46cm×深さ40cm、P3は36×30×20、P4は40×48×24、P5は32×26×30、P13は30×30×20、P14は32×34×22cmを計る。P2はSD-04を南北に切っている。ピット以外では、SK01、02の二つの土壤状遺構を検出した。このうち、SK01は東西62~94cm、南北140cm、深さ20~40cmの瓢箪形をした2段堀込みの土壤で、建て替え時の床面から検出され、SP04とともにSD



第13図 SI-08遺構図

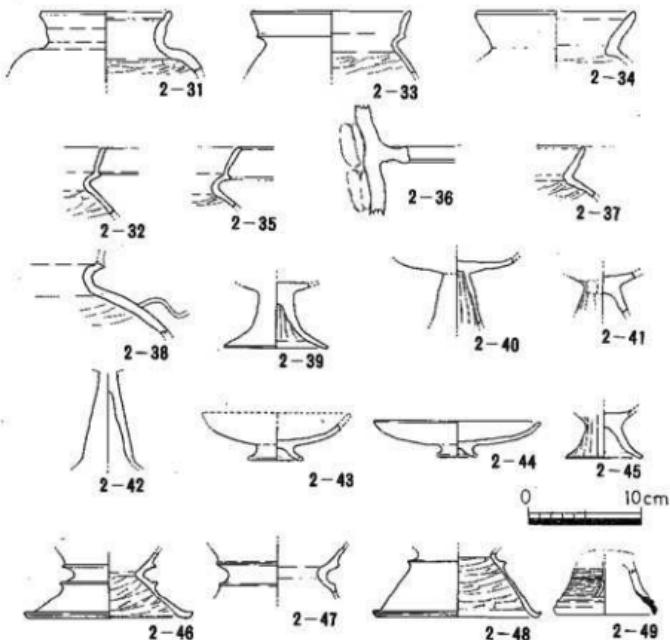


第14図 SI-08内SK01遺構図

-03を切る。土壤内の埋土から、土師器の瓶片と壺口縁が出土した。SK-02は当初の床面から検出したもので、東西76cm、南北48cm、深さ26cm、楕円形の土壤で、埋土中に炭化物が多く含まれていた。なお、これらの土壤の性格について詳細は不明だが、SK-01からは溝のがび、埋土から土器が出土すること等から上部に何らかの設備をおいていたものではないだろうか。床面のほぼ中央のSK-02の近辺に、2層にわたって焼土が検出された。これらも、当初のものと建て替えたものと思われる。

以上のように、SI-08は当初SD-03がめぐる範囲で営まれていたものをSD-02の範囲まで貼床を行い、拡張して使用したと考えられる。

遺物は、床面直上と覆土の褐色土から検出し、須恵器が1片とあとはすべて土師器であった。そのうち図化できたものは壺1、甕7、高环4、低脚环3、鼓形器台3であった。褐色土から検出した遺物を見ると、甕2-31、2-32、2-33、2-34、2-35は新古の型式が混在する。2-32、2-33、2-35は全体的に薄く、シャープな作りで、複合口縁をもち、口縁端部をカットする。調整はいずれも外面から内面口縁部が横ナデ、それより



第15図 SI-08出土遺物実測図

下は横鎔削りを施す。2-32は赤褐色、2-33は乳白色、2-35は淡褐色を呈し、胎土は硬い。2-31、2-33は口縁が肥厚し、仕上げも荒い。2-31はわずかに複合口縁の面影を残し、口縁端部は斜上方に短く、摘み上げられる。器厚は口縁から胴部に至るまで厚く、肩がはる形態を示す。調整は、外面から内面口縁部にかけて横ナデ、それ以外は鎔削り。2-33は「く」の字状口縁で、口縁端部でわずかに内向する。口縁内外面とも横ナデ、内面胴部鎔削り。乳白色で胎土やや軟質。同層から出土の高坏2-39、低脚坏2-43を見ると、2-39は脚柱部がやや短く、据部から外方へ「ハ」の字状に開く。内面は次第に外反しながら外へ開き、端部に至る。調整は不明。2-43は脚部は低く浅い。坏部は脚部の径に比べてかなり大きくなると思われる。調整は内外面ともナデ、乳白色で胎土硬い。鼓形器台2-46、2-47はいずれも小型で、稜が2-46の方は細くシャープだが、2-47はやや丸い。2-46は底部口縁が外方へ開き、端部で、斜上方に立ち上がり、一条の凹線に入る。2-46、2-47とも外面と内面上半部横ナデ、内面下半部横鎔削り。2-46は橙色、2-47は赤褐色で胎土硬く薄手。

床面直上の遺物を見ると、壺2-37、2-38は、2-37が「く」の字口縁をもち、口縁端部を内側に折り込む。器厚は薄く、胎土硬い。色調淡褐色で、調整は剥離の為不明。2-38は、口縁部から肩部にかけて残存するが、大型の様相を呈する。口縁外面は、横に突出する稜が残るため複合口縁だと思われ、肩部に波状の凹線をつける。調整は外面から内面口縁部まで横ナデ、以下鎔削り。赤褐色で硬い。

壺2-39は肩部に幅1mm、長さ1.5mmの突帯をつける。同様のものは、出雲市の山地古庄<sup>1</sup>墳出土の壺柄に見られる。外面は横ナデ、内面は指で整えた後、横ナデを施す。色調は、外面突帯より上は黒灰色、その他は乳白色、胎土は硬い。肩部は坏部の一部と脚柱部のみ残存し、脚柱部は、接合部分より緩やかに外反しながら斜下方にのび、据部から聞く種類と考えられる。調整は、2-40が内面にしばり痕跡を残すが、その他は調整不明。2-41は外面接合部を指ナデ、それ以下を鎔削り、内面横ナデ、それ以下は鎔削りを施す。外面には赤色顔料が付着する。2-42は外面と内面とも横ナデ。2-40は乳白色、2-41、2-42は赤褐色でやや硬い。

低脚坏は2-44、2-45がある。2-44は、2-43と同じく脚部は低く径も小さいのに対し、坏部は浅く大きい。2-45は脚部の高さ、径とも2-44よりも大きい。調整は、2-44が内外面横ナデ、2-45の方は外面鎔削り、内面横ナデ、外面に赤色顔料付着。色調は2-44が橙色、2-45が赤褐色で硬い。

鼓形器台2-48は稜が細くシャープである。形態は底部口縁部までやや外反しながら開

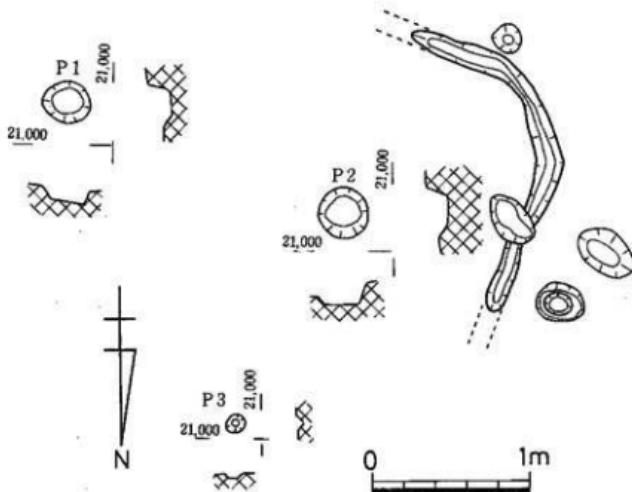
き内彎したのち端部に至る。端部は斜上方にもち上がり、わずかに一条の凹線がめぐる。外面横ナデ、内面窓削り。当住居跡の時期は、2-37の様に口縁端部を内側へ折り込む様な形態の甕の出土することやその他の複合口縁を有する甕や鼓形器台の特徴から見て、小谷式土器に並行する時期のものと考えられる。

この他褐色土層からは、須恵器の高環脚部2-49が出土している。わずかに内彎しながら「ハ」の字状に開き、一条の凹線をめぐらせたのち内傾し端部に至る。内面は端部において外反するため、器厚が薄くなる。脚部外面は、回転カキ目調整、端部からは内面は横ナデを施す。胎土はやや軟質で焼成もやや不良。長方形孔が三方向に穿たれている。

注1 出雲市教育委員会「山地古墳発掘調査報告書」1986年3月

#### ◆S I - 18

第2調査区の東側にあるピット群の北端に位置する。堀立柱建物を建てる時に削平されたと考えられ、南西隅に側溝を残すのみである。残存する側溝は、東西1m、南北1.2m、幅10~15cm、深さ5cmを計る。床面は北へ緩く傾斜するが、削平された可能性が強く、本来はもっと平坦であったと考えられる。ピットは、側溝の内側にあたると思われるところに、切りあっているものも含めて4つを数える。堀立柱建物との切りあいは、ピットがいずれもそう深いものではないため、どのピットがS I - 18の関連であるか明確でない。た



第16図 S I - 18 遺構図

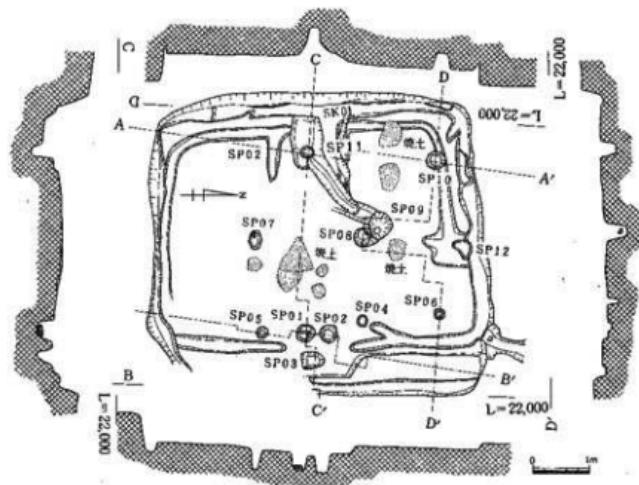
だ、位置的したことから考えると、P 1、P 2、P 3が主柱の可能性を残す。P 1と、P 2、P 3のプランは東西 32 cm × 南北 32 cm × 深さ 14 cm、30 × 26 × 14 cm、12 × 12 × 6 cm を計る。床面からの焼土及び、遺物は検出されなかった。

遺物は全くなかったが、遺構の切りあい関係から見て、ピット群の設けられた時期よりも前ではないかと思われる。

#### ◆ S I - 2 1

第2調査区の南端に位置し、ピット群の南西、S I - 0 8の南に存在する。住居の東壁の一部が搅乱により削平されている。平面形は方形で、東西軸 5.5 m、南北軸 6 m を計る。床面はやや南側に傾斜しており、深さは最大南壁で 50 cm、最小東壁で 10 cm を計る。側溝は、北壁の東半分と南壁の東半分を共有しながら 2重に回っている。床面が 2重になっていることから、建て替えのあったものと考えられる。(第17図)

当初の建物の側溝と思われる S D - 0 2 は、幅 20 ~ 40 cm、深さ 6 ~ 10 cm で U字状を呈する。その範囲は、当初の壁際に掘られた長方形の S K - 0 1 の両側を住居中央へとのび、一部は S K - 0 1 にぶつかる。又、南北壁でそれぞれ S D - 0 1 と共有し、ベッド状遺構の手前で曲がりつながっていた。その後、建て替え時に、東壁中央部をピット 0 1 ~ 0 3 を作る必要から削られたと思われる。このことは、ピット 0 1 ~ 0 3 の掘り込まれた面が、

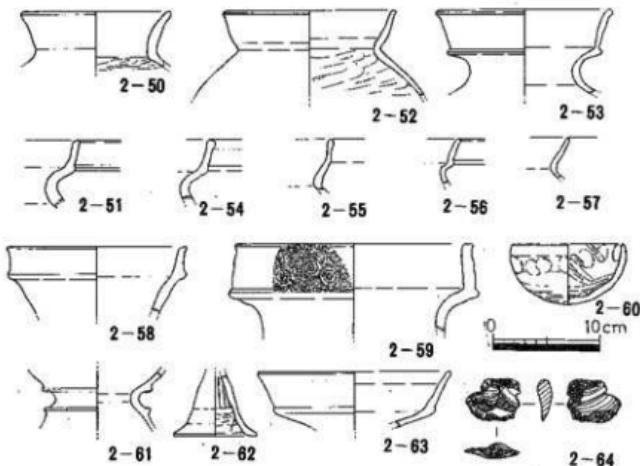


第17図 S I - 2 1 遺構図

東側に傾斜していて、SD-01の面から10cm近く低いことからも伺える。SD-02の範囲から当初の建物は、東西軸4.2m、南北軸5.2~5.8mの方形住居だったと推察される。建て替え時のSD-01は、西壁で50~60cm拡張され、それに伴ってSK-01も拡張されたと思われる。東壁ではベッド状造構の後側に溝を廻らし、北東隅で行き止まり南側は途中で擾乱に切られている。

ピットは、大小12個を数えるが、当初の主柱は、P7とP8かP9、建て替え後は、P5、P6、P10と考えられる。各柱穴のプランはP5で東西20cm×南北20cm×深さ35cm、P6 20×20×20、P7 34×24×12、P8 34×30×40、P9 50×42×30、P10 30×24×28を計る。P7から土師器片が検出された。柱穴以外では、東壁付近からP1~P3、西側付近からSK-01、その中にP11、北壁のSD-02を切る形でP12が検出された。このうちP1~P3は、順に30×32×32、32×30×32、30×42×26cmを計り、P1の底部からは20×20×6cmの石と、その下から炭化物がでた。P11はSK-01内から検出され、切りあいから見て、SK-01を掘った後に掘られたもので、同じく北東にのびる溝もSK-01を切っている。SK-01は94×60×30cmを計る。

焼土は床面の中央付近及び北西隅に8箇所見られたが、いずれも建て替え時の面から検



第18図 S1-21出土遺物実測図

出されたものであった。北西隅の焼上は厚さが床面から20cm近くあり、まわりに何かで囲いをして使ったものと考えられる。

住居跡の北東隅に地山削りだしにより、床面より約10cm高くなつたベッド状遺構があった。規模は幅50cm×長さ2.4mを計る。この構造は、当遺跡内において例を見ないものである。

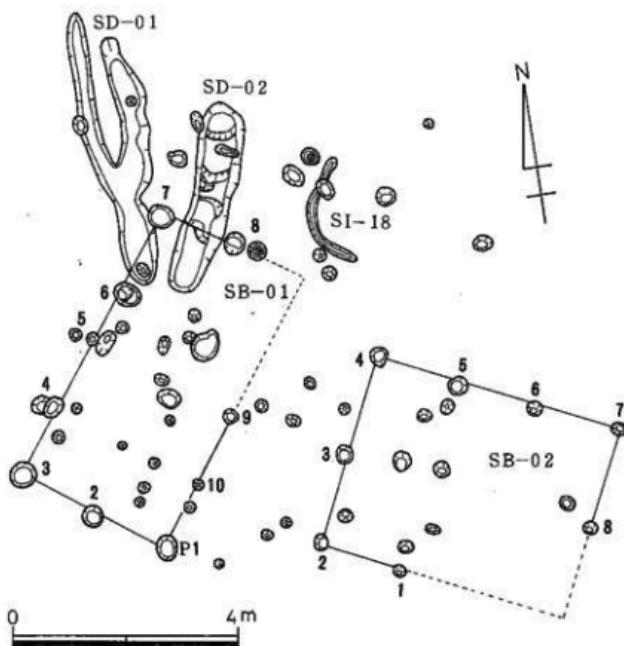
出土遺物のうち岡化できたものは、甕7、壺4、鼓形器台1、高坏2、楕形土器1、黒曜石1であった。これらを床面直上から出土したものを中心見ていくと、甕は2-50、2-51、2-52、2-54等がある。このうち「く」の字状に近い口縁を持つ2-50は、口縁の器厚が厚く、端部をやや外方へ摘み出す。口縁部内外面とも横ナデ、内面頸部より下は籠削りで淡橙色を呈し、やや軟質。2-51、2-52、2-54はいずれも複合口縁か、又はその退化した形態を示す。2-51、2-54は似た形態を示し、器厚が厚く、わずかに接合部が横に張り出し、端部が平坦にカットされている。2-52は床面から検出された溝内遺物で、器厚が比較的薄く、口縁端部をわずかに外方へ摘み上げている。外面肩部の調整は風化激しく不明。口縁内外面とも横ナデ。内面頸部以下籠削り。淡赤褐色で硬い。

壺2-53は地山直上から、2-58、2-59、2-60は、床面より一層上から出土し、いずれも複合口縁を有する。2-53は、作りが丁寧で器厚が薄い。内外面とも横ナデ。頸部より下は籠削り。2-58は横に張り出した接合部から内傾して立ち上がり、端部でやや外に向く。口縁外面に竹管文を配し調整は口縁内外面横ナデ、内面頸部籠削り。淡赤褐色で硬い。2-59は横に張り出した接合部からほぼ真上に立ち上がり、端部で外へ摘み上げる。頸部は内傾し、内外面横ナデ、乳白色で硬い。楕形土器2-60は底部丸底で、口縁部が内向する。溝部は、外面口縁部付近を指ナデ、それ以外は籠削り、内面口縁部は指ナデ、それ以下籠削り。全体的に丁寧な調整ではない。色調は乳白色で、胎土は硬い。

鼓形器台2-61は床面からの出土で、稜は丸みを帯びる。器厚もS1-08の床面から出土したものより厚手である。外面及び内面上半部は横ナデ、内面下半分部横籠削り。赤褐色で胎土は硬い。

高坏2-62、2-63は、いずれも床面一層上の褐色土層出土の遺物である。2-62は、有段高坏で、口縁はもう上げただけでやや外反する。2-63の脚柱部は、緩やかに内彎した後、裾部で外に短く開く。外面と内面上半分部は横ナデ、下半部は横籠削り。赤褐色で胎土は硬い。

その他、土器以外の遺物として、地山の一層上の褐色土層より黒曜石（2-64）の製品が出土している。



第18図 ピット群遺構図

当住居跡は、建て替え前と建て替え後の2時期に分かれ2-52、2-53、2-55、2-56、2-57を指標とする小谷並行期と、2-50、2-51、2-54、2-58、2-59等を指標とする須恵器出現以前の古墳時代中期に比定される。

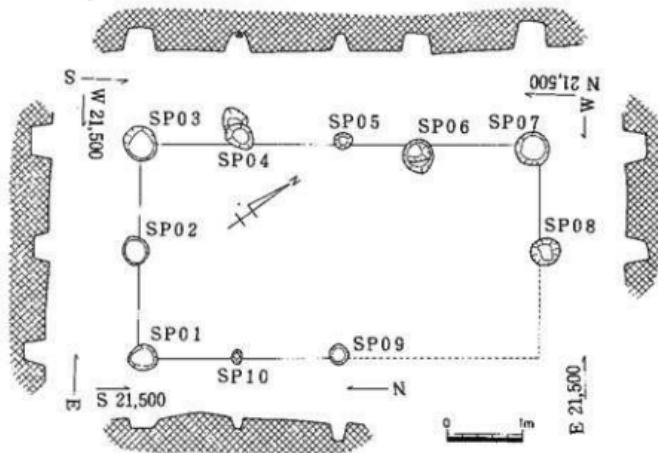
#### ◆堀立柱建物跡及びピット群

第2区東半分に位置し、64個のピットと2本の溝状遺構を検出しさらに南側に続くと思われたが、攪乱を受けているためそれ以上の確認はできなかった。このうち、2棟の堀立柱建物跡を復元できた。(第18図)

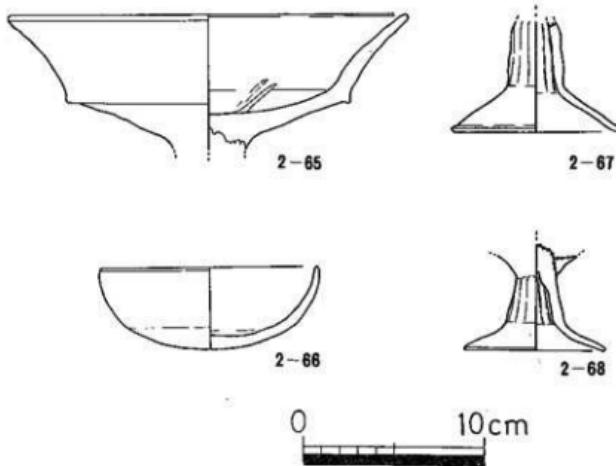
#### ◆SB-01

S I - 2 1 の北東に位置し、主軸は N 36°E で梁間2間、桁行間推定4間の建物である。東西5.2m、南北3.0mを計る。残存する柱穴は10個を数え、すべて円形で、P 0 6は2段堀りで径20cmの円孔となる。

各柱穴のプランはP 1より順に東西35×南北40×深さ30、36×35×25、44×45

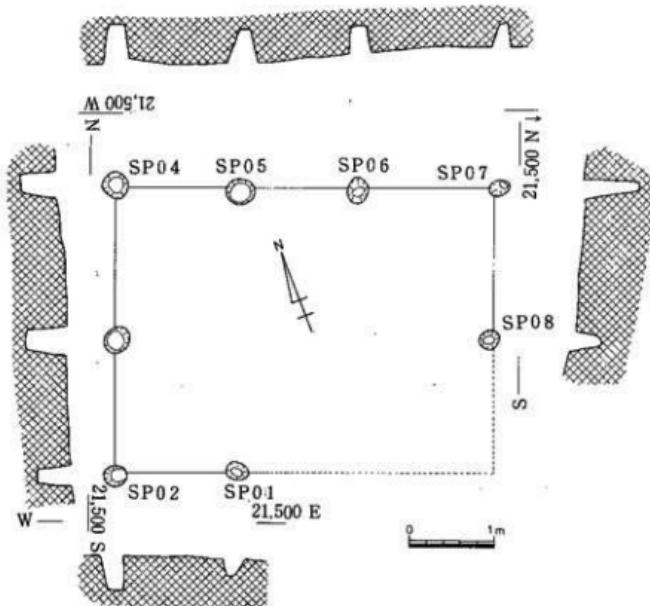


第20図 SB-01 遺構図



第21図 SB-01 山土遺物実測図

$\times 32$ 、 $30 \times 40 \times 30$ 、 $22 \times 23 \times 34$ 、 $44 \times 46 \times 26$ 、 $43 \times 44 \times 31$ 、 $36 \times 40 \times 31$ 、  
 $26 \times 26 \times 25$ 、 $18 \times 15 \times 25$  cmを計る。建物内及び、附近から焼土及び炭化物は検出で



第22図 SB-02 遺構図

きなかった。

遺物はSP01より土師器の高坏の坏部2-65が出土した。これは有段式で接合部分に、やや丸みを帯びた稜を持つ。口縁部は外反しながら外側に開く。調整は、外面ナデ、内面底部に暗文状の箝磨き痕跡がかすかに残る。P04出土の、椭形土器2-66は、底部で内彎しながら立ち上がり、口縁に至る。口縁端部でわずかに内向する。調整は剥離のため不明。色調は橙色で胎土は硬い。P08内からは、2個体の土器、高坏の脚柱部2-67、2-68が検出された。いずれも脚柱部は円柱状で、裾部にて「ハ」の字状に開く。两者とも外面鏡削り、裾部は調整不明。内面にしづりの痕跡を残す。色調は2-67、2-68とも淡橙色で胎土は2-67は硬く、2-68はやや軟質である。(第21図)

SB01の時期をこれらの土器から推定するのは非常に難しいが、古墳時代の中期くらいに位置づけられるのではないだろうか。

#### ◆SB-02

SB-01の東側に位置し、主軸はW21°Nで、南北方向に梁間2間、東西方向に桁行

3間をとる建物である。東西4.5m、南北3.6mを計る。残存する柱穴は8個を数え、すべて円形である。各柱穴のプランはP1より、東西25×南北20×深さ20、25×28×40、30×30×50、31×30×49、33×30×43、25×30×37、26×20×25、24×22×30cmを計る。東柱は検出できなかった。各柱穴内及び付近から遺物は検出されなかった。

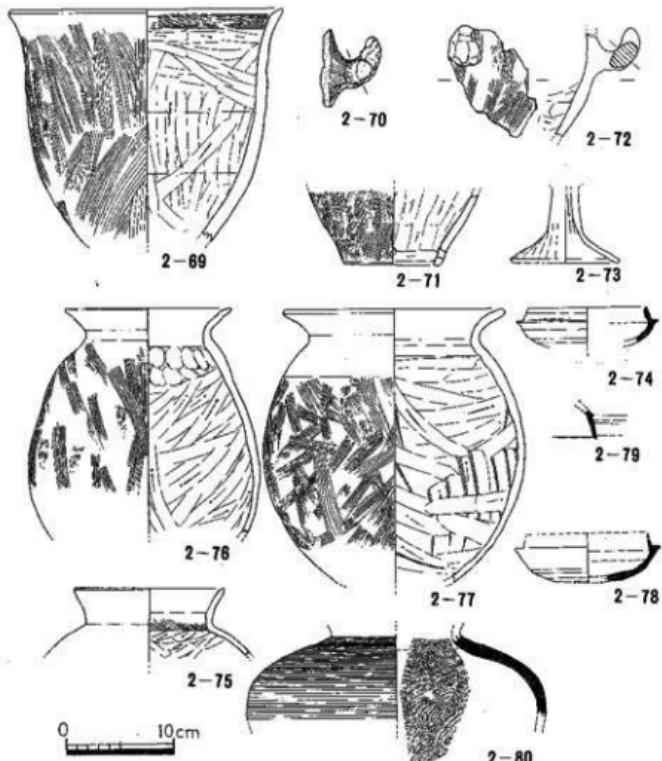
遺構、遺物とも時期を判定する資料を欠くが、SB-01と主軸が異なることや、位置が近接することから、同一の時期ではないと考えられる。ただ、SB-01との切りあいがない為、前後関係は不明である。付近からの焼土及び炭化物は検出されなかった。

#### ◆ その他のピット

その他のピットは、大きさが径10~50cm、深さが10~40のものまであり、小規模な建物群があったと想像されるが、建物の復原までには至らなかった。ピットの掘られている立地には北側に傾斜し、そこから先が崩れている。このため、それ以上ピットを北に追うことはできなかった。遺物は、復原した建物に関するピット以外からは検出されなかった。溝状遺構については、SD-01が、幅25~60cm、長さ5m、深さ10~20cm、北側が二股に分かれる。溝底部からピットが2個検出された。SD-02は、幅25~60cm、長さ3.5m、深さ15~30cmで、底が段状になっている。SD-01は、SB-01のP07に切られていたためSB-01建築以前にあったものと考えられる。SD-02の方は、SB-01との切りあいがないため前後関係は不明であるが、溝の形状や位置から、SD-01の時期と大差はないのではないかだろうか。これらの溝状遺構の性格はよく分からぬが、ピット群の間にあることから住居に関連して作られたものと考えられる。又、各ピット間や溝状遺構に切りあい関係が認められることから、何回かの建て替えがあった可能性が強い。

この他、SI-21の南側に設定した拡張区の遺物包含層や、2区全体の表土に近い位置から遺物が出土したが、図化できたものは、2-69~80までのものである。（第23図）

まず、南側拡張区では、土師器の瓶形土器2-69~72があり、2-69は、把手と底部を欠くものの、遺存状況が良い。底部より斜上方へ外反しながら胴部へ至り、口縁部付近で内脇しながら外方へと開き端部に至った後、わずかに内傾する。外面は、縦方向のハケ目内面は口縁端部が指頭圧痕の後に横方向のハケ目、それより下の部分では横方向の箝削り、胴部より下は縦方向の箝削りを施す。2-71もほぼ同じ調整手法だと思われる。2-70、2-72は把手部分で、いずれも壺状工具による面とりが施され、胴部に近いあたりはハケ目を施す。高壺2-73は、筒状の脚柱部が壺部において「ハ」の字状に開き、端部でわずかに内傾する。脚柱部外面の調整は不明。壺部外面は縦方向の箝削り。壺部内面は箝削り。その他はナデ。赤褐色で胎土は硬い。須恵器の壺身2-74は、底部からやや外反



第23図 第2調査区住居跡外遺物実測図

しながら外上方に立ち上がる。受部は、丸みを帯び斜上方に短くのび、内側する口縁端部へと至る。外面底部は回転削り、その他はすべて回転ナデを施す。時期的には、堤西Ⅱ期に比定できる。Aトレンチから暗褐色土層より出土した土師器甕2-75は、単純口縁で、口縁部は「く」の字状に屈曲してのび丸い端部へと至る。器厚は薄い。外面から内面口縁部にかけては風化のため調整不明。それ以下はハケ目。胴部は横方向の笠削り。黄橙色で胎土はやや軟質。Fトレンチより出土した甕2-76、2-77は、いずれも「く」の字状に屈曲した単純口縁を持つもので、2-76は底部近くに胴部最大径がくる形態を示し、2-77は、卵形に近い形態である。2-76の外面は、胴部に縦方向のハケ目、口縁部の内外面は横ナデ、その下は指頭圧痕調整を施し、それ以下笠削り。淡橙色で胎土は硬い。

2-77は、外面の肩部ハケ目、肩部から口縁部内面まで横ナデ、以下荒い鉈削り。赤褐色で胎土は硬い。

このほか2区の荒堀中に表土に近い位置から須恵器2-78、2-79、2-80が出土した。坏身2-78は、縁端部と底部の一部を欠くが、2-74とはほぼ同じ形態を示す。立ち上がり部は0.6に比べて薄い。外面底部3分の1程度回転鉈削り、その他はすべて回転横ナデ。灰色で胎土は堅緻。坏蓋2-79は、やや不明瞭なのみ刃状の口縁端部を有する。残存部の内外面とも回転ナデ調整。青灰色で、胎土は堅緻。壺蓋類2-80は、肩部から胴部にかけて残存し、肩部から胴部へと変化するあたりに胴部最大径がくる。外面はすべて叩目をつけた後、回転カキ目調整、内面の肩部は青海波状の叩目が残るがそれ以下は、叩目をすり消す。

堤砲遺跡2区からは、堅穴住居5棟と堀立て柱建物2棟を検出した。位置的なことから考えれば、隣接する5区の堅穴住居4棟をも含めて遺構の検討を行なう必要があるが、詳細は遺構の検討の項に譲り、ここでは2区の遺構について若干解ておくことにする。

まず堅穴住居では、出土遺物から見てSI-07→SI-08a（建て替え前）→SI-21a（建て替え前）・SI-08b（建て替え後）→SI-21b→SI-06と推移すると思われるが、SI-18の時期については出土土器がないことから確認できなかつた。ただ、SI-18の周辺から須恵器が検出されていないため、堤砲II期に比定できるかもしれない。堀立て柱建物SB-01は、柱穴からの出土遺物から見て堤砲II期と考えられるが、SB-02からは出土遺物が検出されなかつたため、時期を決めることが出来なかつた。

堅穴住居の平面形態を見ると、SI-08のa、bは共に長方形プラン、SI-07、06が方形プラン、SI-21のa、bは共に長方形プラン、SI-18は不明と各形態が混在している。次に、他の区の住居では、遺存状況が悪いため算出することができなかつた床面積を見ると、SI-06が推定25m<sup>2</sup>以上、SI-07が推定13.7m<sup>2</sup>、SI-08aが12.7m<sup>2</sup>、SI-08bが39m<sup>2</sup>、SI-21aが22m<sup>2</sup>、SI-21bが39m<sup>2</sup>の規模を持つ。又、SI-18は、主柱の間隔から見てSI-06やSI-21aとほぼ同規模ではないかと考えられる。このことから、堤砲I期の住居規模はごく小規模なものであり、その後堤砲II期、III期になると住居規模が拡大される傾向にあると言える。又、建て替えについては、SI-08はほぼ全面的な建て替えを行なっており、SI-21は東西の壁だけを部分的に拡張するものであった。

各堅穴住居ごとについて見ると、SI-06は南西隅に集中して、土師器、須恵器、円筒埴輪片、石等が40cmにわたって堆積していた。出土遺物のほとんどが古墳時代中期後半

のものと考えられ、床面から出土した土器と堆積土の上面から出土した土器の時期差がほとんど見られないことから、あまり長い時間を置かずに土器が堆積したものと思われる。それに加えて、住居内に外部から土砂の流入した形跡も認められないことから、土器群が人為的に住居内へ投棄された可能性が強い。次に各住居内から、柱穴以外に使用されたと考えられるピットや土壙がかなり検出された。SI-07のSP-05、SI-08のSK-01、02、SI-21のSK-01、SP-01、02、03がこれに相当するものと考えられ、このうちSI-21のSK-01には、両側に細い側溝がのびている。又、SI-08のSK-01は、建て替え後のもので、SK-02は貼床除去後に検出されたことから、建て替え前のものであると考えられる。その用途であるが、SI-07のSP-05、SI-08のSK-02はピット及び土壙内の埋土に炭化物や焼土が含まれていたことから、炉跡と考えられるが、その他のピット及び土壙については、用途を示すような資料を得ることは出来なかった。

次にSI-21の北東隅から地山を削り出して作られたベッド状遺構が検出された。この遺構は、堤壠遺跡において唯一のものであるが、用途については、遺構の検討の項へ譲る。

この他、堅穴住居の出入口や上屋構造については、確認することが出来なかった。

次に、堀立柱建物は、SB-01とSB-02の主軸方向が違うことから、時期が異なると考えられるが、両住居間に遺構の切りあいは認められず、新旧関係は明らかでない。ピットの数から見て、この2棟の他にも堀立柱建物があったものと思われ、ピット間に切りあいが認められることから、幾度かの建て替えがあったことが伺える。この堀立柱建物群と堅穴住居群は、意識的に離れた位置に建てられたと考えられ、両者は性格を異なるものだったのではないだろうか。

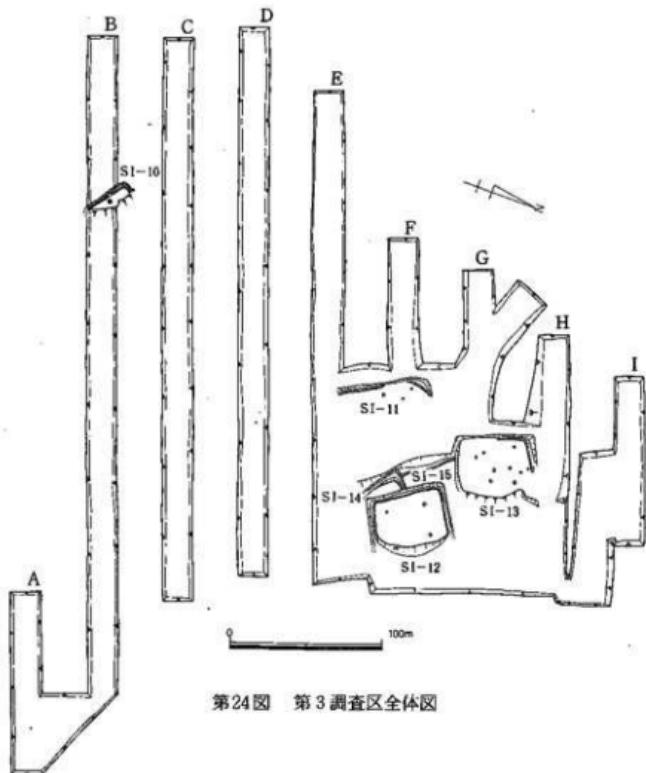
### (3) 第3調査区

堤壠遺跡の一番東側に位置し、北へ突き出る丘陵尾根の東側斜面にあたる。遺構確認の調査は、2m幅のトレンチを9本いれ、南側からA～Iとして行なった。それによって確認できた遺構は、堅穴住居跡6棟であり、それ以外は検出できなかった。

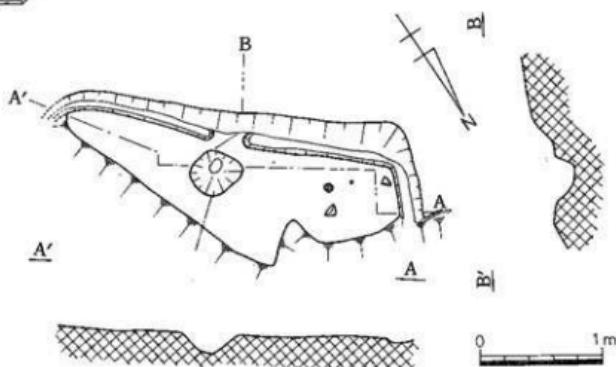
これらの住居跡は、標高約20～30mのところに位置していたが、いずれも斜面にあるため、土壙の流下などによる削平が著しかったが、住居跡は、1棟(SI-10)を除いて、5棟は調査区の北側に集中して検出した。

#### ◆SI-10

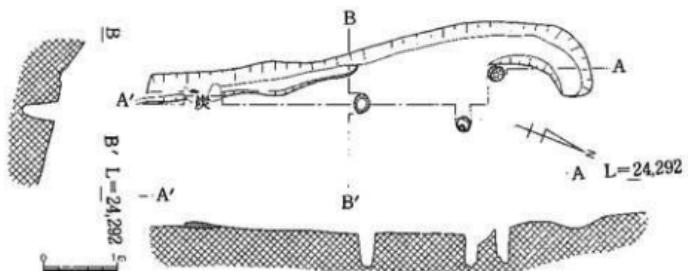
調査区の南側のBトレンチにおいて確認した住居跡である。3区の中では、一番傾斜角



第24図 第3調査区全体図



第25図 SI-10遺構平面図



第26図 S I 11 遺構平面図

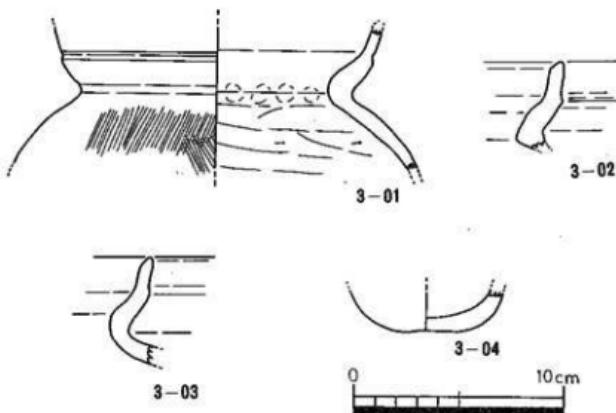
度のきつい高所に営まれており、土層の流下などによる削平が著しく、西側の一部しか残っていなかったので規模は不明であるが、平面形は残存部分の形態から方形を呈するものと思われる。壁高30cmを計り、壁沿いにやや浅めの側溝が掘り込まれていた。ピットは壁側に径30cm、深さ30cmのものを1個検出しただけで、これが本住居跡の主柱穴をなしていかどうか特殊ピットであるのか不明である。住居跡の大部分が削平を受けているので、その他の柱穴、焼土などは検出できなかった。

遺物は土師器の高杯と壺の小片が出土しているが、摩滅が激しく、実測、写真は不可能であった。以上のことから、本住居跡の時期を判定することは出来なかった。

#### ◆S I - 1 1

調査区のEトレーニチ及びFトレーニチにおいて確認した住居跡でS I - 1 0と同様に、東側が削平されており、北西隅から西壁部分しか残っておらず、西壁残存長は6mを計り、平面形は隅丸方形を呈している。壁高は約30cmで、内壁沿いに浅い溝が廻っている。ピットは3個検出した。北西隅からP 1～P 3とし、P 1は径23×21、深さ45cm、P 2は径21×19cm、深さ30cm、P 3は径23×25cm、深さ45cmを計る。P 1は底面中央に、P 2は底面の東よりに径約8cmの柱痕跡があることから、この住居跡の主柱穴の一部であると思われる。P 3は埋土中に炭化米が含まれていたが、柱痕跡は認められなかった。床面上には焼土は認められなかったが、壁の南側の側溝部分に炭がやや多めに検出されている。

遺物は、土師器小片が少量出土しているが、実測可能なものは、複合口縁の壺3点と、小型壺形土器1点であった。3-01、3-02、3-03とも、複合口縁が退化している壺の口縁部で、3-01は、口縁端部を欠くが、稜は鈍くなつて、溝状の凹面をなしている。内外面とも暗褐色で外面にはスグが付着している。胎土やや密で硬い。3-02は短く直立する口縁部を持っている。口縁部内外面ともに横ナデが施されている。外面暗褐

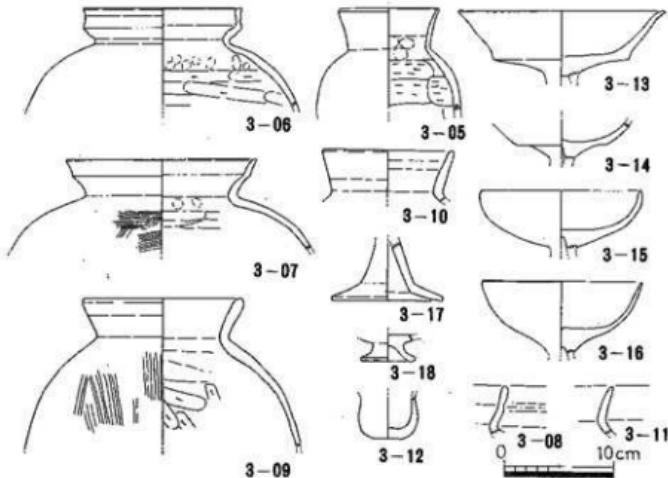


第27図 S I - 1 1 山土遺物実測図

色で部分的にススが付着しており内面灰褐色で胎土密にして硬い。3-03はやや外反する口縁部を持つ。内外面とも褐色で、胎土やや密、風化の為摩滅が激しく調整不明である。3-04は小型壺形土器の底部であり、平底を呈している。外面淡橙色、内面淡黄色で胎土やや粗。これらの土器の特徴と須恵器が一片も伴出していないことから、本住居跡の時期は須恵器出現直前頃と考えられる。

#### ◆S I - 1 2

S I - 1 1 よりも東側下方にあり、S I - 1 4、S I - 1 5を切って、この調査区の中では一番低い所に位置している。平面形は方形を呈しているが、東側部分は削平を受けている。床面の規模は南北で4.8mを計り、東西軸は3.4mまで残っていた。壁高は西壁で最大値45cmを計り、北壁では最大値35cmを計るが東側に向かうにつれて、削平のために低くなっている、東端では消滅している。東壁は残っていないが、内壁沿いに幅18cm、深さ10cmのU字溝が周囲を廻っていたと思われる。床面はやや東に低くなっており、貼床の形跡もなく、良く整えられていた。柱穴は4個の主柱穴を検出した。北西隅よりP 1～P 4とし、P 1は径23×22cm、深さ58cm、P 2は径24×24cm、深さ48cm、P 3は径25×26cm、深さ50cm、P 4は径18×18cm、深さ48cmを計る。名柱穴間隔はP 1より右回りで、2.10m、2.10m、2.10m、2.30mを計る。床面中央より、東側に40cm×34cmの焼土があり、その焼土を囲むように2.00m×1.5mの範囲に多量の炭が広がっているが、この建物が火災にあったとは考え難い。又、焼土面を取り除くと、径30cm、深さ10cmの穴が掘りくぼめられ

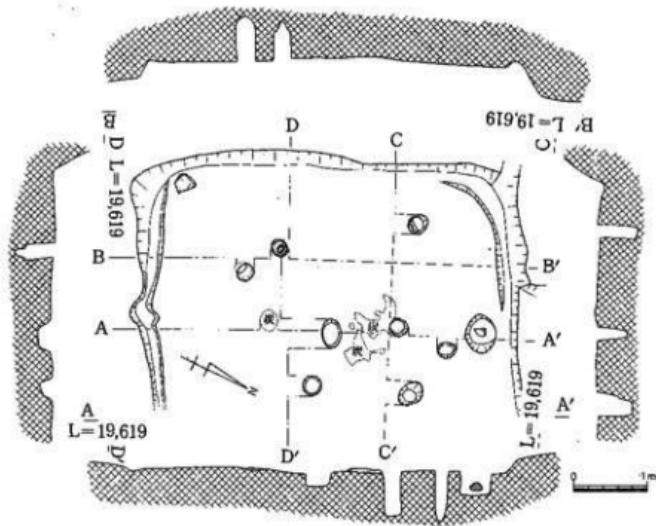


第28図 SI-12 出土遺物実測図

ており、これが炉の施設であったと考えられる。

遺物は、本住居跡の東側斜面にかなり出土しているが、床面上遺物で実測できたものは、壺1、甕6、手捏土器1、高坏5である。3-05は単純口縁を持つ広口の壺であり、全体的に薄く作られ、口縁部も長く、端部は丸みを帯びている。頸部内面に指頭圧痕があり、体部内面箇削りが施されている。その他は横ナデで仕上げられている。内外面とも黄褐色で胎土粗であるが硬い。

甕は3-06～3-08の複合口縁の退化したものと、3-09～3-11の単純口縁のものがある。3-06は短く、やや内傾気味にのびる口縁部をもち、端部は肥厚する。屈曲部の稜は鈍いものに退化している。口縁部内面横ナデ、頸部内面指頭圧痕、体部内面箇削りされているが、外面は風化のために不明である。外面黄橙色で胎土密。3-07は口縁部と頸部の境をなす稜が鈍く、段になっており、口縁端部は内傾する平坦面を持つ。頸部内面から体部内面にかけて指頭圧痕及び箇削り、体部外面ハケ目、その他横ナデが施されている。内外面とも橙色で胎土粗でやや硬い。3-08は稜のかわりに浅い溝が廻っている。内外面とも淡橙色で胎土粗でやや硬い。3-09は頸部から外反してのびる口縁部をもち、端部は肥厚し、丸みを持つ。体部内面箇削り、体部外面ハケ目、その他横ナデが施されている。内外面とも淡橙色で胎土密。3-10は、口縁端部は丸く、口縁部内面にやや小さ



第29図 S I - 1 3 造構平面図

な段がある。内外面とも赤橙色で、胎土やや粗。3-11は口縁端部がやや細く作られている。3-12は、手捏土器で口縁部は残存していなかった。平底に近い底部をなしていない。内外面とも黄褐色、胎土密。

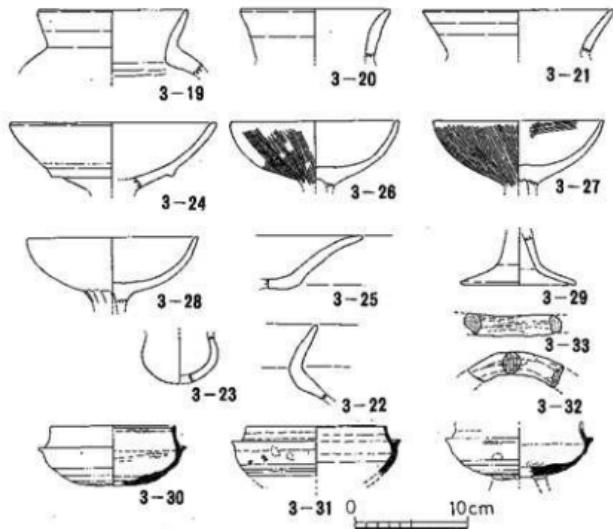
高坏は3-13、3-14の有段のものと3-15、3-16の無段のものがあり、3-17、3-18は胸部のみ残存していた。3-13は端部と底部の境に鈍い稜をもち、口縁部はわずかに外反する。坏内面にわずかにナデの痕跡が認められるが、その他は不明である。内外面とも黄褐色で胎土密であるが窓。3-14は口縁部と底部の境に下向きの鈍い稜がある。内外面とも橙色で、胎土やや粗で窓。3-15は内側する口縁部をもち、口縁部内面に一部横ナデの痕跡が見られる。内外面とも黄褐色で胎土粗。3-16は楕形に近い坏部で、内外面とも淡赤褐色、胎土粗。3-17は胸部の破片で、透かしの有無は不明である。脚柱部からややくびれて「ハ」の字状にひらく裾を持つ。内外面とも橙色で胎土密。3-18は低脚坏の脚部で、内外面とも褐色、胎土粗。

これらの遺物の特徴から、本住居跡はS I - 1 1とほぼ同時期のものと考えられる。

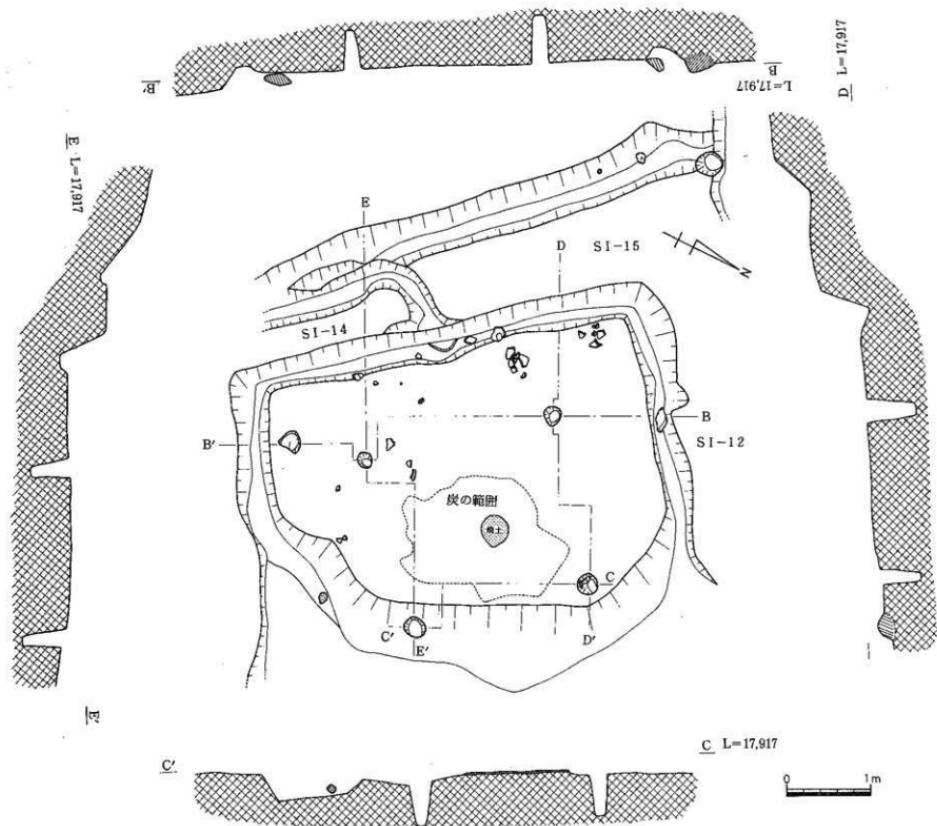
#### ◆ S I - 1 3

S I - 1 2の北西側に一段高い状態で存在していた。平面形は方形を呈しているが他の

住居跡と同様に東側が削平を受けている。残存している範囲から床面の規模は南北軸5.6m、東西軸で4.1mを計る。壁高は西壁で最大値54cm、北壁で最大値54cm、南壁で最大値23cmを計るが、北壁、南壁はS I - 1 2 同様に東に向かうにつれて低くなり、東端で消滅している。北壁、南壁に幅20cm、深さ10cmのU字溝が掘り込まれており、南壁側でも一部見られることから内壁沿いに周囲を廻っていたものと思われる。床面はほぼ水平に整えられ、ピットは住居跡内のやや北よりに9個検出した。北西よりP 1～P 9としてP 1は径27×27cm、深さ50cm、P 2は径55×43cm、深さ30cm、P 3は径22×26cm、深さ68cm、P 4は径30×34cm、深さ46cm、P 5は径25×25cm、深さ58cm、P 6は径40×29cm、深さ18cm、P 7は径28×26cm、深さ16cm、P 8は径24×24cm、深さ60cm、P 9は径24×24cm、深さ50cmを計る。これらの柱穴はやや不整形に並んでいるが、柱穴内の埋土が、暗褐色のものと、褐色土層のものの2種類に分けられ、P 1、P 2、P 3、P 7、P 9が暗褐色土層であり、P 2を除く4個のピットが対応するので、これらが主柱穴を成していたものと思われる。この対応する4個の柱穴間隔はP 1から右回りに1.8m、1.9m、1.96m、1.9mを計る。P 2もこれらの柱穴と同じ暗褐色土層であったが、主柱穴をなしていたか補助柱穴や土壤であったのか不明である。又、他の柱穴も埋土の違いから時期が異なる可能性も考えられた



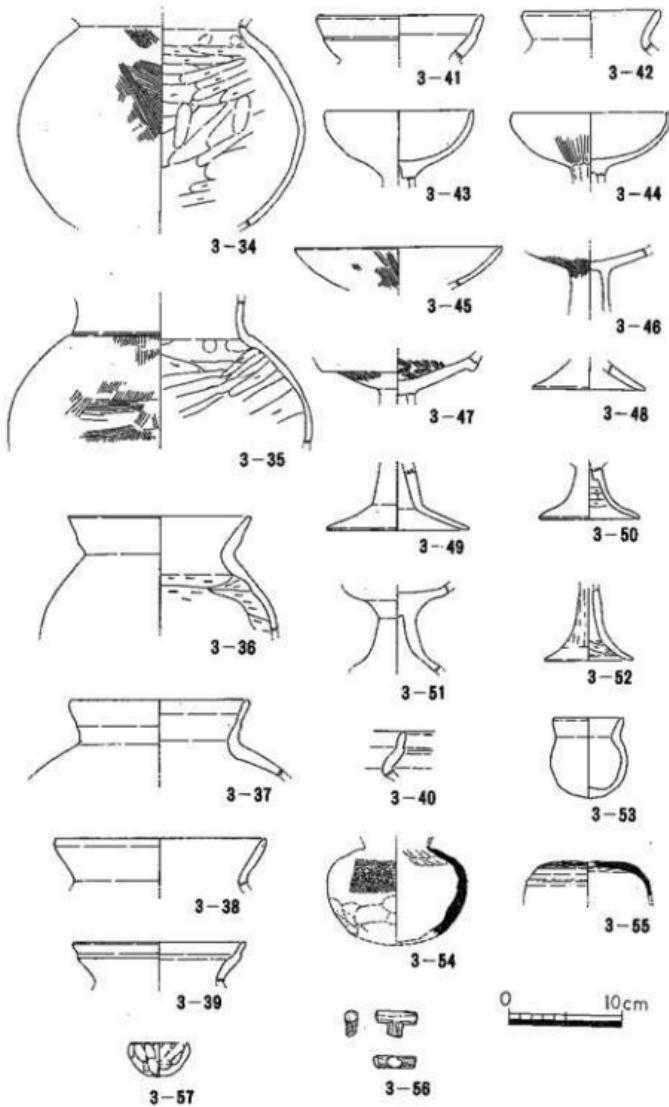
第30図 S I - 1 3 出土遺物実測図



第31図 SI-12、14、15造構平面図

が、建て替えが行なわれた痕跡も認められないので、主柱穴に附属していたものか、あるいは他の用途に使用されたものと思われる。床面中央に炭化物の広がりが3箇所見られるが、焼土は確認できなかった。

出土遺物は傾斜面上に住居跡があるために、S I - 1 2と同様に、住居跡の東側下方の埋土中に多く出土しているが、これらはS I - 1 1などからの流れ込みも多いものと思われる。床面上からの出土遺物で図化出来たものは、土師器の甕4、小型丸底壺1、高坏6、須恵器4点であった。甕は、単純口縁を持つものだけであり、3 - 1 9は口縁部に比べて頸部は厚く作られている。体部内面窓削り、その他横ナデが施されている。内外面ともに黄橙色で、外面の口縁部にススが付着している。胎土、やや粗にして硬い。3 - 2 0はやや長めの口縁部を持っている。外面横ナデ、内面ハケ目が施されている。内外面ともに白橙色で胎土密。3 - 2 1は大きく外傾してのびる口縁部をもち端部は丸い。外面横ナデが施され、内外面とも淡黄色で胎土密。3 - 2 2は口縁部外面横ナデ体部外面ハケ目、体部内面窓削りが施されている。内外面ともに淡黄色で内面には赤色顔料が付着している。3 - 2 3は、小型丸底甕の体部で、最大径は胴部中央にある。内外面とも黄橙色で胎土密。高坏は有段のものと無段のものがある。3 - 2 4は口縁部と底部の境に稜がある。内外面とも暗橙色で胎土密。3 - 2 5は口縁部と底部の境に段を成している。内外面ともにハケ目の痕跡があり、赤橙色である。胎土やや密で硬い。3 - 2 6は内側してのびる口縁部をもち、端部は丸い。内面底部指ナデ、外面ハケ目が施されている。内外面とも赤橙色で、内面の一部にススが付着している。胎土密で硬い。3 - 2 7も内側する口縁部をもち、口縁部は凹面を成している。内外面とも暗赤褐色で胎土密。3 - 2 8は内外面ともに赤褐色で赤色顔料が付着しており、脚部と坏部の境に脚部接合後に窓削りが施されている。胎土密。3 - 2 9は脚部のみで、筒部と脚部の境が明瞭でない。調整は不明である。外面橙色内面暗橙色で胎土密。3 - 3 0は須恵器の坏身で、口縁部は内傾してのび、端部は2段になっている。受部はやや短く外方にのび、口縁部と受部の境に浅い溝が廻っている。体部外面に重ね焼痕が認められ、やや変形している。底部外面回転窓削りが施され、天頂部は幅が狭く弱い。その他回転ナデが施されている。胎土密で硬い。3 - 3 1も内傾してのびる口縁部をもち端部はやや平坦になっている。受部は外方にのび鋭い。外面底部は回転窓削りされ、幅は狭く線が明瞭である。体部には指頭圧痕が残っている。青灰色で硬い。3 - 3 2は有蓋高坏で口縁端部と脚部を欠いている。脚部には四角形と思われる透かしか二方向以上穿たれている。坏外面底部回転窓削りが施されている。青灰色で硬い。3 - 3 3は半円環状の須恵器の把手で、粘土紐を曲げて作っている。黄灰色で胎土粗である。



第32図 第3調査区住居跡遺物実測図

上記のように、本住居跡は、須恵器と土師器が共存しており、これらの須恵器は、山陰の須恵器編年Ⅰ期に相当するものと思われ、本住居跡もこの時期に比定されるであろう。

#### ◆ S I - 1 4

S I - 1 2 の西側に位置し、S I - 1 2 によって大部分が切られている。そのため、西壁隅、及び床面をわずかに残すのみで、住居跡の規模及び平面形は不明である。側溝は、幅20cm、深さ8cmのU字溝が掘り込まれており、内壁沿いに廻っていたものと思われる。柱穴や焼土などは、床面がS I - 1 2 によって大部分が削り取られているので、全く検出できなかった。

遺物は埋土中からは出土しているが、床面からの出土は認められなかった。

遺構の形態や遺物が皆無であったので、明確に住居跡を判定することは出来ないが、遺構の切りあい関係から、S I - 1 2 より先行して存在していたと思われる。

#### ◆ S I - 1 5

S I - 1 2 、S I - 1 3 、S I - 1 4 に囲まれた位置にあり、この3つの住居跡によって切られているため、当初住居跡があるとは思われなかつたが、S I - 1 3 側から南へ向かう落ち込みが検出されたためそれを追ったところ、幅20cm、深さ5cmのU字溝が3.8mまでのびているのを確認した。北側はS I - 1 3 で、南側はS I - 1 4 によって切られているので規模は不明であるが、S I - 1 1 とS I - 1 4 の間に段があり、本住居跡の壁と思われ、壁だけの規模で見ると、6.5m以上の規模になる可能性がある。床面は、S I - 1 4 同様に大部分削り取られているため、柱穴は1個検出しただけである。しかし、この柱穴は本住居跡の溝とS I - 1 3 の溝を切っていることから、これらの住居跡に附属するものとは考え難い。

出土遺物は、土師器の高杯と壺が出土しているが、摩滅が激しく実測不可能であった。

以上のことから、本住居跡の時期を判定するのは困難であるが、遺構の切りあい関係からS I - 1 2 、S I - 1 3 、S I - 1 4 より先行して存在していたと思われる。その他、調査区域の東端斜面から多数の土器が出土しているが、時期的には本調査区の住居跡とはほぼ同時期のものばかりなので、住居跡からの流れ込みによるものと思われる。

住居跡外の土器で3-3.4~3-4.2までは變形土器と壺形土器の口縁部や胴部のみが残存しているものであり、口縁部は複合口縁の退化したものと単純口縁のものがある。胴部は球形に近い。3-4.3~3-5.2までは高壺形土器で、壺部のみと脚部のみのものばかりであり、壺部は内嚙するものと、壺底部に稜を持つものがある。壺外面にハケ目が施

されている。脚部はあまり長くなく、裾部も短くハの字形に開くものが多い。3-5-3は小形壺形土器で、口縁部は短く外傾しておらず、胴部中央に最大径がある。3-5-4～5-5は須恵器の壺と蓋である。3-5-6は須恵質のものであるが器種不明である。3-5-7は手捏土器で全体指ナデが施されている。

第3調査区で確認された遺構は竪穴住居跡6棟であった。SI-10を除く5つの住居跡は調査区の北側に切りあって検出された。SI-10だけは、これらの住居跡から離れて本調査区の中で一番高所に営まれていた。このSI-10に隣接する住居跡が存在する可能性も考えられたが、本調査区ではSI-10に隣接、又は高所に存在する住居跡を検出することは出来なかった。

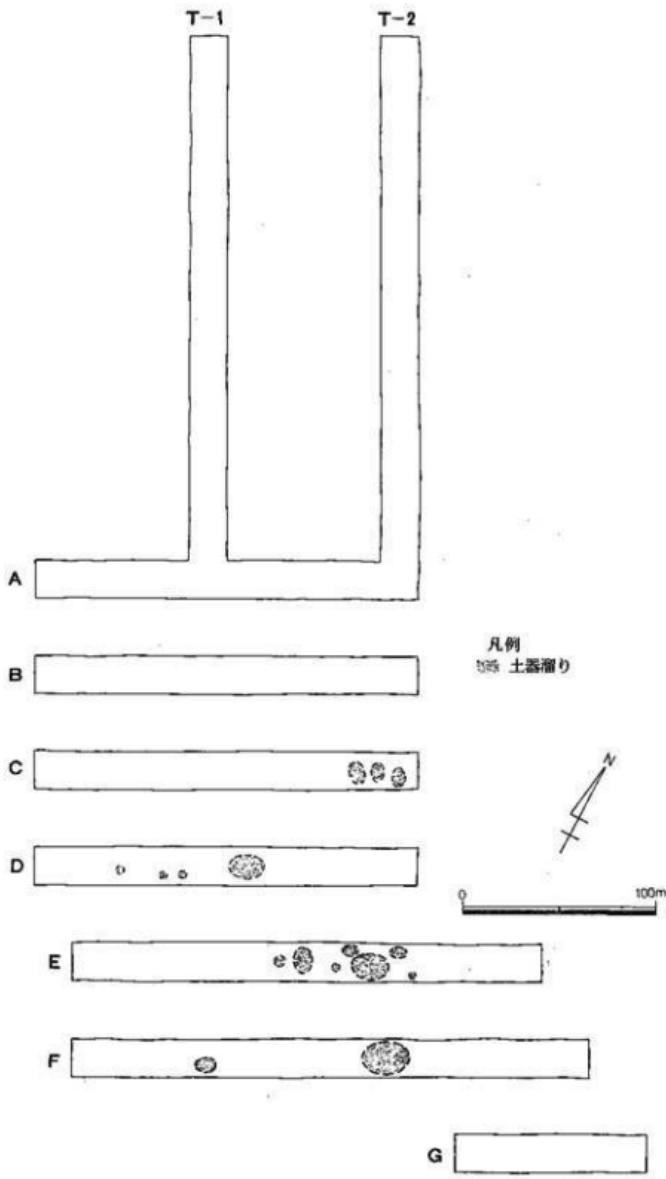
住居跡の新旧関係については、出土遺物と切りあい関係から知ることが出来、切りあい関係からSI-15→SI-14→SI-12という変遷を知ることが出来、出土遺物から見ると、SI-11とSI-12がほぼ同時期に併行して存在していた可能性が伺える。SI-13は唯一須恵器を伴出する住居跡であることから、この中では一番新しい時期に存在していたと思われる。SI-10については、他の住居跡との切り合い関係がなく、明確な時期を判断できる資料が乏しいために、他の住居跡より先行するものなのか併行して存在していたもののか知ることが出来なかった。又、その規模についても明瞭でなく、他の住居跡と比べると小型の様に思われ、一般的な住居であったのか他の性格を持ったものであったのか現時点ではそれを判断するまでに至らなかった。

次に、SI-11のピットから炭化米が検出されており、この炭化米も少量しか検出できなかったが、本遺跡においての食生活の一端が伺えるのではないだろうか。

以上のように、6棟の住居跡のおおよその新旧関係などについて簡単に述べてみたが、これらの住居跡は土器の特徴などから古墳時代中期の比較的限られた時期に営まれていたものと思われる。

#### (4) 第4調査区

本調査区は、遺跡内に設定された調査区のうちで最も南に位置し、標高38mの丘陵尾根東側の下方にある30m×40mの緩やかな傾斜を伴った比較的平坦な区域に設定されたものである。標高は31m～40mを計り、東側で標高差3～8mをもって第5調査区、北東側で標高差6～11mをもって第1調査区と隣接している。調査区は、東西方向に設定された幅2m、長さ10m～26mの計7本のトレンチ（呼称は北から南へA～G）と、Aトレンチから直角に第1調査区の方向に等高線と交差するように設定した2本のトレンチによって構



第33図 第4調査区トレント設定図及び遺物の出土範囲図

成されている。(第33図) 設定した7本のトレンチのうち、A、B、Gについては、土層もほぼ均一で、比較的浅く、遺物を伴うものではなかったため、土層断面図の作成は、C、D、Eトレンチに限定した。尚、Fトレンチについての記述は、遺物が出土した段階で観察し記録された土層の状態に基づいてなされていることを付け加えておきたい。

#### Bトレンチ(幅2m、長さ20m)

土層図はない。表土以下3層であり、第2層の黒色土を経て、若干の土師器片を含む第3層黄褐色土に達する。遺構はなかった。

#### Cトレンチ

幅2m、長さ20m、表土の厚み12cm~40cmで、第2層の暗褐色土に達する。第2層は、厚み6cm~22cm、長さ7.3mを計る。第3層、暗茶褐色土は一部で、第2層の下にもぐり込みながらも第2層とほぼ同じレベルで堆積しており、厚み5cm~32cm、長さ6.3mを計る。第4層暗褐色土は第3層と同じレベルで、厚み10cm~35cm、長さ7.3mを計る。第5層黒褐色土は、トレンチ東側では一部で表土下15cm~20cmのレベルで認められるが、その後次第に下降し、トレンチ全体のはば4分の3にわたって、厚み10cm~30cmで堆積している。同層は、最深部で表土より70cmをはかる。このトレンチでは、第5層から遺物包含層である第7層茶褐色土と第8層褐色土に達するまでに、第6層茶褐色粘性土が認められた。これはトレンチのはば中央から西にかけて、緩やかなレンズ状を呈する、長さ約6m、厚み10cm前後のほぼ均一な堆積土である。第7層、第8層は記述のとおり、遺物包含層である。表土下90cm~1mの深さで認められ、第7層茶褐色土は第6層を包むようにして、レンズ状に10~20cmの厚みで堆積し、長さ12cmを計る。

遺物は、この層の最下層から第8層にかけて出土する。第8層は、炭化物を伴う。遺物は土師器質の壺口縁(第34図、4-1~4-9)の他に土師器の破片が多く、摩滅して、形態や時期が判然としないものが多い。土層図では、トレンチ西側の第8層で2箇所の落ち込みが認められたが、他の調査区で検出されている住居跡のものであるか否かは、これに伴う遺構が検出できなかったため判然としなかった。

#### Dトレンチ(幅2m、長さ20m)

表土の厚さ3cm~15cmで第2層褐色土に達する。第2層は厚み20cm~40cmで、トレンチの東端から中央部にかけて堆積している。第3層やや暗い褐色土はトレンチ中央付近で長さ6mに渡って第2層の下に潜り込み、西側へ20~30cmの厚みをもって広がっている。第

4層褐色土は、トレンチの西端部分で、一部を表土直下に露出しながら、第2層褐色土をわずかながら伴って堆積している。厚み20~50cm、長さ約5mを計る。第5層暗褐色土は表土下25~60cmではば平らに広がり、厚み10~30cmをもって、トレンチ中央付近に堆積する。第6層黒褐色土は、このトレンチのほぼ全域でみられ、表土下40~70cmのレベルで15~30cmの厚みをもって緩やかなレンズ状に堆積している。Dトレンチの場合、第6層から遺物包含層である。第9層最下層から第10層に至るまでに、第7層暗褐色土と第8層明褐色土がほぼ同じ厚み(10~20cm)で、約6mに渡って堆積しているのが認められる。

遺物包含層は、第9層の最下層から第10層褐色土の2層に渡って認められ、炭化物を伴ったものである。この点については、記述したCトレンチの場合と同様である。出土遺物は土師器が主で、壺口縁部、土師器質の小壺(第34図4-11)や高壺の脚部(第34図、4-11、4-12、4-13)の他は、破片が多かった。同層は、表土下1.1m~1.3mの深さで、10cm~15cmの厚みを持って、トレンチの中央から西側にかけ、長さ10mに渡ってレンズ状の堆積をしている。遺構は検出できなかった。このトレンチでの最下層は、第11層黄褐色土上で、地山の明褐色土まで10cm程の堆積土である。遺物はなかった。

#### Eトレンチ(幅2m、長さ24m)

表土下5cm~30cmで第2層褐色土に達する。同層は、トレンチの全域に渡って厚み5cm~30cmで堆積している。第3層やや暗い褐色土はトレンチの中央から西側部分にかけて、厚さ20cm~30cmで堆積している。第4層黒褐色土と第5層黒灰褐色土は、共に表土下40~60cmで連続し、明確に判別することが困難である。両層は、Cトレンチの第5層黒褐色土と同様の堆積状態を示していると考えられる。第5層は、トレンチの東側から中央部、さらに西側にかけて長さ約9m、15~20cmの厚みで堆積している。これに対して第4層は、一部が第5層に重なっているもののはば同じレベルで、トレンチ西側で約6mにわたって厚み30~40cmの堆積を示している。明確な判別をするよりも、一つの連続した土層として考えるのが自然であると思う。このトレンチの場合は、黒褐色土の下に第6層褐色土(厚み5~10cm、長さ5m)と、第7層明褐色土(厚み15~20cm、長さ9m)がある。同層から土師器壺の口縁が出土している。(第34図、4-15、4-16、4-17、4-18)。第8層暗褐色土はトレンチ中央付近で一部が、第7層と同層位であるが、西側で第7層の下に潜り込み、10~30cmの厚さで堆積している。遺物包含層である第9層暗赤褐色土から第10層褐色土(遺物、炭化物を含む)は、おおむね、表土下120cm~160cmの深さでトレンチの中央付近から西側全体にかけて、10cm~20cmの厚みで堆積している。出土遺物は、土師器壺口縁(第34図、4-19)が第9層から、その他に高壺や土師器片が認め

られる。第10層からは、複合口縁の退化した土師器の壺口縁（第34図、4-20）が出土している。

#### F トレンチ（幅2m、長さ26m）

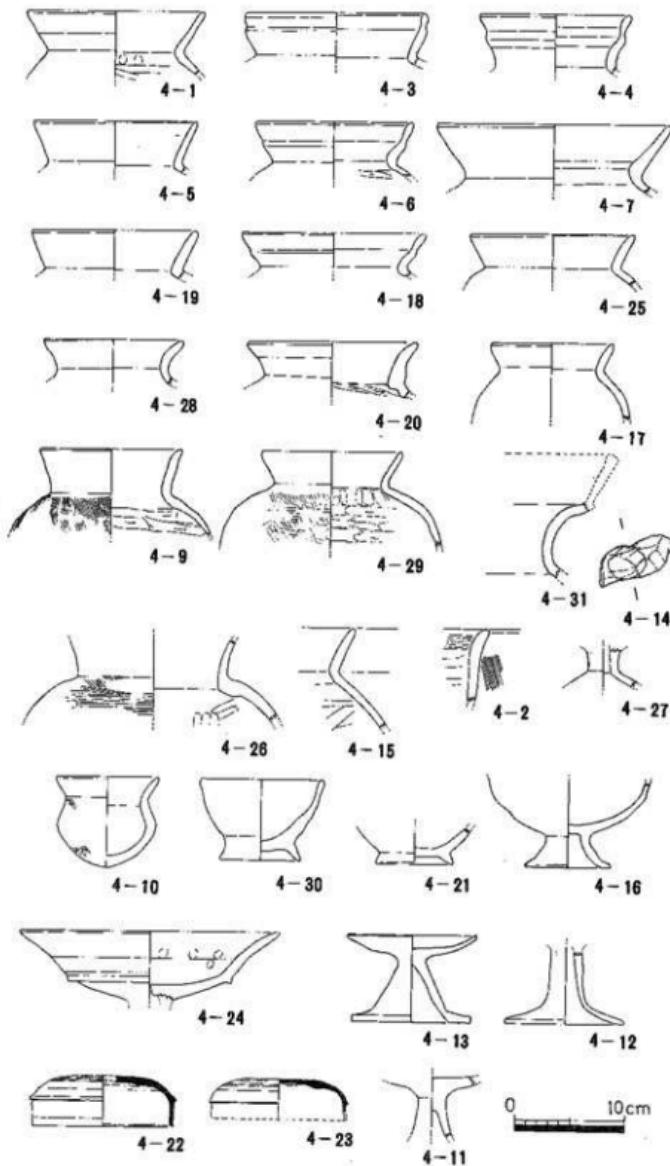
土層図はないが、土層を観察したところ、表土以下7層からなり、第3層から高台付の壺（第34図、4-21）須恵器の蓋壺の蓋の一部が（第34図、4-22、4-23）出土。第4層から大型の土師器質の高壺の壺部（第34図、4-24）第5層からは羽状文のある土師器質の壺頸部（第34図、4-31）が出土している。遺物包含層は主に第6層暗褐色土と第7層明褐色土である。若干の疊を含んだ地山明褐色土が2層ある。第6層からは土師器質の壺口縁（第34図、4-25、4-26、4-27）、第7層からは土師壺の一部や低脚付壺（第34図、4-29、4-30）が出土している。

各トレンチの概要を総合すると、第4調査区は、地形的にみて、東西方向と南北方向の二方向から、次のように考えることが出来る。東西方向では、各トレンチとも東端から西に向かって、緩やかに下降し、炭化物を伴う。遺物包含層は、各トレンチで異なりながらも表土下1m～1.6mの深さで認められ、特にC、D、E、Fの各トレンチでは、詳細は不明ながらも、他のトレンチと比較して多くの遺物を認めることが出来た。南北方向では南側の丘陵部、トレンチでいえば、GからFに行くにつれて、次第に下降して深くなり、Eトレンチの表土下1.6mを最深部としてD、Eと続き、B、Cトレンチに至って、次第に浅くなることが認められる。これに加えて、Aトレンチより直角に設定した二本のトレンチでは、掘り始めから15cm余りで明褐色土の地山を検出した。このトレンチからは、遺物、遺構とも検出できなかった。

以上のことから、第4調査区は、地形として緩やかな傾斜を伴ったおわんの様な形状の座地であることが認められる。この点に関連して、各トレンチの遺物の出土状態を考慮すると特にEトレンチからFトレンチにかけて他の調査区と同様に住居跡や遺構があったとも考えられる。又、一方では、より高位置の遺構からの流れ込みによってこれらの遺物が堆積したとも考えられるが、詳細は不明である。

#### 遺物の検討（第34図参照）

Cトレンチ（1群褐色土）4-1は土師器壺の口縁部から頸部にかけて残存している。口径は16.6cmを計る。焼成は良好で胎土に2mmまでの砂粒を少量含んでいる。色調は外面で淡橙色、内面が口縁部分で暗黄橙色、頸部で黒色を呈する。口縁部は単純口縁で「く」の字形に伸び、内外面に横ナデ調整を施している。頸部内面に指頭圧痕、鉗削り痕を見る。4-2は壺の口縁部分だが残存長が6cm余りで、口径や形態の詳細は不明である。端部は



第34図 第4調査区出土遺物実測図

丸く、焼成は良好。胎土はやや密で、内外面は暗褐色を呈している。口縁部の内面にハケ目、外面横ナデ調整。体部内面箝削り、外面ハケ目調整を施している。4-3は土師器壺の口縁部分で16.8cmを計る。複合口縁が退化したもので、胎土は密で焼成は良好である。内外面とも褐色を呈し、横ナデ調整を施している。口頸部は外反して上方に伸び、口縁部近くでやや内反して端部に至る。端部はやや丸い。4-4（1群褐色土）は土師器の壺の口縁部分である。外反する複合口縁の退化したもので、口径14.2cmを計る。胎土はやや密で、焼成は良好である。色調は内外面とも黄橙色を呈し、口縁部外面にハケ目調整の痕跡がある他は不明である。4-5は土師器壺の単純口縁である。頸部から外反して端部は丸い。口径15.2cmを計る。胎土はやや粗く、焼成は良好。色調は外面の一部に赤褐色を伴うものの、内外面とも黄橙色である。4-6は土師器の壺の頸部から口縁部分である。複合口縁の退化したもので、頸部から外反して器厚を増しながら立ち上がり、少しきびれを伴って端部に至る。端部は丸い。口径14.6cmを計る。焼成は良好で、胎土は密である。内外面とも黄橙色を呈し、体部外面に箝削り、その他に横ナデ調整を施している。4-7は口径21.8cmを計る比較的大きな壺の口頸部である。焼成は良好、胎土はやや密、色調は内面黄橙色、外面黄褐色を呈する。頸部内面に箝削り痕が認められる他は不明である。4-8（第34図）第7層出土の土師壺である。口縁部から肩部までが残存している。口径は14.6cmを計り、胎土には1~3mm程度の白色砂粒を少量含む。焼成は良好で色調は外面が橙色で赤色顔料を塗布している。内面は黄橙色である。口縁部はやや内彎ぎみにのびて端部は丸い。肩部は張っているが、胴部以下は欠損して詳細不明である。口縁部の内外面にナデ、肩部外面でハケ目調整、内面で箝削りを施すと思われるが風化が著しく判別が困難である。4-9（1群褐色土）は口径13cmを計る土師壺で、口縁部から肩部までが残存している。口縁部は「く」の字状に屈曲しており、端部は丸い。口縁部の内外面には横ナデ、頸部では縦ハケ後横ナデ調整、肩部外面で縦ハケ、内面で右方向のヘラ削りを施している。

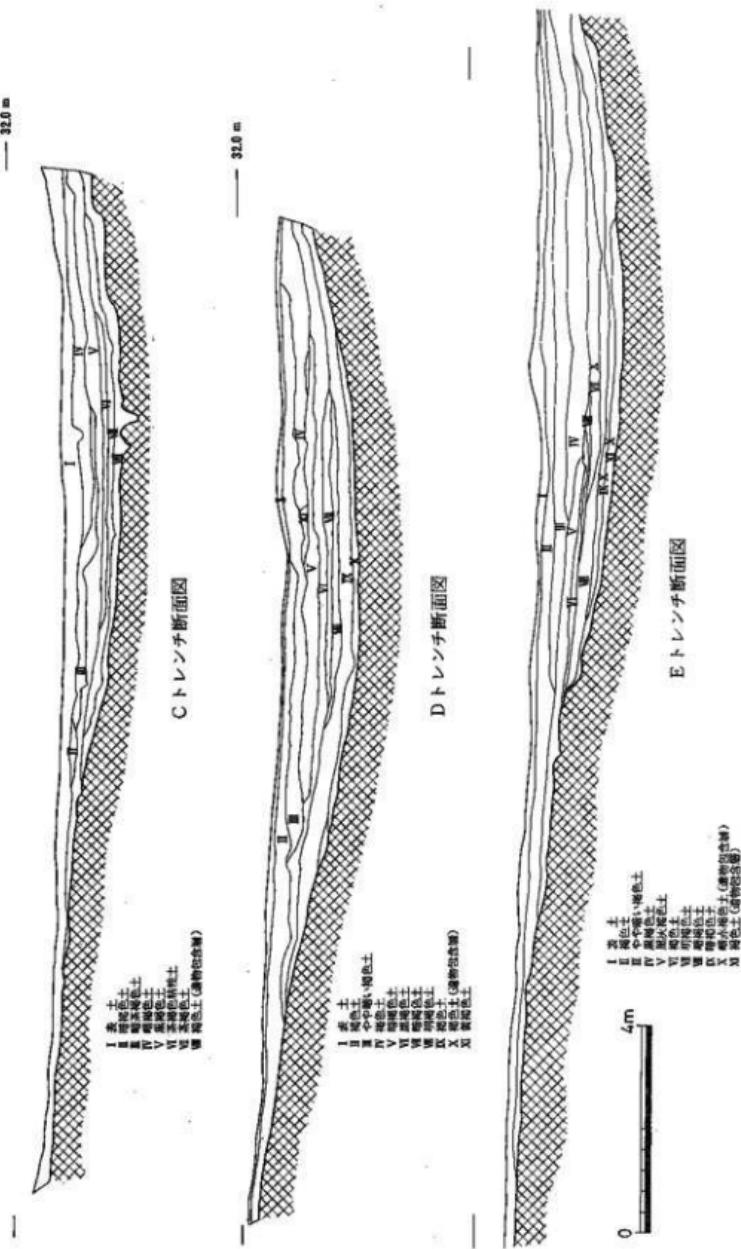
Dトレンチ 4-10（第10層褐色土）は口径9.6cm、器高8.2cmを計る。単純口縁の小壺である。体部最大径は9cm、底部はやや尖り気味である。焼成は良好で胎土はやや密であり、内外面とも黄橙色を呈している。外面にハケ目調整の痕跡が認められるが、内面のそれは不明である。4-11（第10層褐色土）は土師器の高坏の一部である。坏部の底部から、脚部にかけて残存している。焼成は良好で胎土はやや密、色調は内外面とも橙色である。調整は不明だが円板充填式と思われる。4-12（第1群）は高坏の脚部である。風化のため詳細は不明であるが、脚の根の径は11cmを計り、胎土に白色砂粒を含む。焼成は良

好で、色調は内外面とも淡橙色である。口縁部の中央に鈍い稜を残す。4-13は坏径が推定12cm、底部径11cm、器高8cmを計る土師器の高坏である。胎土は密で白色の砂粒を含む。焼成は良好で全体に赤褐色を呈し、横ナデ調整を施している。4-4は土師質の把手である。

Eトレント  
4-15はEトレント第7層より出土したものである。口径は不明。土師器の壺の口縁で頸部から肩部の一部を残している。胎土には2mmまでの砂粒を含み、焼成は良好で色調は内外面とも黄橙色である。4-16(第7層明褐色土)は脚径が7.9cmの土師質低脚壺であるが、坏部の口縁端部が欠損しており、器高、口径共不明である。残存する器高は8cmを計る。胎土には1~3mmまでの砂粒をやや多めに含み、焼成は良好である。坏部は体部から底部を残し、脚部は内彎した後、外反してのび、端部は丸い。壺の底部の外面に横ナデを施すことをみる他は風化が著しく手法の詳細は不明である。4-17(第7層明褐色土)は、口径11.3cmを計る土師壺である。胎土に1~1.5mmの白色砂粒を少量含み、焼成は良好である。色調は内外面共に剥落が激しく、部分的に橙色の他はおおよそ黄橙色を呈する。口縁部から肩部まで残存しており、口縁部は外反して伸びた後、内彎して端部に至る。端部は丸い。調整は全体として風化のため判然としないが外面で口縁部から肩部にかけて横ナデを施し、口縁部内面で横ナデ、肩部内面で箇削りを施していると思われる。4-18(第7層明褐色土)は、口径15.6cmを計る土師壺の口縁部分である。胎土に1mm程の白色透明砂粒を多く含む。焼成は良好で全体に橙褐色を呈する口縁端部外側にすすが付着している。口縁部は肩部より「く」の字に屈曲し、外反しながら端部に至る。端部は丸い。調整は口縁部の内外面共に横ナデ、肩部の内面に箇削りを施している。4-19は第9層暗赤褐色土より出土した土師器の壺口縁で、口径が18.2cmを計り、胎土に2mmまでの白色砂粒を少量含む。焼成は良好で色調は内外面とも黄橙色である。横ナデの手法を用いていること以外、特記すべきことはない。4-20(第11層褐色土)は複合口縁の退化した土師器壺口縁部である。口径17cmを計り、1.5mmまでの砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は内外面共淡橙色である。口縁部中央に鈍い稜を残している。

Fトレント  
4-21(第3層明褐色土)は高台付の壺である。口縁部を欠損しているが高台径7.4cmを計る。胎土はやや密で焼成は良好。色調は内面が黄褐色、外面が黄橙色を呈する。調整の詳細は不明である。4-22(第3層黄褐色土)は須恵器の坏蓋である。口径は13cmを計る。胎土には3~5mm大の白色砂粒4×5mmの灰色砂粒を多量に含み、器面に凹凸を呈する。調整は外面天井部の3分の2以上で回転箇削り、内面の天頂部には多方

第35図 各トレンチ断面図



向静止ナデ、天井部は疎密の差はあるものの一定方向のナデを施している。焼成は良好で堅緻、色調は天井部外面で青灰色を呈するが口縁部にいくに従って次第に灰白色に変じる。内面は薄青灰色である。4-23(第3層黄褐色土)は、須恵器坏蓋である。口径は端部が欠損しているため推定で13cmである。胎土に1mm程の白色砂粒や黒い炭化物の粒を多量に含む。調整は天井部外面で箇削りを施す他は回転ナデである。焼成は良好で色調は内外面共に青灰色である。4-24(第4層暗褐色土)は土師器高杯の坏部である。口径25cmを計る大型のもので、焼成は良好で胎土に2mmまでの砂粒を少量含む。色調は内面が橙色、外面が黄橙色で一部にすすが付着している。口縁部と底部の境に断面三角形の下方に伸びる稜を有する。口縁部内面から外面全体に横ナデ、坏部底部内面にハケ目調整を施す。部分的に指頭圧痕がある。4-25(第6層明褐色土)は土師器の壺の頸部から口縁部にかけて残存している。口径15.4cmを計る。焼成は良好で胎土は密である。色調は内外面とも褐色で、外面の一部にすすが付着している。頭部から外反して立ち上がって伸び端部に至る単純口縁である。端部は丸い。4-26(第6層明褐色土)は土師器壺の肩から頸部にかけての破片である。口縁部は欠損して口径は不明だが、頸部径は14cmを計る。胎土は密で焼成は良好。色調は内面が暗褐色、外面は黄橙色を呈する。頸部から外反して立ち上がる部分の外面は横ナデを施しているが内面はハケ目調整の痕が認められない。肩部外面にはハケ目、内面は箇削り調整が認められる。4-27(第6層明褐色土)は土師器質のものであるが、器種は不明である。胎土はやや粗いが、焼成は良好である。色調は内外面とも橙色を呈する。調整は不明である。4-28(第6層明褐色土)は土師器の壺口縁部で口径13cmを計る。胎土はやや密で焼成は良好。色調は内外面とも黄橙色を呈する。口縁部の内面にハケ目調整の痕跡が認められる他は不明である。4-29(第7層第3群暗褐色土)は口径12.8cmを計る土師壺である。口縁部から肩部にかけて残存する。胎土はやや粗く、1~4mm程度の白色砂粒を多く含む。焼成は良好で、色調は外面で黄橙色(一部で黒色)内面で橙色を呈する。口縁部は外反して伸び、内彎して端部に至る。端部は丸い。手法は特徴的で口縁部の内外面共横ナデ、頸部内面に指頭圧痕をみる。肩部外面にハケ目、内面に箇削り調整を施している。4-30(第7層明褐色土)は口径11.2cm、器高7.4cmを計る低脚付杯である。胎土に1~2mmまでの砂粒を少量含む。焼成は良好で、色調は内面が黄橙色、外面が橙色である。口縁部は内彎して伸び、端部に至る。端部は丸い。坏内部底部は深く、「ハ」の字に開く。調整は坏部、脚部共外面はナデ、坏部・脚部共内面に箇状工具による乱ナデを施している。4-31(第5層)は土師器の壺で、頸部のみ残存している。胎土は密で、焼成は良好、色調は乳白色である。頸部外面には羽状文がみられる。内面は横ナデ、肩部に

接続する端部では箝削りを施している。

#### (5) 第5調査区

第1調査区東約50m、第2調査区の南側の丘陵の斜面に設定したA～Nまでのトレンチ14本を総称して、第5調査区と呼称した。

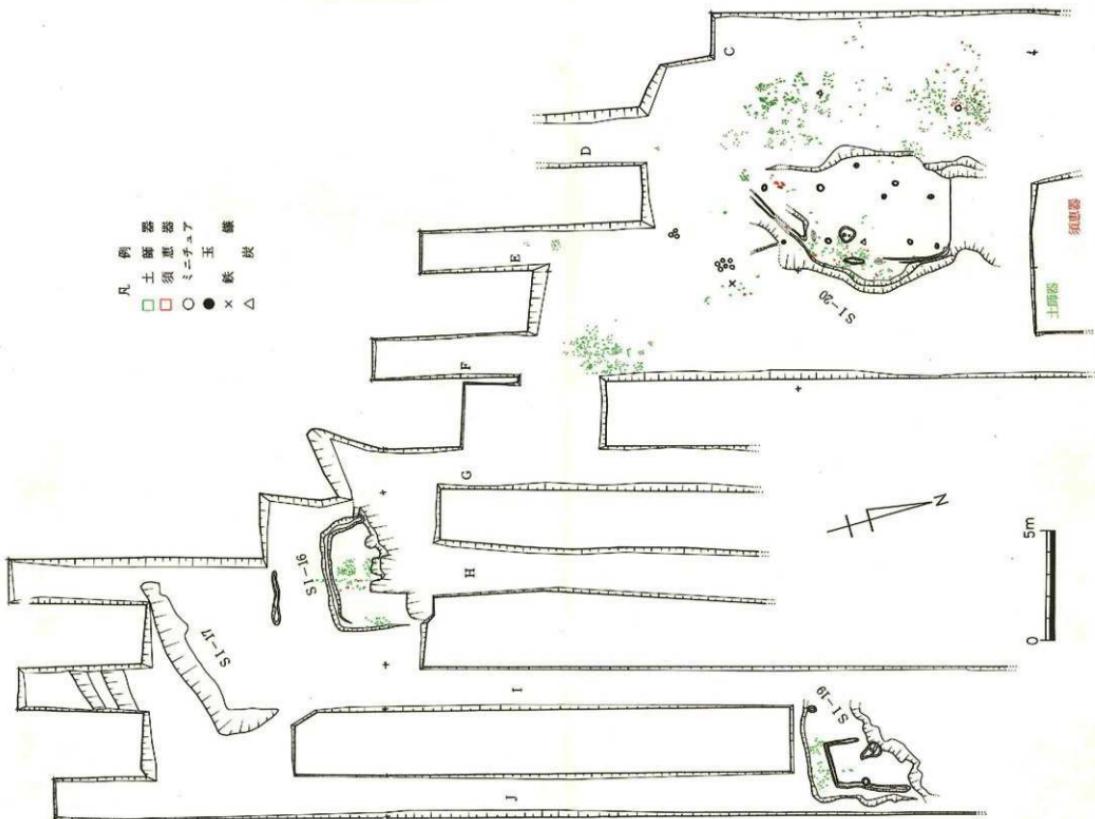
各トレンチ幅は2mで、3mの間を置いて斜面に直角方向に、長いもので43m、短いもので7.5mのトレンチである。このうちA、B及びK～Nまでのトレンチでは、若干の遺物が検出されたが、いずれも細片で、器形、調整等不明であり、遺構も検出出来なかった。C～Jにかかるトレンチ間では、断面で住居跡状の落ち込みが認められたので、これを拡張した結果、計4棟の堅穴式住居と思われる遺構(SI-16、17、19、20)を検出した。

##### SI-16

HトレンチとIトレンチの間で検出された住居跡である。北側は流失もしくは削平されしており3分の1程度を残すのみである。残存する床面は、南側で4.8mを計り、北に行くにしたがいやや広がっている。側溝は南及び西側で検出され、上端幅40cm～50cm、下端幅10cm～20cm、深さ8cmを測る。東側の溝は検出されなかったが、床面が斜面に沿って北に傾いているので、自然排水が行われたのかもしれない。柱穴は南側中央に1個検出された以外は認められない。南側の溝寄りに東西幅50cm、南北幅1mの範囲で炭化物の散布が認められた。

出土遺物のうち実測可能であったものは土師器壺片5(5-19、25、29、35、37)、高环片6(5-44、47、48、50、51、54)、低脚环1(5-58)、埴1(5-60)、小型壺1(5-64)、把手1(5-78)、須恵器环身1(5-96)、环蓋3(5-82、83、84)、翫片1(5-104)、把手付碗1(5-99)、壺片1(5-102)、高环片1(5-106)、勾玉1(5-81)であった。このうち床面直上と考えられるものは5点出土している。

5-29は、このうちの壺片である。口径12.4cmを測り、口縁部はやや外反しながらのび端部は丸い。口縁部は内外面ともハケ目、肩部は内外面とも箝削り調整を施している。5-19も壺の一部と思われ、復元口径13.4cmを測る。口縁は単純で端部は丸い。口縁内面はハケ目、外面は横ナデ調整、肩部外面はハケ目、内面は箝削りにより調整している。5-51は、高环の脚部で脚底径10.6cmを計る。手法等は劣化激しく観察出来なかった。5-47も高环片であるが、脚下部に径8mmの円孔を1か所穿っている。外面は回転ナデ、内面は



第36図 第5調査区遺構検出図

ナデの後にハケ目調整を施している。5-60は胴部最大径7cmを測る土師器の壺である。内外面とも指頭により調整後、外面は面とりを施し、更に横ナデで調整している。勾玉は(5-81)は長さ17mm、幅6mm、厚さ4mmを計るものである。松江市の友田遺跡でも小型の勾玉が出土しているが、全体に厚みがあり作りは精巧である。その他の遺物はS I - 1 6の上面から出土したもので、本遺構に関するものか、南斜面からの流入によるものか判断出来なかった。

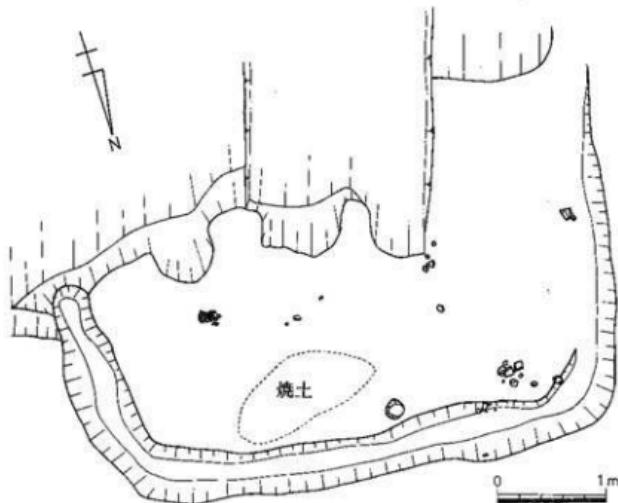
#### S I - 1 7

S I - 1 6 の南東約6mのH、Iトレンチ間で検出された。S I - 1 6と同じく、北側は流出もししくは削平されており、遺構面は残っていないものと考えられた。南側の住居跡を区画する段は、高低差が約70cmあり、やや北に広がる形で東に曲がっている。西側では観察出来なかった。また、側溝、柱穴等確認出来なかった。

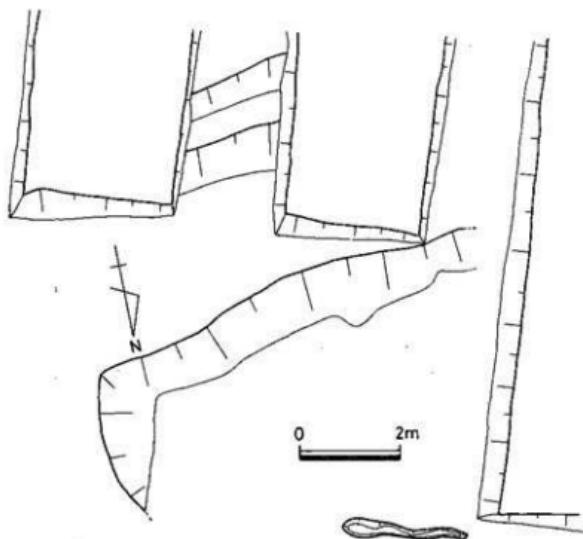
遺物は、低脚壺の脚部片(5-59)と甕片(5-17)が出土した。低脚壺は劣化激しく調整はよくわからない。胎土中に砂粒を多く含んでいる。甕片は復元口径20.2cmを計る。口縁部は内外面とも横ナデ、胴部内面に箇削り調整を施している。

#### S I - 1 9

S I - 1 6より北に20mほどの標高28m前後の堤廻遺跡の北端に位置する。S I - 1 6



第37図 S I - 1 6 遺構図



第38図 S1-17遺構図

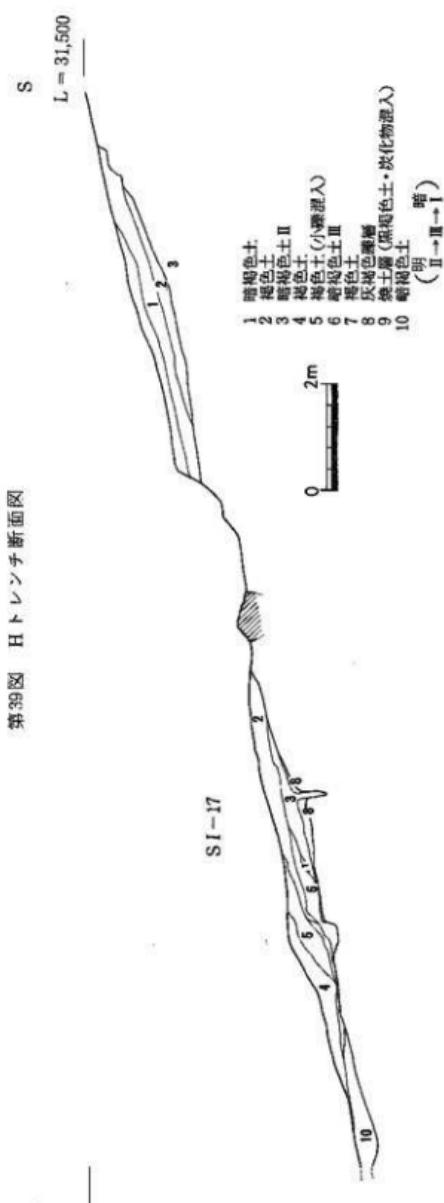
より10m程高く、S1-17からは1.8m低所にある。I、Jトレンチを調査中に確認したものである。住居跡を区画する落ち込みは、東辺で5mあり、直角に折れて南辺となり4m程でIトレンチに至り終わる。西辺はこのトレンチの調査中に削平された。北辺は急な斜面となっており、流失したものと考えられる。この落ち込みの内側に「コ」の字状に幅25cm、深さ10cm前後の内溝が掘られていた。柱穴状の遺構は南西隅と内溝の東辺中央部の内側で、それぞれ1個づつ検出された。

遺物は、住居跡床面上にはほぼ平均して散布していたが、いずれも細片であり、器種も不明なものが多いが、甕片が大部分を占めるものと思われる。このうち実測可能であったものは、いずれも口縁部は外反し、端部は丸く仕上げている(5-5、12、15、73)。このうち5-12は、口縁部にわずかに段を有している。調整は口縁内外面とも横ナデ、肩部内面は範削りをしている。口縁部と肩部の境を、内面から指頭により調整しているものもある(5-73)。須恵器は坏身片が1片出土している。口径10.8cm、器高4.7cmを測る。口縁部は内傾し端部は強く外反する。口唇部はわずかに段を有するが、先端は鋭い。受部はほぼ水平に張り出している。内外面とも横ナデにより調整するが、外部底面は横ナデの後に回転範削りを施している。(5-109)。

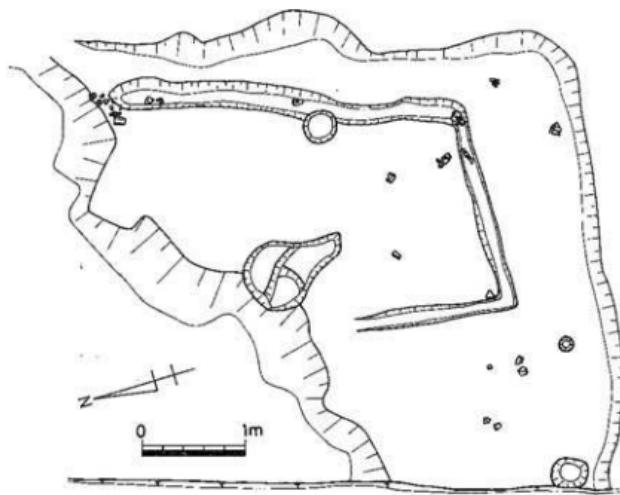
## S I - 2 0

S I - 1 6 より北西に 22 m ほど、  
S I - 1 9 からは真西に 22 m ほど  
のところにあり、高低差は S I -  
1 6 及び S I - 1 9 より 5 m ほど  
下位に位置する。東側で 75 cm ~ 55  
cm の掘り込みを「コ」の字状にもう  
けているが、西側はなだらかな斜面  
となっており、区域の確定は出来  
なかった。この住居跡の四隅には径  
20 cm ~ 30 cm 、深さ 30 cm ~ 10 cm の柱  
穴状の遺構があり、この他に中央付  
近でも穴の柱穴状の遺構が検出さ  
れた。住居区域は、南北長 7 m 、東  
西長 5.5 m で、北側の柱穴間は 2.2  
m 、南側の柱穴間は 2.4 m 、南北  
の東側の柱穴間は 4.9 m を計る。

遺物は、土師器壺、高环、壺の  
ほか、手づくねの小型上器が検出さ  
れた。5-38は単純口縁を有す  
る壺片である。劣化激しく調整は  
明瞭でないが、口縁部は外面と  
も横ナデ、肩部内面は箇削りにより  
調整する。5-1は壺の口縁から胴  
部上半部の破片である。外面は横  
ナデ、内面体部は箇削りにより調  
整したものと思われる。5-53は  
高环の破片と思われる。調整は不  
明。5-66、67、68は所謂手づ  
くね土器で、口径 3.4 cm ~ 3.7 cm 、  
器高 2.25 ~ 3.4 cm を計る。外面の



第39図 日トレンチ断面図

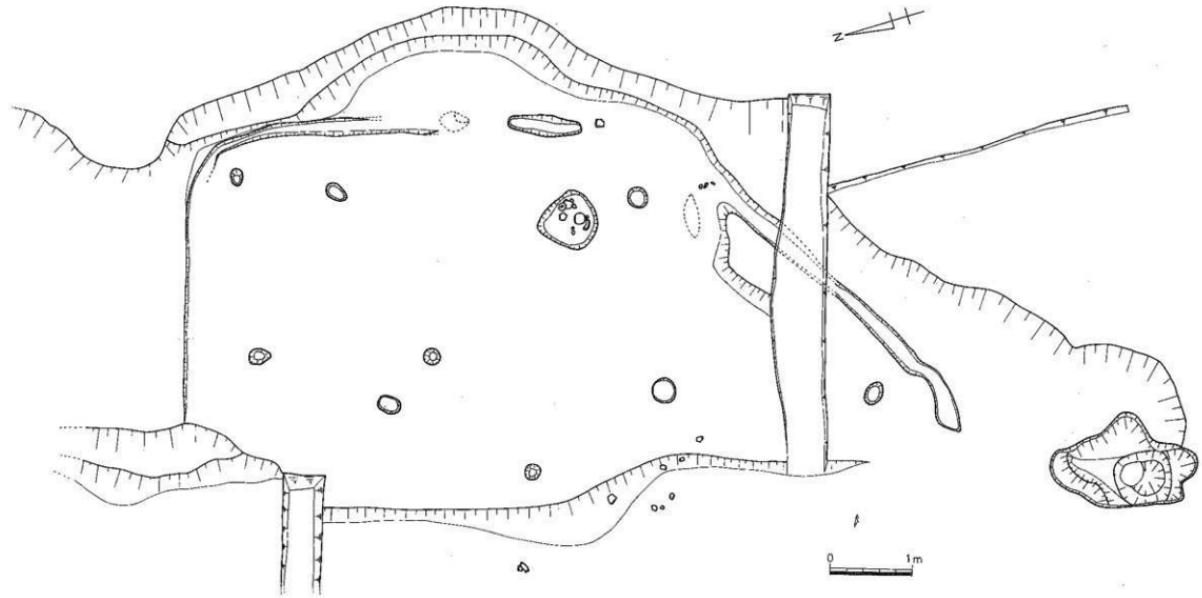


第40図 S I - 19 遺構図

調整は不明であるが内面は手びねりによる調整痕がある。胎土はやや粗いが焼成は良好である。

このS I - 20付近は調査開始当初より、須恵器、土師器とも各層より多量に出土し第5調査区中最も豊富な場所であった。地形上最も低地にある関係かもしれないが、所謂土器窯まりの様相を呈し、特にS I - 20の東側Fトレンチ付近と、S I - 20に隣接した西側の緩斜面に集中している。

東側の土器窯まりに見られる遺物の中で実測復元可能であったものは、土師器壺片10(5-4、8、9、13、16、18、21、22、36、42)と、壺の破片3(5-23、27、30)高壺片3(5-40、41、52)、小型壺2(5-61、62)、須恵器壺身片1(5-92)であった。土師器壺片は口縁部にわずかに段を有するもの(5-8、16、21、22)と単純口縁のもの(5-4、9、13、18、36、42)に分けられるが、いずれも内外面とも横ナデにより調整している。壺は、口縁部内外面ともに段を有しているものと(5-23、30)、単純口縁であるが口唇部を内側に折りまげているもの(5-27)がある。高壺は壺部と口縁部との境に段を有するもの(5-40、41)と、大型で深い壺部をもつものの(5-52)がある。段を有するもののうちの1個は内面に暗文状の磨きが施されている。(5-41)。



第41図 S I - 20 遺構図

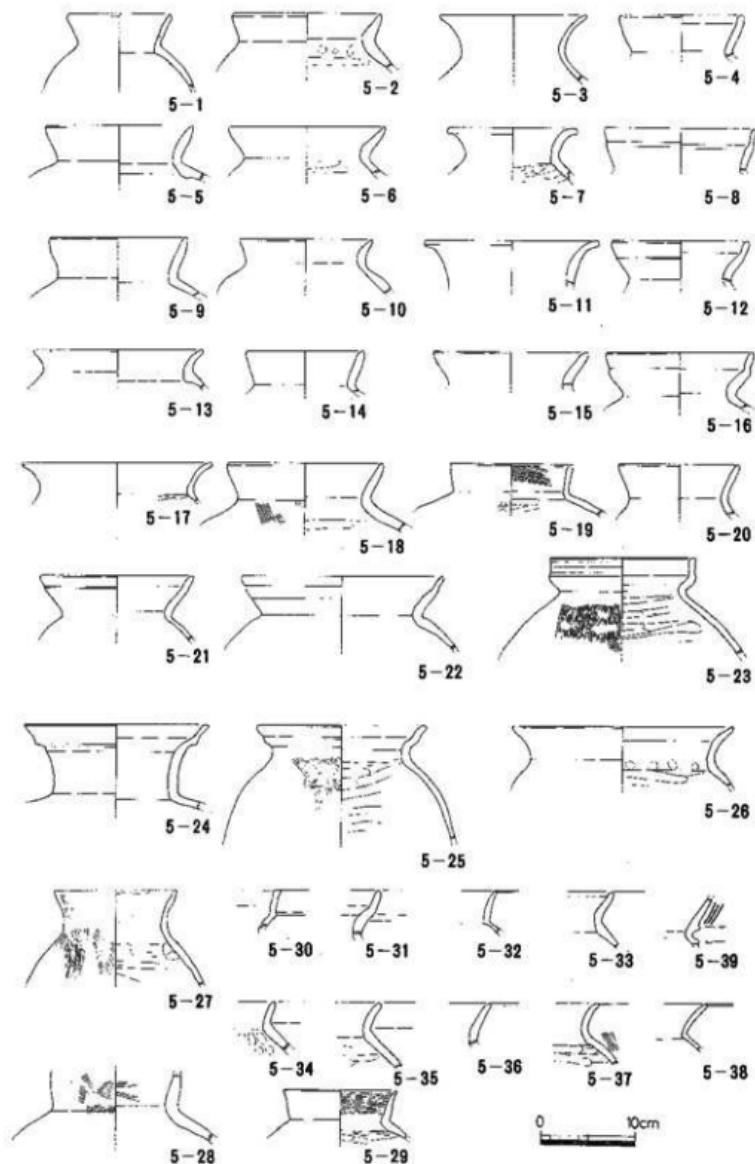
調整はいずれも劣化が激しく不明であった。小型壺は、器高7cm前後で樽円形の脚部に外反してのびる口縁部をもつ。須恵器坏身は口径11.2cm、器高5.4cmを計る(5-92)。口縁は内側し、口唇部は段を有し端部はやや丸い。受部は上外方に張り出している。調整は回転鎌削りを施すが、内面底部はさらに静止ナデにより調整する。

次に西側の土器灘よりにおいて出土した土器片のうち実測可能であったものは、土師器甕片11、壺片3、高坏片6、甕片1、把手3(5-75、77、79)、器台片1、手づくね土器2(5-69、70)、低脚坏1(5-57)、甕片2(5-72、73)、壺1(5-63)、坏片1(5-71)、須恵器坏身4、壺蓋1、壺片2(5-95、110)、碗1(5-111)、甕1(5-103)であった。土師器甕片は複合口縁の名残りのごとき段を有するものは1片で(5-31)、他は外反してのび、端部は丸いもの(5-2、3、6、10、11、14、20、26、33、34)である。いずれも口縁部内外面は横ナデ、体部内面は鎌削りにより調整する。口縁部と体部の境に指頭圧痕を有するものもある。(5-26、34)。壺は、かなり明瞭な複合口縁を有するもの(5-24)と、体部から垂直に立ちあがる単純口縁のもの(5-28)とがある。調整は表面の劣化が激しく判別しかねるが、口縁部は内外面ともハケ目、体部内面は鎌削りにより調整するものようである。底部内面に指頭圧痕のあるものもある(5-65)。高坏は、坏部の形態がわかるものではなく、すべて坏体部から脚部の破片であったが、坏部に段を持たないものと思われる(5-45、46、49)。脚部は細く、脚底部に至り大きく開く。胸部は丸く仕上げる(5-43、45、46、49、55、56)。低脚坏は脚底径6.4cmを計るもので、脚部は幅1cm前後で、上下に面とりを施している。坏部、脚部とも朱が付着している部分がある。5-39は、器台の一部と思われる。坏部外面は鎌磨き、筒部は横ナデにより調整している。手づくね土器は2個体出土した。5-70は口径3.2cm、器高2.6cmを計るもので、底部に径1cmの円孔を穿つ。須恵器坏身は、いずれも口縁は内傾し、口唇部に弱い段を有し、端部は丸い。底部は鎌削りにより調整する(5-88、91、94、98)。壺蓋(5-90)は、口径12.8cm、器高4.9cmをはかるもので、体部は強い鎌削りにより調整、意図的に綾を作り、口縁部と体部を分けている。口唇部は段を有している。碗(5-101)は、口径9.4cm、器高4.0cmを測る小型のもので、体部中央に波状文を施すもの。底部外面に鎌記号のごとき沈線がある。

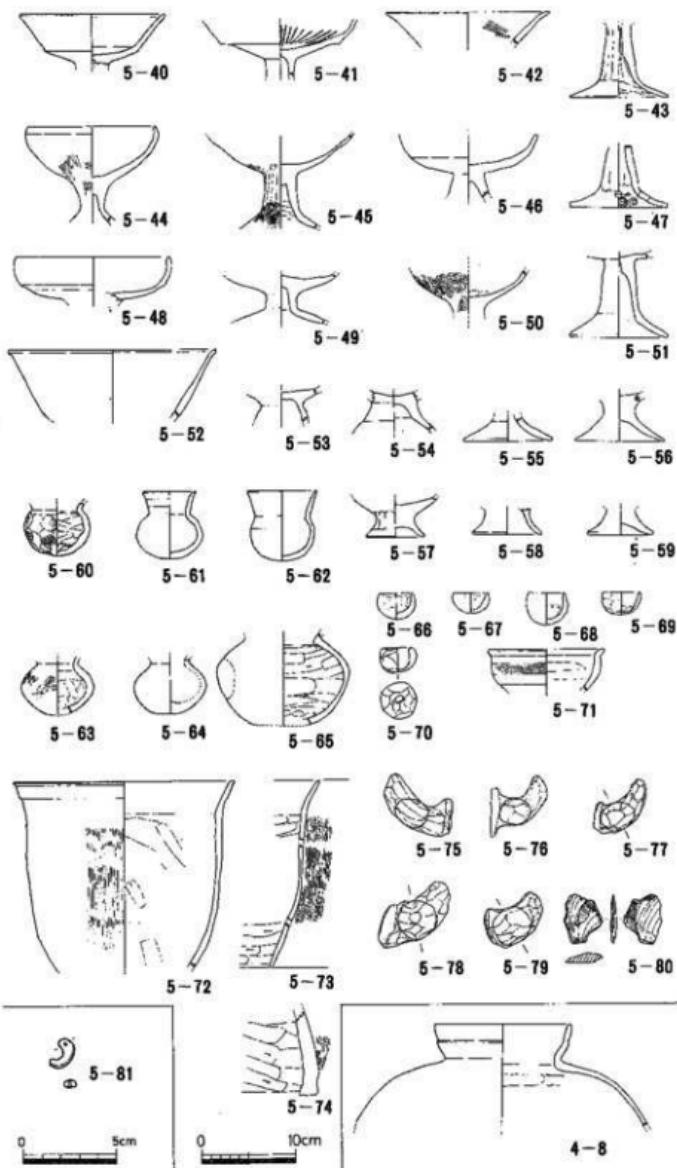
#### 小 結

以上のように、本調査区で確認された住居跡は4棟であった。S I - 17以外では、住居床面及び、その周囲から土師器、須恵器とも大量に発見され、器種も豊富であった。この中で土師器甕、壺類を見てみると、複合口縁の退化したものと、単純口縁のものだけで

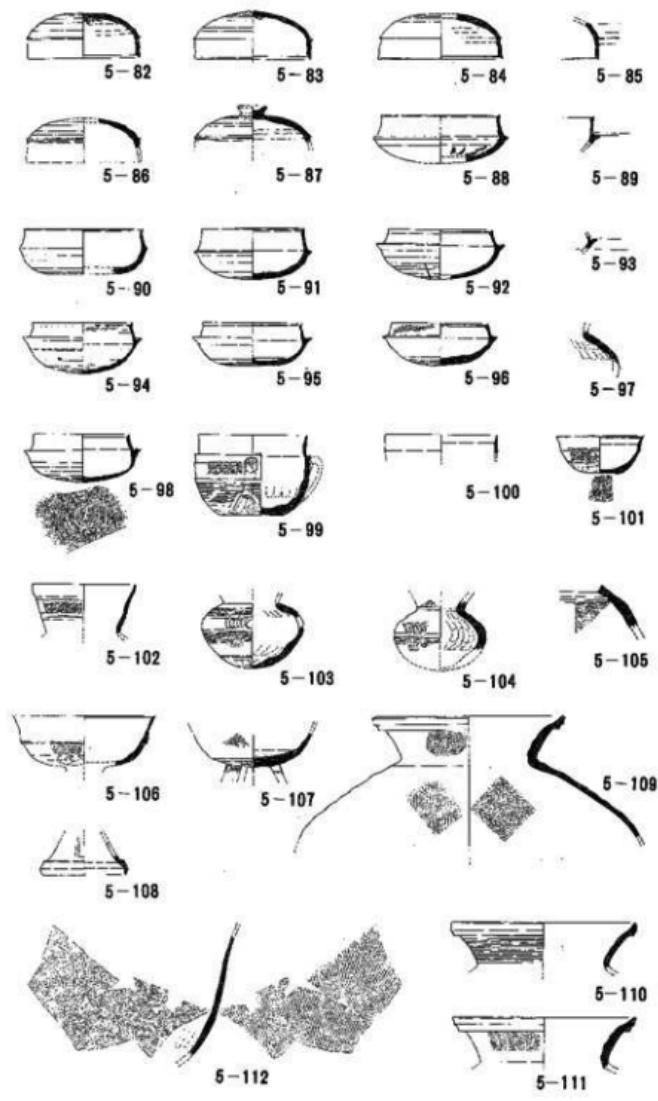
あり、いずれも須恵器を同伴している。須恵器坏身及び坏蓋は、口縁部は高く（1.5～2.5cm）内傾し、口唇部に段を有するもので、これは山陰地方では古い形態に属するものであろう。S I - 17 は遺構の残存状態も悪く、遺物の量も少ないとから、時期的な判断は出来ないが、これらの出土状態から考え得るに、各住居跡は堤廻遺跡の比較的新しい時期（Ⅲ期）に時期的差異なく築成されたもので、須恵器出現時期か、それよりやや下る時期に當まれたものであろうと考えられる。



第42図 第5調査区出土遺物実測図(1)



第43図 第5調査区出土遺物実測図（2）



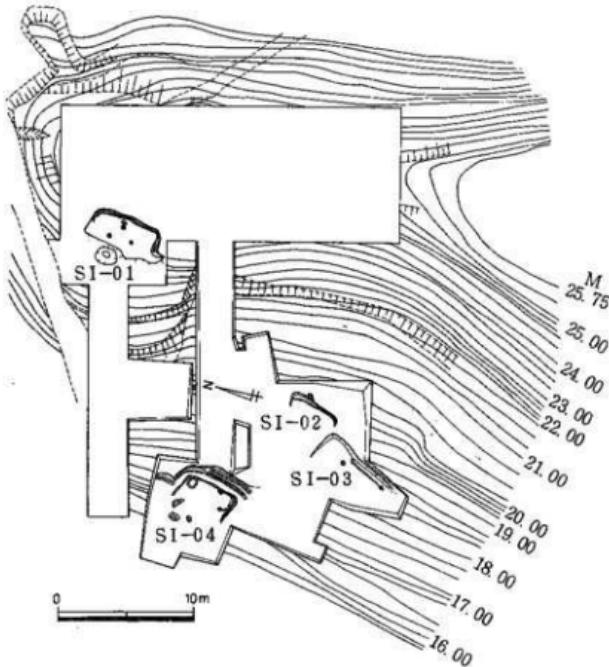
第44図 第5調査区出土遺物実測図(3)

## (6) 第6調査区

### ◆SI-01

立地 丘陵の西側斜面最上部に位置する。

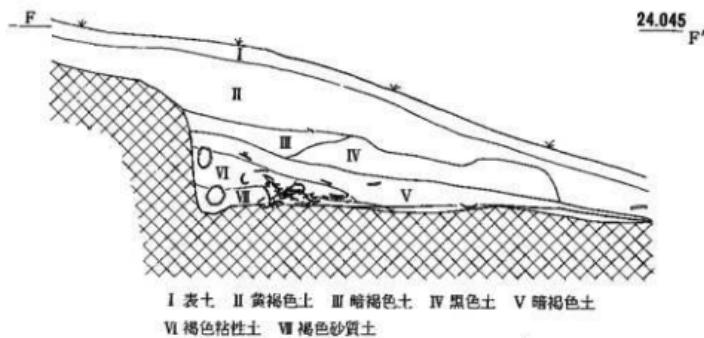
造構 斜面を上部に向けて平面「コ」の字型、断面三角形状に切断し平坦面を作り出したもの。平面積は 10 m<sup>2</sup>。三方の壁の内、東壁は高さ 62 cm、長さ 5.0 m、北壁は長さ 1.9 m、南壁は長さ 1.85 m、いずれも西端部は自然斜面とぶつかり消滅しており、貼床などで床を延長していたのかどうかは分からなかった。壁の直下には幅 15 cm、深さ 5 cm ほど周溝が廻るが、西壁中央部分において長さ 11 cm 程の区間は途切れる。床面の中央より主柱穴と思われるビットが 2 本ある。さらに、西側斜面にも 2 本確認され計 4 本を数えた。それぞれの柱間寸法は東西方向が 1.9 m、南北方向が 1.8 m を計る。又、東壁中央部には、他の用途に供されたものと思われるビットが 2 本東西方向に接して確認された。斜面に穿たれたビットの内、北側のビット (P-1) の周囲には、南北幅 1.5 m、東西幅



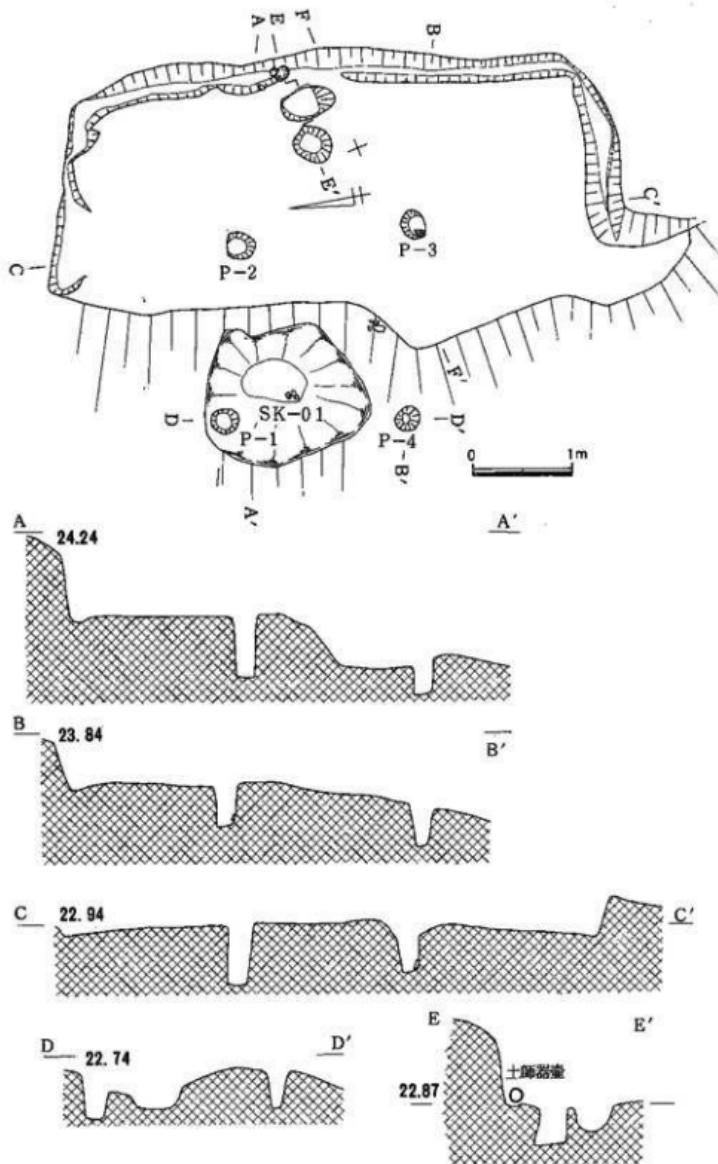
第45図 第6調査区遺構図

1.35 m、深さ 0.54 m の、底面が平坦な不定形の土壌 (SK-01) が穿たれていたが、ピットとの前後関係はよく分からなかった。

遺物 S I - 01 に関する遺物は主として住居跡内の北東部に集中し、床面から 30 cm 上部までの褐色土層中に最も多く包含されていた。器種は須恵器大型縫 1、須恵器壺蓋 1 個体及び同口縁破片、土師器長頸壺 2、土師器高杯、滑石製白玉 2 などである。

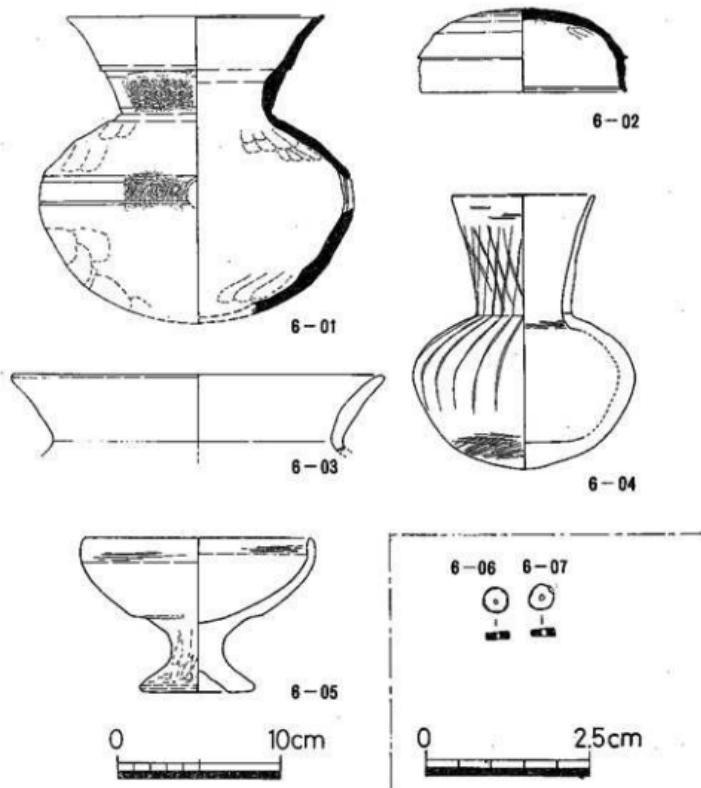


第46図 S I - 01 土器出土状況図



第47図 S 1 - 0 1 造構図

6-01は須恵器の大型罐で第4層から出土。口径14.6cm、推定器高20.5cm、頸部径8.8cm  
体部最大径20.3cmを計る。口縁部の調整はのみ刃状の断面で内側に設をもち、外面は、頸部と口縁端部とのほぼ中間に鋭角の突帯を一条設け、その上下に沈線を施す。下の沈線と  
頸部との間には5条～7条の櫛目条の波状文が2段にわたって施されている。又、頸部直  
下にも非常に細かい沈線が2条向っている。体部最大径の直上には幅1.2cmの間にやはり  
櫛目状の文様が施され円孔は縦2cmを計り、横その他は不明である。その上下には幅1.5  
～2cmの沈線を施してある。色調は淡黄白色をして焼成は脆い。6-02は坏蓋で、第5層か  
ら出土。口径12.6cm、器高5.1cm、口縁端部は段を有し、のみ刃状を呈しながら垂直に立



第48図 S.I.-01 出土遺物実測図

ち上がる。天井部は左回りの回転麓削り、胎土は密で、1～2mmの砂粒を含む。焼成は堅く灰白色を呈する。6-03は、土師器の壺の口縁部で口径23.2cm、中ほどが厚み1cmと分厚くなる。調整は不明。6-04は長頸壺で住居跡内の奥壁ぎわに横倒しの状態で出土。第2層の黄褐色上層に含まれていた。口径8.8cm、頸部径5.8cm、体部最大径13.8cm、底部は丸底で、体部高9.3cm、長頸部高7.5cm、総高16.8cmを計る。体部の内、底部付近は外側横方向のハケ目調整、それ以上は横方向のナデ調整を施す。底部中央部の厚みは1.5cmと分厚い。頸部から口縁部にかけて外方に広がり口縁端部は丸い。口縁直下は横方向の刷毛目調整を施す。体部外側と頭部へ口縁部の外側面にかけて赤色顔料が塗布してある。さらに、口縁と底部付近を除く外側にやや斜方向の直線となる暗文が施されており、頭部では格子目となっている。線の間隔は7～8mmを計る。6-05は高杯で器高9.5cm、杯部は口径14cm、高さ4.9cmを計り、全体として丸味を帯びた碗状で口縁は直立し、端部は丸い。口縁直下の内面は横ナデ、外側は横ハケの調整を施す。脚部は4.6cmと低く中位で直径3.2cmともっとも細くなり、脚端部で7.2cmを計る。脚部内面は最大2.3cmと浅いくり込みで脚端底部は1.3～1.6cm幅で平根面を成す。外側には指頭圧痕が残り中半手すくねという感が強い。脚部外側と杯部内外面に赤色顔料を施す。住居跡内覆土の第5層中から出土。6-06は滑石製有孔円板で直径5mm、厚み0.85～0.95mm、円孔は直径0.75～1mmを計る。6-07は同じく有孔円板で、直径5mm、厚み0.85～0.9mm、円孔は直径1mmを計る。

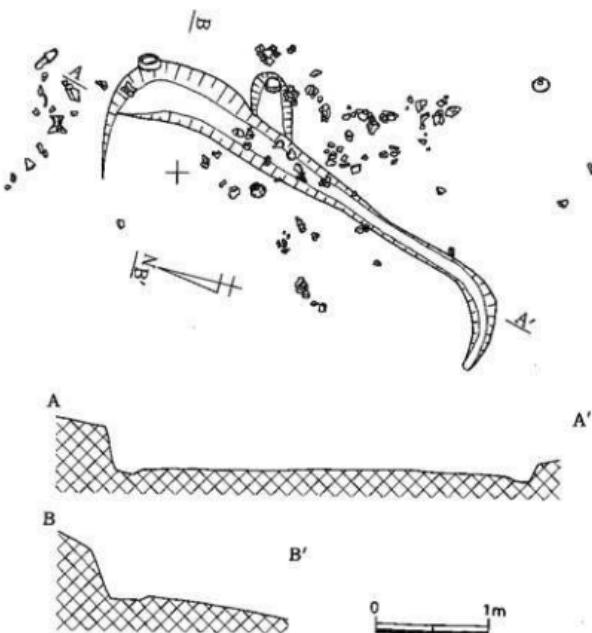
#### ◆SI-02

立地 SI-01から南西下14.5mの西斜面中間に位置する。

遺構 斜面を「コ」の字型に掘削して床面を形成する。東辺は南北長3.35m、高さ0.41mを計る。北辺は1.0m、南辺は0.65mでそれぞれ斜面に接し自然消滅している。東壁中途から西側斜面上方に向けて長さ0.5m、幅0.35mの溝が走り、さらにその最奥部にピットが1本認められたが性格は不明。住居跡床面には柱穴と思われるピットは全く検出できなかった。

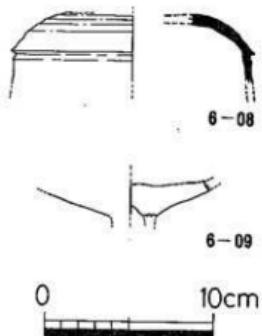
遺物 土器が覆土中や床面上部から集中的に出土した。器種には須恵器（蓋、有蓋高杯）土師器では壺、甕、高杯がみられる。土師器が圧倒的に多い。

6-08は、須恵器の蓋である。第2層の黒色土層から出土。段付近で径12.2cmを計る。天井部の中央と口縁端部を欠失し、残存高4.2cm。天井部は左回りのヘラ削り調整を施し、段の突起は鋭くその直下はえぐれるような形で入り込んでいる。端部はやや外方へ開く



第49図 S I - 0 2 造構図

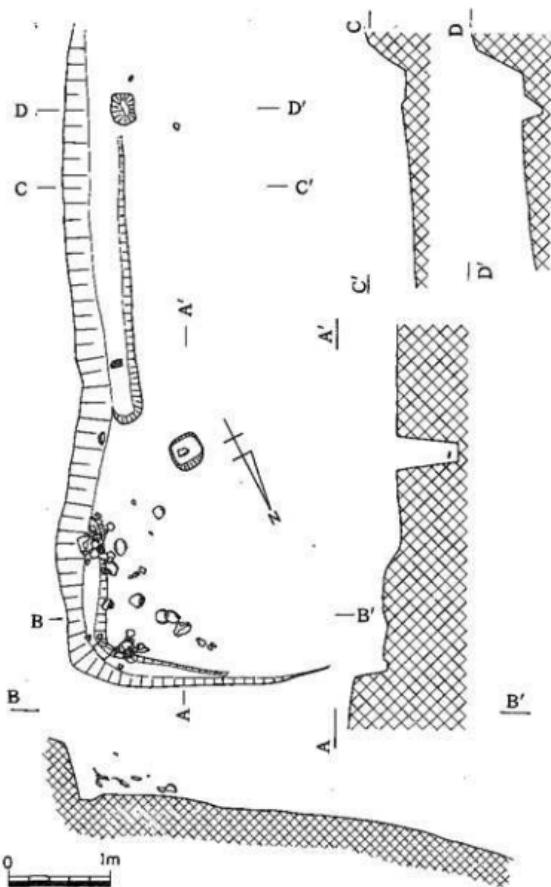
ようである。須恵器片では他に有蓋高环の破片も出土しているが S I - 0 4 付近でも同一個体の破片が出土しており、S I - 0 4 の項で説明することとする。6-09は上飾器高环の接合部である。接合部の径は 3 cm を計る。有段式のもので环部の中心で厚み 1.3 cm、接合部上の厚み 1.8 cm、环部の破片先端部の厚み 0.6 cm を計る。胎土はやや粗で焼成は良。内外面共に黄褐色を呈する。



第50図 S I - 0 2 出土遺物実測図

立地 SI - 0 2 の西南下方にほぼ接して立地する。

造構 東辺にあたる壁は、2.75mほど南でやや角度を南に変えさらに3.5 m続いている。この角度を変えたあたりから浅い周溝がめぐっている。南辺については確認出来なかったが北辺についてはほぼ直角に2.5 m折れ曲がっており東辺から北辺の角付近を中心に長さ

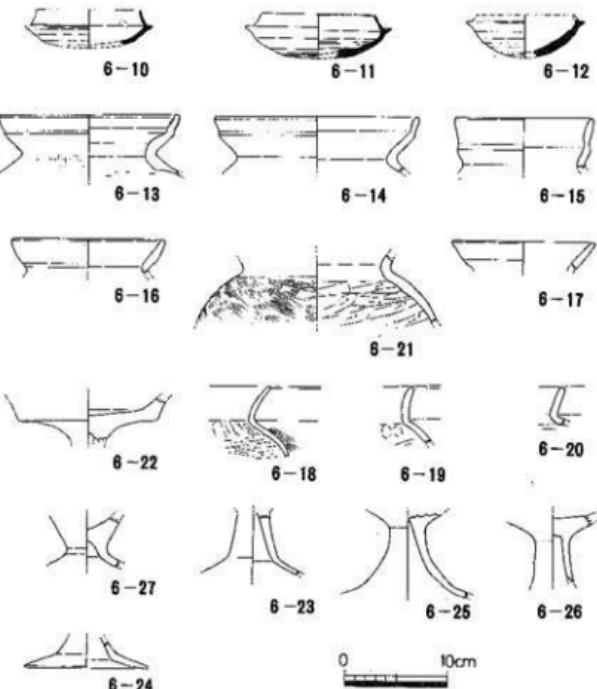


第51図 SI - 0 3 造構図

2.4 m、幅 20 cm、深さ 6 cm の周溝が認められた。東辺はあわせて 6.25 m 以上になりこれで 1 軒分の壁とするとやや長すぎる感があり途中で角度が変わっていることを考慮に入ると案外 2 つの住居跡が重なっていたかあるいは南へ拡張した結果かも知れない。ピットは 2 木ありその柱間距離は約 3.4 m を計る。北側のピット内からは須恵器の蓋の破片が落ち込んでいた。

遺物 住居跡内の床面近くや住居跡西方周辺から多く出土した。土器類には須恵器の坏身、土師器では、壺、甕、高坏がみられる。

6-10 は、P 0 1 内から出土。底部を欠く坏身である。口径 10.3 cm、残存高 3.4 cm を計る。受部は丸味を帯び殆んど水平方向に短かくのびる。口縁部は内反しながら傾き、端部は無段で丸味を帯びる。底部外面は、右回りの回転鏗削りを施す。6-11 は、坏身で底部中央を欠



第52図 S 1 - 0 3 出土遺物実測図

く。口径 11 cm、残存高 4.3 cm を計る。受け部は外上方へのび、口縁部はほぼ直線状に内傾する。端部は平坦面を斜めに形成している。底部は、右回りの回転鎔削り調整を施す。

6-12は、坏身で、口縁端部と底部中央を欠く。受け部径 11.7 cm、推定口径 9.4 cm、推定器高 4.1 cm を計る。坏部は、厚み 0.5 ~ 0.9 cm と分厚く、受け部は水平方向に短かくのびる。推定される全体の器形は、口縁が低く、直径に比べて深さが深すぎることである。底部外面は、右回りの回転鎔削り調整を施している。

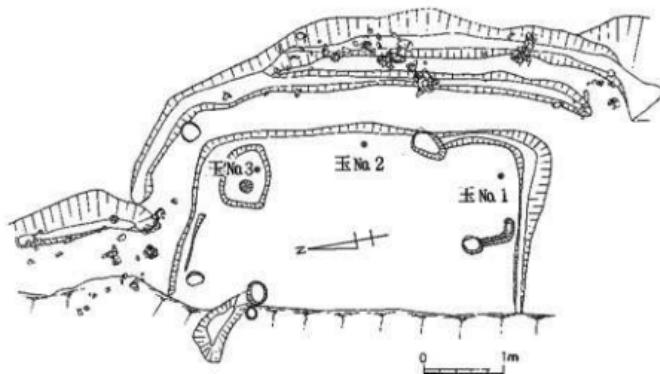
土師器では、まず 6-13~6-15 が複合口縁が退化した型式のものである。6-13 は、口径 17.5 cm を計る；肩部より口縁部にかけては「く」の字形をなし、口縁部外面に丸味を帯びたかすかな稜をもち、口縁端部は平坦である。肩部内面はヘラ削り、肩部外面はハケ目調整後横ナデを施す。他は横ナデ調整。胎土には 0.5 ~ 1 mm の白色砂粒を含み、焼成はふつう。赤褐色を呈する。6-14は、口径 20 cm、口縁部外面に段をつくる。口縁部外面は横ナデ調整を施す。胎土はやや密で焼成は良好。内外面とも黄橙色を呈する。6-15は、口径 13.6 cm を計り、口縁部内外面に段を設ける。内外面共に横ナデ調整を施す。次に 6-16~6-20 までは、単純口縁の壺の型式である。6-16は、口径 15 cm、口縁部は外上方に内擣気味にのびる。6-17は口径 14 cm 口縁部は直線状に開く。6-21は壺の頸部から体部の肩部にかけての破片で肩部内面は斜め下から上へ向けたヘラ削り調整、外面は斜め方向の刷毛目調整を施す。6-22 ~ 6-27 は高坏の破片である。6-22 は坏部に稜をもつ式のものでその部分で直径 13.3 cm を計る。脚部との接合部付近が水平方向になることが特徴である。6-23、6-24 は脚端部がくの字状に折れ曲って開くものだが、6-25 はラッパ状にカーブして開くものである。6-27 は、坏部内面が平坦でなくすりばち状に凹んでいることや脚部もすぐに関いていることから高坏というより、小型台付の深鉢とでもいべきものである。

#### ◆SI-04

立地 丘陵西斜面の最下位にあり、SI-03 から北西に 6.5 m 降りたところである。

遺構 東辺 4 m、北辺 1.7 m、南辺 2.0 m を遺存する。北辺と南辺は西部に向けて自然斜面となっている。残存面積は約 8 m<sup>2</sup>、東壁の外周には排水施設と思われる溝が北部では 1 条、中央部から南部にむけては 2 条に分けて設けられている。北部の溝はさらに別の溝に一段下がって続くようである。ピットは 17 本あったが主柱穴と思われるピットは不明である。深さ、形状、間隔等いずれも不均一でにわかに断定し難い。とりわけ P 1 は東壁の下部にもぐり込む断面であり通常のピットと形状が違う。又、SK-01 は填底から臼玉 1

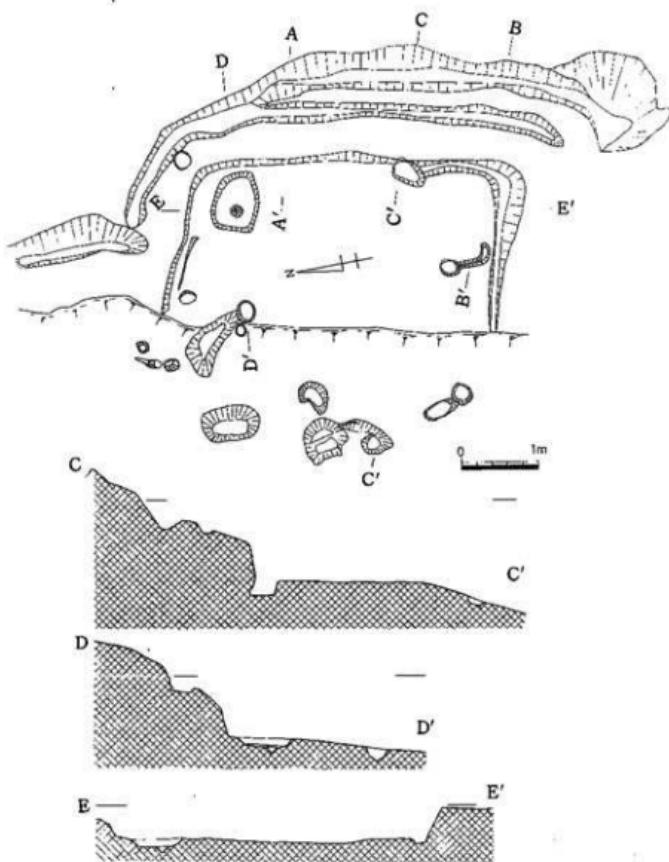
個を検出するなど特異な土壤である。住居内の溝は、南壁直下に幅 10 cm、深さ 5 cm の周溝がめぐりそれは東壁に沿って折れ曲がり P 1 に到達して終わっている。一方、北壁の一部 0.7 m の区間にもあり、幅 12 cm、深さ 5.5 cm を計る。住居跡の北側には幅 0.6 m の平坦部があり西側は自然斜面となっているが土器はかなり包含されていた。ここに別の住居跡があったのか、あるいは道に当たる部分なのかいずれとも決し難い。



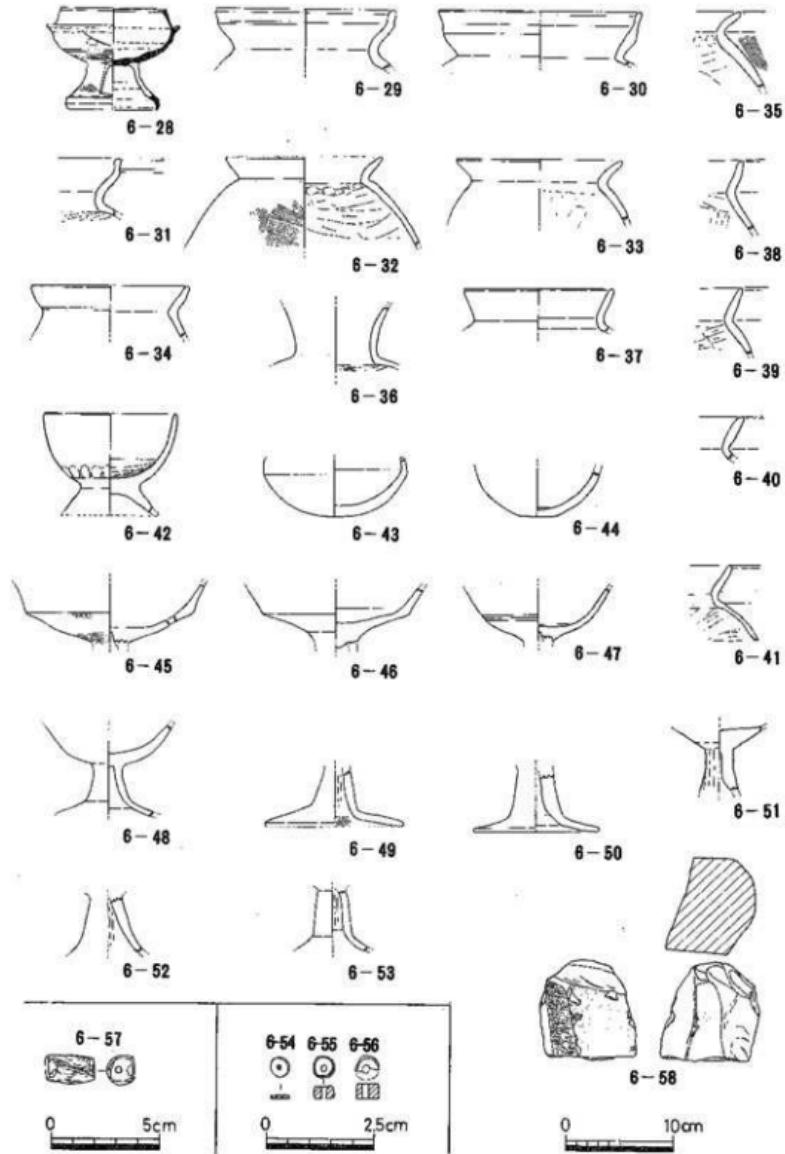
第53図 S 1 - 0 4 上器出土状況平面図

遺物 須恵器、土師器、滑石製白玉、付近から砥石、碧玉製黄玉の半製品が出土している。須恵器は、有蓋高坏 6-28 が 1 個体ある。破片は S1-02 周辺からも出土しており原位置は不明。口径 10.6 cm、接合部径 4.8 cm、脚端部径 8.8 cm、器高 9.9 cm を計る。坏部は深さ 4.8 cm と深く、受け部は外上方に 5 mm ほど突き出る。立ち上がりは、やや内傾するも高さ 2 cm と非常に高く、端部は有段式で分厚くなる。脚部は長方形の透しを三方一段に設け端部は逆に内側に反り気味で直立する。土師器は、壺、甕、椀、台付椀がある。壺、甕には複合口縁の退化したもの 6-29~6-31 と単純口縁のもの 6-32~6-41 がある。6-30 は口径 19.2 cm を計り、口縁直下で 9.5 mm と分厚くなる。6-29 と 6-31 は、口縁部が頸部から一度外反するが、上半部では内反しほぼ直立する。6-29 の口径は 17 cm を計る。6-33 は、口径 16 cm を計り頸部以下の内面はヘラ削り、口縁部内外面は横ナデ調整を施す。6-32 は、口径 14.7 cm を計り、「く」の字状の頸部より口縁部は外反しつつ端部に至る。端部は丸く、肩部は直線状に下がっている。頸部内面に指頭圧痕があり、体部外面はハケ目調整、口縁部は内外面共に横ナデ。頸

部内面以下はヘラ削り調整を施す。6-42は、台付椀である。坏部高さ6cm、口径12.4cm、接合部径5.6cm、台の遺存高は3.2cmを計る。6-43、6-44は、椀である。底部は6-43は丸底だが6-44は直径3.6cmの範囲が平坦となっている。口縁部は6-43ではほぼ直立するようである。6-45～6-53は、高坏である。坏部は6-45、6-46のように段を設けるもの、6-47のように段が形骸化したもの、6-48のように碗状になるものの3態に分かれる。6-49～6-53は脚部でいざれも脚端部が「く」の字状に折れ曲っていく式のものである。滑石製白玉は、住居跡内から3点出土した。6-54は、東壁近くの床面上



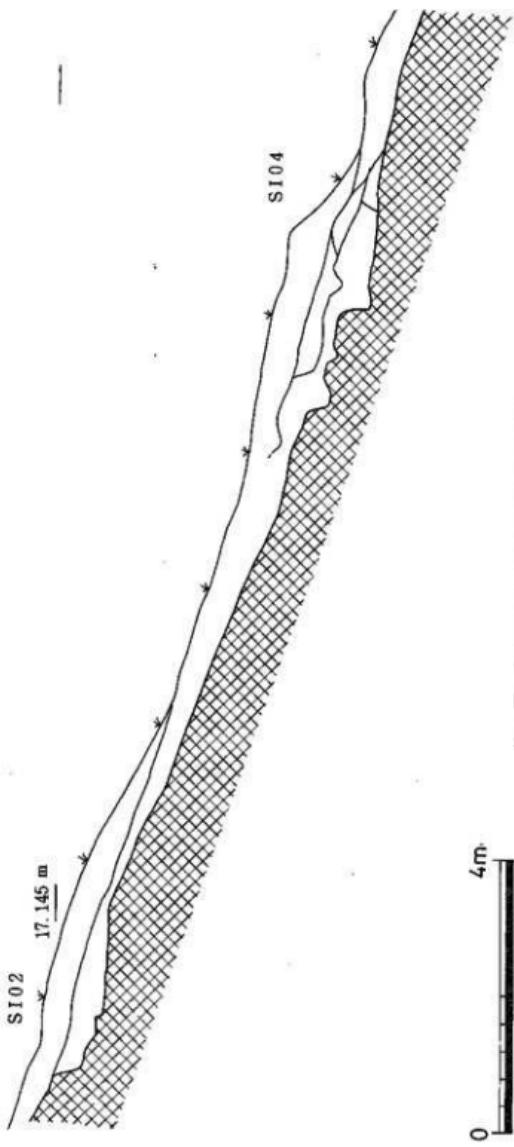
第54図 S I - 04 遺構図

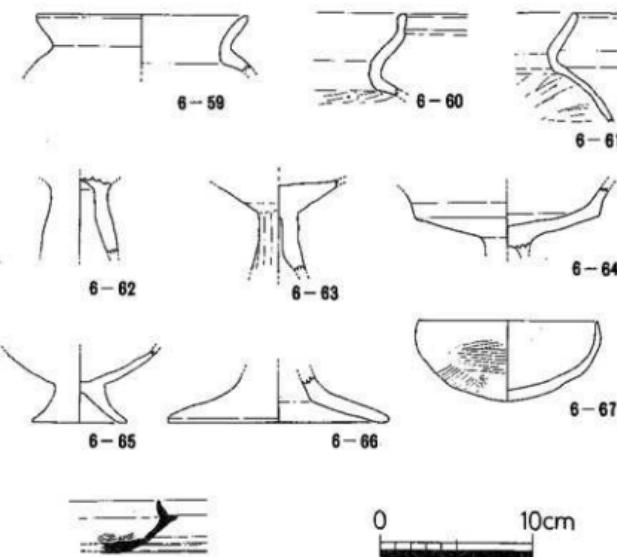


第55図 S1-04 出土遺物実測図

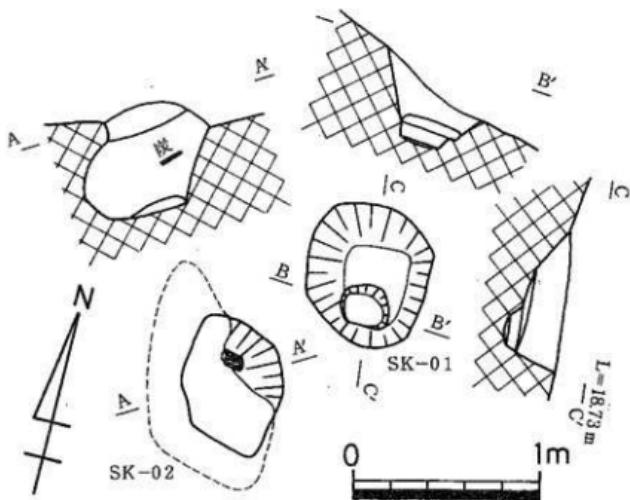
から出土。直徑 4.5 mm、厚みは 0.8 mm とうすい。円孔は直徑 1 mm を計る。6-55 は、直徑 5 mm、厚み 3 mm、円孔は直徑 1 mm 強、SKO1 内底面から出土。6-56 は直徑 5.5 mm、厚み 3.5 mm、円孔の直徑 1.5 mm を計る。東壁近くの床面上 2 cm の覆土から出土。碧玉製の豪華未製品は住居跡の北側 D4 区の第 2 層である暗褐色土層から出土。長さ 2.3 cm、厚みは中央部で 1.3 cm、図の左側面で  $0.9 \times 1.2$  cm、右側面で  $1.0 \times 1.2$  cm を計る。中央部がふくらむので豪華でよいだろう。右側面から直徑 3 mm の円孔を穿っているが、奥行 6.5 mm まで止まっている。又、表面は 9 面取りが施してあるので研磨又はせん孔の過程で中断

第 56 図 S I - 0-2、S I - 0-4 縦断面図





第57図 第6区出土遺物より（その他）



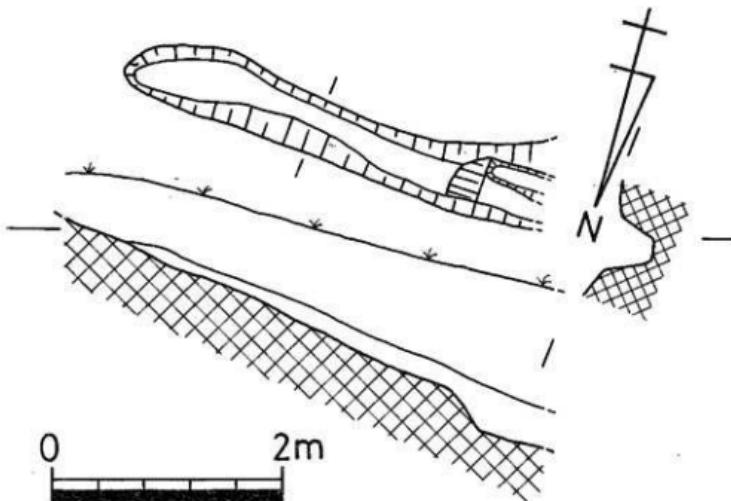
第58図 SK-01、02実測図

された状態である。6-58は、砾石である。硬い砂岩質で淡灰色。2面に使用痕が残る。厚みは8.8cmを計る。住居外の東側斜面溝中から出土。

**SK 01** 2段の土壤で上端幅76×68cm、総高28cm、2段目の上端幅43×26cm、深さ9cmを計る。

**SK 02** SK 01に隣接する土壤で内部は広がり胴張りとなる。上端幅56×80cm、深さ38.5cm、胴張部分の最大径73×126cmを計る。内部の堆積土は黒褐色上で、中途に板状の炭化材が確認された。貯蔵穴と思われる。

**SD 01** S-I-04から南へ4m離れてある。東西方向つまり斜面に直交する方向に細長く掘ってあり、確認した長さは3.8m。幅60～80cm。深さは溝の始まりから徐々に増して中間に段を設けているがその段の上端で10cm、段の下端で20cmを計る。SI-02、03付近の水を集めて、下の耕地に排水する溝であろう。,

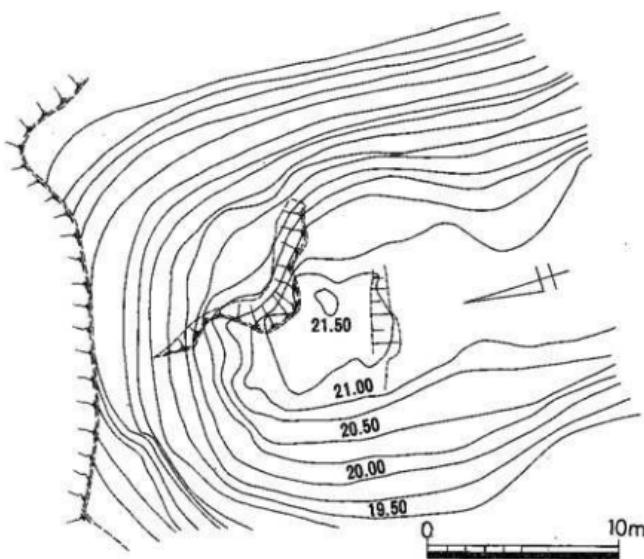


第59図 SD-01実測図

### 堤廻古墳推定地

第6区調査区の西隣りの丘陵は、北方へ突き出ており、その突端部は、やや小高くなっていた。特に南部においては、長さ約5mにわたって高さ20~30cmの低い段が認められた。こうした地形上の特徴から、この突端部には一辺約10cm前後、高さ50cm近くの方形墳があるものと思われた。

そこで、これを4分割して掘り進めたが、表土下10~20cmで黄色~明褐色の軟砂岩の地盤となり、何ら遺構、遺物は認められなかった。



第60図 堤廻古墳推定地調査前地形測量図

土器観察表(本文説明のものを除く)

土器番号	器種	法量	形態的特徴	手法的特徴	胎土	焼成	色調
1-3 出土地不 明	甕 土師器	口 径 16cm	くの字形に開く口縁部をもつ	体部内面に指頭圧痕及びヘラ削り。口縁外面上にヨコナデ。体部外面にハケ目。	1mmまでの白粒砂を少量含む 密	良 好	表 黄 裏 橙 色
1-4 第1群	甕 土師器	口 径 14.8cm	口縁外面上に段を有し器厚が厚い。	内外面ともヨコナデ	1~4mmの砂粒を少量含む 密	良 好	淡 黃 色
1-5 第2群	甕 土師器	口 径 19.4cm	口縁端部が肥厚し、外面につまみ出して横線をなす。	口縁部内外面ともヨコナデ。体部内面ヘラ削り。	密	良 好	橙 色
1-6 第1群	壺 土師器	口 径 12.2cm	体部から内彎して外上方へ開いて口縁端部にいたる。	体部内面ヘラ削り。口縁内面はヨコ方向のハケ目の後、ヨコナデ。口縁外面はタテ方向のハケ目の後、ヨコナデ。	1~3mmの白粒砂を含む。 密	良 好	淡赤橙色
1-7 荒掘	甕 土師器	口 径 17.0cm	肩部から口縁にかけてやや外反しながらのびた後、外上方に短くのび端部に至る。	口縁部内外面ともヨコナデ。体部外面上ハケ目、内面はヘラ削り。	やや密	良 好	橙 色
1-8 荒掘	甕 土師器	口 径 18.4cm	肩部から口縁部にかけわざかに外反しながらのびた後、くの字に開く。口縁部はやや肥厚する。	口縁内面から外面上にかけてヨコナデ。体部内面ヘラ削り。	密	良 好	褐 色
1-9 第1群	低脚壺 脚部	底部径 5.2cm	壺部からやや内彎しながら下った後、ハの字状に開く。脚部内面は、やや凹状になっている。	壺部内面から外面上全體にかけてナデ。脚部内面に指頭圧痕が残る。	1~2mmの砂粒を少量含む	良 好	黄橙色
1-10	壺	口 径 18.0cm	底部からやや外反しながら横上方へのび、口縁付近で上方にたちあがった後、やや内向して端部へ至る。	調整不明	1~3mmまでの白粒砂を少量含む。	良 好	橙 色

土器番号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
1-11	高台付 壺 土師器	底部径 4.4 cm	やや外反しながら下り、高台部分で内轉し底部端部に至る。	底部外面高台付着後 横ナデ。 その他不明	密	良 好	赤褐色
1-12	瓶 把手 土師器	断面径 3.5 cm	先端の丸い筒状の把手を体部外面接合する。	把手部分全体をヘラ状工具により形を整える。 把手から体部に至る部分にタテ方向のハケ目が残る。 内面はヘラ削り。	密	良 好	淡橙色
F 5 区							
1-13	甌 土師器	口 径 26.6cm	やや外反しながらなめ上方にのび、体部中央付近から上方に向にたちあがり、口縁部にてわずかに外方へとそる。	体部外面タテ方向のハケ目。口縁部外面ハケ目後、ナデ。口縁部内面ヨコ方向のハケ目。内面口縁以下はたて方向(下→上)のヘラ削り。	1~2mmの砂粒をやや多く含む。 密	良 好	淡黄色
1-14	スクレ イバー 状 黒瑪瑙	全 長 5.3 cm 幅 4.1 cm	一部に刃部が認められる。				
出土地 不 明	壺 蓋 須恵器	口 径 13 cm 残存高 3.5 cm	口縁部はほぼ垂直に下り、端部は凹面をなす。	天井部外面回転ヘラ削り。 その他は一定方向のナデ。 ロクロ回転時計回り。	1~2mmの白粒砂を多く含む。	良好にして堅微	外面 濃青灰色 内面 青灰色 断面 セピア色
1-16	壺 身 須恵器	残存高 3.5 cm	受部は横方向にのび、端部は鈍い。	外面底部回転ヘラ削り。 内面底部横ナデ後、指おさえ。 その他横ナデ。	白粒砂を多く含む。	軟質な 焼き	白灰色
荒堀中							
1-17	甌 ? 須恵器	胴部最大径 10.2 cm	胴部は倒卵形を呈す。	胴部外面に7条以上の波状又、内外面とも横ナデ。	1~2mmの白色砂粒を含む。	良 好	内外面 黒灰色 断面 セピア色
出土地 不 明							
1-19	甌 土師器	口 径 14.8cm	球状の胴部に退化した二重口縁を有す。	胴部外面ハケ目、内面ヨコヘラ削り。 その他ヨコナデ。	密	良 好	乳白色
SP-01							

土番 器 器 号	器 種	法 量	形態の特徴	手法の特徴	胎 土	焼 成	色 調
1-20	土 瓢	長さ 3.7 cm 径 2.5~ 2.3 cm	口径 0.6 cm の穿孔を 有す。	外面をヘラ状工具で 成型	密	良 好	黄白色
SP-01	土師質						
1-12	壺又は 甕底部	残存高 6.8 cm	底部丸底。	外面にハケ目痕跡。 内面指ナデ及び指頭 圧痕。	やや粗	良 好	外面 暗褐色 内面 褐色
SP-01							
2-81	壺	口径 22 cm	頸部はやや逆「コ」 の字形に屈曲して複 合口縁部に至る。 口縁部は鈍い稜をな し外反してのびる。 口縁端部はやや丸い。 口縁部内面に明瞭な 段をもっている。	不 明	0.5~1.5 mmまでの白 色砂粒を少 量含む。	良 好	黄橙色
SI-08	覆 土						
2-82	低脚壺	口径 9.6 cm 器 高 6.6 cm	楕形の壺部に、外反 して外下方へとのび る脚部をつける。	壺部底部ナデ。 脚部内面ナデ。 その他不明。 全体に赤色顔料付着。	密	良 好	淡橙色
SI-06	pit 内						
2-83	高 脚 壺 部	—	ほぼまっすぐ下方へ 下った後、裾部にて 大きく外方へ開く。	外面不明。 内面しぼり痕を残す 他は不明。	密	良 好	褐色
6-59	甕	14.0 cm	くの字状口縁を有す。	口縁部内外面ヨコナ デ。 体部外面ハケ目、内 面ヘラ削り。	やや密	良 好	褐色
SI-04	覆 土						
6-60	甕	不 明	複合口縁の退化した もの。	口縁部内外面ともヨ コナデ。 体部内面ヘラ削り。	密	良 好	橙 色
SI-04	覆 土						
6-61	甕	不 明	くの字口縁を有し、 器厚はうすい。	口縁部内外面ヨコナ デ。 体部内面ヘラ削り。 外面不明。	密	良 好	外面 淡橙色 内面 黒褐色
SI-04	覆 土						

上番 器号	器種	法量	形態の特徴	手法の特徴	胎土	焼成	色調
6-62 6区表掘	高脚 坯部	—	やや内傾しながら下る。	不明	やや密	良好	黄橙色
SI-04 覆土	高 坯	—	坯部は直線的に下り、脚部でやすぼまつた後、広がりながら下る。	坯部内外面ナデ。脚部外面へラ削り。内面ナデ。	やや密	やや良	橙色
SI-04 覆土	高 坯	接合部 径 12.2cm	外面の段は退化し、棱線を残すにとどまる。	不明	やや密	良好	黄橙色
6-66 高脚 坯部	高脚 坯部	底部径 16.6cm	裾部で大きく外方へと開く。	不明	密	良好	橙色
SI-01 覆土	坯	口 径 11.8cm 器 高 5.3cm	碗形を呈する。	外面ハケ目。 内面不明。	密	良好	橙色
D-3区 斜面最下部	坏 身	不 明	坏部は残く、受部のたちあがりは内傾し、短い。	底部外面凹転へラ削り。 内面ナデ。 その他は回転ナデ。	密	良好	黑青灰色

## IV 出土遺物の検討

### 1. 土師器について

#### (1) はじめに

堤遺跡では21棟の堅穴式住居と2棟の掘立柱建物を検出しているが、各住居跡からの出土遺物は、全体量に比べてわずかであった。出土した土器の大半が破片であり、又、風化の為に剥離が激しく、調整不明のものが多かったので、良好な資料とは言い難い。従って実測可能なものも少なく、全体量の19%程度であった。その中で、各器種を形態の特徴などから細分を行い、説明をする事にした。

なお、記述が不十分なものは器面の残存状態が不良で観察が十分に出来なかったものである。又、本遺跡出土土器の編年的位置についてであるが、県内において住居跡の調査例は数少なく、その中で、本遺跡と同時期頃の土器も比較的出土例が少ないものである為、貴重な資料になりうると思われる。

本遺跡出土の古式土師器が現在島根県内において提示されている上器編年の中で、どのような位置を占めているのか、第2、第3調査区出土の土器を住居跡の切り合い関係などから、編年序列を行い若干の検討を試みたいと思う。

#### (2) 器種構成

器形では、壺形土器、壺形土器、高杯、小型丸底壺、低脚壺、鼓形器台、手づくね土器、瓶などがあるが、総点数約1,500個体中、壺形土器が53%、高杯が36%であり、壺形土器と高杯で大半を占めている。

##### (壺形土器)

複合口縁土器が22.5%、単純口縁土器が77.5%を占めている。複合口縁土器をA、単純口縁土器をBとして分類し、またそれぞれ細分した。

◆壺A 1 口縁部は外傾してのび、口縁端部は平坦面をもつ。また、内面に肥厚したものがある。屈曲部の稜は小さく鈍くなっている。口縁内外面は横ナデされ、体部内面は鎔削りが施されている。

◆壺A 2 口縁部は直立してのび、口縁端部は外面に肥厚してやや内傾する平坦面をもつ。屈曲部の稜は頭部と口縁端部の中間に位置し、断面厚く鈍いものになっている。口縁内外面は横ナデされ、体部外面ハケ目、内面鎔削りが施される。

◆壺A 3 口縁部は坂くなり外傾するものと、直立ぎみにのびるものがある。口縁端部は平

坦面をもつものと、丸味をおびるものがあり、屈曲部の稜は鈍く、段に近い形態になる。

口縁内外面は横ナデされ、頸部内面にハケ目及び指頭圧痕がある。

◆壺A 4 壺A 2 がさらに退化したような形態であり、口縁部は鈍く外傾してのび、口縁端部は丸い。屈曲部の稜は鈍く、稜と口縁部の境に溝状の凹線がめぐっている。口縁内外面は横ナデされ、体部外面ハケ目、内面箇削りが施されている。

◆壺B 1 口縁部は頸部から「く」の字状に外傾した後、内彎きみにのびる。端部は内面に肥厚するものがある。口縁内外面横ナデ、体部内面箇削りが施される。

◆壺B 2 口縁部は外傾してのび、端部は丸い。

◆壺B 3 口縁部は外反してのび、肩部は長胴形をなすものである。

#### (壺形土器)

壺形土器と明瞭に判断出来るものは少ないが、4タイプに区分出来る。

壺A 口縁部は外傾してのび、口縁端部は平坦面をもつものと、内面に肥厚したものがある。屈曲部の稜はやや鈍くなっている。口縁内外面は横ナデされ、体部内面は箇削りが施されている。

壺B 口縁部はやや短く、内傾ぎみにのびるものと、直立ぎみにのびるものがあり、口縁端部は外側に肥厚して半坦面をもつ。屈曲部の稜はやや鈍く厚めになっている。

壺C 口縁部は長く外傾ぎみにのびる。口縁端部はやや肥厚している。

壺D 口縁部は外反してのび、口縁端部近くでさらに外反する。端部は平坦面をもつものと、丸くなっているものがある。

#### (高坏形土器)

壺形土器に次いで出土数が多いが、完形品はなく、坏部のみや脚部のみ残存しているものが多いので、坏部の形態によって類別した。坏部に稜をもつものをA、稜のかわりに段をなすものをB、稜のないものをCとし、さらにAとCは細分した。

高坏A 1 坏底部と口縁部の境に下向きのタガ状の稜を付するものである。口縁部は内彎ぎみにのび、端部は丸味をおびている。

高坏A 2 坏底部と口縁部の境に横方向に突出する。やや鈍い稜をもつものである。口縁部は稜から外上方にまっすぐのびるもので端部は丸い。

高坏B 坏底部と口縁部の境の稜が段をなすものであり、口縁部は底部との境から外傾してのびるもので端部は丸い。

高坏C 1 坏部は楕形をなすものであり、口縁部は内側してのび、端部は丸い。（内面のヘラ磨きが暗文状をなすものがある）

**高坏C 2** 口縁部は内彎してのびた後、外反して端部に至るものである。

(低脚坏)

50個体出土しているが、住居跡関係で実測できたものは20個体であり、脚部のみのもの  
が多かった。2種に区分できる。

**低脚坏A** 坏部は浅く口縁部も大きく広がる。脚部は低く径も小さい。

**低脚坏B** 坏部はやや深くなり、口縁部はあまり広がらない。脚部はやや高くなり、径  
も口縁部と同じくらいに大きくなる。

(小型丸底臺)

第3、4、5調査区から出土している。体部は球形をなし、口縁部は小さく外反してた  
ちあがり体部の高さと同じ程度のびている。口径は体部最大径よりも広がるものと、それ  
より小さいものがある。

(鼓形器台)

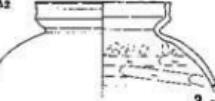
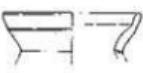
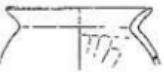
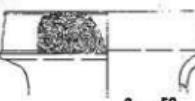
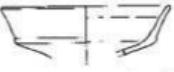
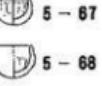
第2調査区から大半が出土している。口縁部を欠くものと脚部を欠くものがあり完形品  
は無かった。口縁部、脚部とも大きく外反しながら開き、筒部は縮少している。脚部内面  
に横方向のヘラ削りが施され、外面はヨコナデされている。

(手捏土器)

大半が第5調査区のものである。すべて指オサエによって成形されており、器壁も厚く  
大きいものと小さいものがある。

以上のように各器種を形態によって細分し概要を述べたが、この中で特徴的なことは、  
壺形土器に次いで高坏の占める割合が高いことである。また高坏の中でも赤色顔料付着の  
ものが比較的多く出土している事が注目される。

第1表 器種構成表

壺A <sub>1</sub>		2 - 33	壺A <sub>2</sub>		3 - 6
壺A <sub>3</sub>		3 - 7	壺A <sub>4</sub>		5 - 8
壺B <sub>1</sub>		2 - 37	壺B <sub>2</sub>		3 - 9
壺B <sub>3</sub>		6 - 33			
壺A		2 - 53	壺B		2 - 58
壺C		3 - 5			
壺D		5 - 3	高环A <sub>1</sub>		3 - 26
			高环A <sub>2</sub>		2 - 63
高环B		3 - 13	高环C <sub>1</sub>		3 - 26
			高环C <sub>2</sub>		2 - 3
低脚环A		2 - 44	低脚环B		2 - 11
			手捏土器		5 - 67
鼓形器台		2 - 48	小型九底壺		5 - 61
					5 - 68

0 10cm

### (3) 堤廻遺跡出土土師器の編年的位置について

鳥根県内において、山本清氏の鍵尾土壙墓群の調査以来、数々の古式土師器研究が進み弥生終末期の土器から古式須恵器が出現するまでの土師器について、九重式→鍵尾Ⅰ式（的場式）→鍵尾Ⅱ式→小谷式→大東式という編年がなされている。<sup>注1</sup>これらの編年も細かく見れば不明瞭な点も多く、それ故、藤田憲司氏による鍵尾式の再検討や、赤沢秀則氏や房宗寿雄氏らの編年案など、従来の編年を整理しなおそうとする試みもなされている。しかししながら、これらの試みは弥生終末期から小谷式までのものであり、須恵器出現直前頃のものについては、現段階では整理がなされておらず、鳥取県の青木遺跡などの編年案にたよるしかない。県内において須恵器出現前後の時期にあたるのが、従来大東式と呼ばれているものであり、<sup>注2</sup>堤廻遺跡出土の土器もこの時期にあたる。しかし、この大東式においては確証がない為に本遺跡の土器を検討するにあたって堤廻遺跡内の編年を試みることにした。住居跡内からの遺物出土状況を見ると、土師器のみを出土するものと須恵器を共伴するものがあることから須恵器の有無に着目して須恵器出現以前の時期と須恵器出現後ものに分けることができる。また、さらに細かく見ると、須恵器出現以前の土師器もその形態の特徴から2時期に細分でき、1つはS I - 0 8、2 1に見られる複合口縁のしっかりしたものと、もう1つはS I - 1 1、1 2などの複合口縁の退化したものである。このような特徴から、堤廻遺跡出土の土師器をⅢ期区分してその内容を述べてみたい。

#### (堤廻Ⅰ期)

S I - 0 8、2 1出土の土器を標式とするもので、須恵器は見られず複合口縁がしっかりとしている時期である。壺は複合口縁のものA 1と少數であるが単純口縁のB 1があり、口縁部は外傾してのび、口縁端部は巻内布留式の影響を受けたものが現れ、端部が肥厚して内に折り込むものが見られる。単純口縁のものも口縁部の形態が異なる以外は、複合口縁のものとあまり差異は認められない。器壁も比較的薄く仕上げられている。壺形土器はA、Bがあり、Aは口縁部が外反しており、Bは内傾ぎみにのびている。高坏は、坏部に稜をもつA 1、A 2がある。A 1については出土位置が不明瞭であるが、青木遺跡のH S X 1 0から出土している高坏に類似していることから、この時期と考えられる。低脚坏はAがあり、坏部が浅く口縁部は大きく広がっているのが特徴である。鼓形器台は筒部が短縮して上台、脚台共に大きく広がっている。このような特徴をもつ土器は、出雲市の山持川岸遺跡や、飯石郡三刀屋町の松本1号墳などから出土しており、従来の編年で言うところの小谷式に含まれるものである。<sup>注3</sup><sup>注4</sup><sup>注5</sup><sup>注6</sup><sup>注7</sup><sup>注8</sup>

#### (堤廻Ⅱ期)

S I - 11、12 出土の土器を標式とするもので、複合口縁が I 期のものに比べて純く退化しており、須恵器はまだ見られず複合口縁の終末形態を示しているものである。壺は複合口縁の A 2、A 3、A 4 と単純口縁の B 1 と B 2 がある。A 2、A 3 ともに口縁部が短くなってしまい、胴部は次ぐが口径に対して胸径は大きくなるものと思われる。A 4 は A 2 がさらに退化したような形態をもち、複合口縁と単純口縁の折衷的な様相を呈している。また I 期のものが、まだ薄手のものが多かったのに対し、この時期になると厚くなっている。壺は C が見られる。高坏は坏部の稜が退化して段をなす B と楕形の坏部をもつ C 1 がある。鼓形器台は、I 期のものよりさらに筒部が縮まっている。これらの特徴をもつ土器は八束郡宍道町の矢頭遺跡や松江市東津田町の勝負遺跡などからも出土している。  
注9  
注10

#### (後期Ⅲ期)

S I 06、13 出土の土器を標式とするもので、須恵器を共伴している。壺は複合口縁が完全に消え、B 2 に代表される単純口縁のものだけになり B 3 のような肩もあまりはらず長胴形になるものがある。壺は D がある。高坏は C 1、C 2 の稜をもたないものが多くなっており、脚部は丁寧な調整がなされず断面は厚い。低脚坏は B があり I 期のものに比べて坏部が小さくなり脚部もやや高く径も大きくなっている。鼓形器台は見られなくなり楕形土器が多くなっている。

このような編年を試みたが、土器の形式変化は連続的で時間的にも短期間と考えられ、II 期では前段階の要素を受け継いでいるものの III 期では須恵器の出現に伴い、I 期の要素は見られなくなる。すなわち複合口縁の盛行-退化-消失という変遷過程がうかがえる。I 期は從米の編年の小谷式に属するものであり S I - 07、08、21 がこれに相当する。II 期は須恵器出現以前の時期であり、從米の編年に当るとすれば、大東式の範疇に含まれるものである。しかし、大東式の頃にはすでに古式の須恵器が出現しているとの見解注11もあり、III 期のものと同時期のものとして取り扱ってもさしつかえないかも知れないが本遺跡では須恵器を共伴している事以外に複合口縁土器がなくなり単純口縁のものだけになっている事に着目して II 期と III 期に区分した。須恵器出現に伴なって複合口縁が姿を消し単純口縁のものだけになると断定する事は出来ないが、鳥取県米子市青木遺跡の報告を見ると、古式の須恵器と共に土師器には複合口縁は見られず単純口縁のものだけになっており、本遺跡においても同様な事がうかがえる。この事から一応須恵器出現期には複合口縁土器はなくなり単純口縁のものだけになるものとしたい。また横田町渋谷遺跡の A 3 号住居跡出土の土器を見ると、単純口縁のものだけであるが、須恵器が共伴しておらず提廻の II 期と III 期の中間に位置するものであろうか。しかし鳥取県大栄町の上種遺跡や倉吉

注12  
注13  
注14

注 15

市の服部遺跡では複合口縁土器と須恵器が共伴しているという事実（？）もあるので一概にそうとも言えないかも知れないが、この事は時代性や地域性、製作者・使用者の性格なども考慮しながら取り組んでいかなければならない問題であろう。

#### (4) ま と め

以上、堤廻遺跡出土土器を器種構成と編年的位置に分けて述べてみたが、それぞれ数多くの問題点を残していることは言うまでもなく、その中で赤色顔料付着土師器、とくに高坏が多く出土していることの意味と編年案の問題点について簡単にふれてまとめとしたい。高坏は供献用土器と言われており、それに赤色顔料を施すことは祭器として使用されたものであろうか。これらの赤色顔料付着土器が古墳から出土する事も多いので祭祀用の土器<sup>注16</sup>と考えられているが、この時期の住居跡から出土することも一般的になっている。従って古墳から出土する例があるとはいえ、すべてのものを祭祀用としてかたづける事は出来ないであろう。祭祀に関するものでないとすれば防水等の土師器のもつ欠陥を補う技術であったとも考えられるが、明らかではない。しかし赤色顔料付着土器の他に祭祀と関係の深い手捏土器が出土している事から見ると、何らかの祭祀に使用されたものと考える方が妥当であるかもしれない。手捏土器については、非実用品として日常から切り離された行為、<sup>注17</sup>すべてに用いられた祭祀具であるとされ、一般に手捏土器が出土すると祭祀遺跡と言われている。島根県内における手捏土器の出土例は第4表のとおりである。この内、落子遺跡<sup>注18</sup>は「むすび山」又は「向歯無山」兵庫遺跡は「愛宕山」を神奈備的な山として信仰の対象としたのではないかと考えられている。才ノ峰遺跡は、その名の示すとおり蛇信仰に関係<sup>注19</sup>があるかも知れない。本遺跡の場合は東方に嵩山（風土記にいう「布自积見嵩山」<sup>注20</sup>）で峰の施設があった。）が見え、あるいはこの山を信仰の対象としていたのかも知れない。しかしながら手捏土器についてはS 1-20付近から多く出土しているが、赤色顔料付着土器は各住居跡から出土しており、この事から一部に集中して行われたものではなく、個別住居の祭祀というものが推測できるのではないだろうか。これらの事は、S 1-16の床面上で発見された勾玉と同様、今後生活の中での祭祀形態の検討が必要であろう。

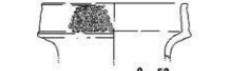
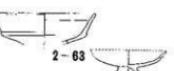
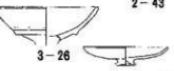
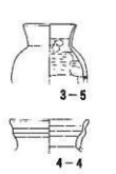
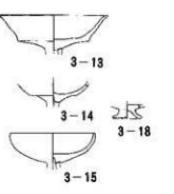
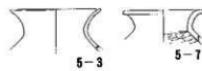
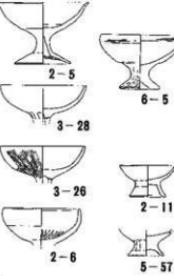
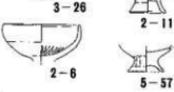
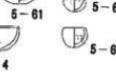
次に堤廻遺跡出土土師器の編年案についてであるが、編年をするにあたり資料として使用した土器が少なく堤廻Ⅰ期～Ⅲ期の土器を詳細に観察・検討することができなかった。Ⅱ期のものについては須恵器出現直前頃のものとして複合口縁の退化しているものを括しているが、壺形土器を詳細に観察してみると、A 4はA 2がさらに退化したような様相を示しており、A 4とA 2の間には多少の時期差が認められるのではないかと思われる。この事からⅡ期はもう一段階細分できるかも知れないが、現時点では細分までに至らなか

った。Ⅲ期については、須恵器を中心に細分を試みることができると思われるが、住居跡床面上から出土したものがほとんど無く、良好な資料がない為に、須恵器自体の編年は可能であったとしても住居跡の時期的序列を考える上では不適当と思われる。従ってⅢ期を細分することは出来なかった。県内における住居跡での須恵器出現前後の土器様相が不明瞭な現段階において、本遺跡出土の土器群が貴重な資料の一つになる事は確かであろう。また、今後住居跡の調査例やこの時期の良好な資料が増加して研究が進むことを期待するものである。

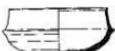
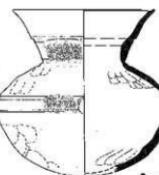
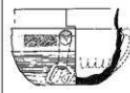
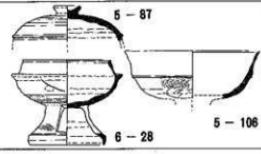
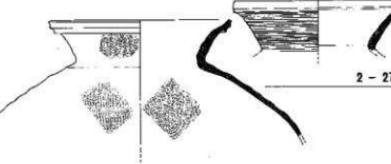
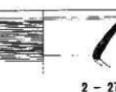
- 注1 山本清「山陰の土師器」『山陰古墳文化の研究』1971年  
内田才、東森市良、近藤正「島根県安来平野における土壤墓」上代文化36 1966年
- 注2 前島己基、松本岩雄「結語」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書II」島根県教育委員会 1977年  
前島己基、松本岩雄「島根県神原神社古墳出土の土器—土器型式にみるその編年の位置について—」『考古学雑誌』第62巻第3号 昭和51年
- 注3 藤田憲司「山陰『鍵尾式』の再検討とその併行関係」『考古学雑誌』64-4 1979年
- 注4 赤沢秀則「出雲地方古墳出現前後の土器編年試案」『松江考古』第6号 松江考古学談話会 1985年  
房宗寿雄「山陰地域における古墳形成期の様相」『島根考古学会誌』1号
- 注5 青木達跡発掘調査用「青木達跡発掘調査報告書III」1978年
- 注6 注5と同じ
- 注7 川上稔、赤沢秀則「出雲山持川川岸遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書』1981年
- 注8 島根県教育委員会「松本古墳発掘調査報告」1963年
- 注9 宍道町教育委員会「清水谷遺跡・矢頭遺跡発掘調査報告書」1985年
- 注10 島根県教育委員会「勝負遺跡」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV」昭和58年
- 注11 注2と同じ
- 注12 注5と同じ
- 注13 横田町教育委員会「沢田宅裏遺跡・鎌免大池遺跡・渋谷遺跡調査報告」1982年
- 注14 鳥取県東伯郡大栄町教育委員会「上種第6遺跡発掘調査報告」1985年3月
- 注15 倉吉市教育委員会「倉吉市原部遺跡発掘調査報告・遺物編」1974年
- 注16 市毛勲『朱の考古学』昭和50年
- 注17 注16と同じ
- 注18 小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器」『考古学研究』18-2・3 考古学研究会 昭和46年
- 注19 寺沢知子「祭祀の変化と民衆」『季刊考古学』第16号 1986年8月
- 注20 前島己基「石見における祭祀遺跡の新例」『季刊文化財』第23号 島根県文化財愛護協会 昭和49年3月
- 注21 勝部昭・西尾克己「隱岐島における祭祀遺跡の発掘調査」『季刊文化財』第31号  
勝部昭「隱岐島の祭祀遺跡」「松江考古 第2号」松江考古学談話会 1979年
- 注22 島根県教育委員会「才ノ岬遺跡」「国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV」昭和58年3月



第2表 堤遺遺跡出土土器編年表

時期 器形	壺	盞	高坏・低脚坏	器台	須恵器 その他
堤 期 I	 	 	 	 	
堤 期 II	  				
堤 期 III	  	 	  	   	

第3表 堤廻遺跡出土須惠器編年表

	蓋 環	高 環	盤	蓋・盤類	碗
A 期			 3-54	 6-1	 5-98
B 期	 2-24	 2-25	 5-87 6-28	 5-106	 2-27
C 期	 5-96			 5-109	
D 期	 6-11				
E 期	 6-88				

第4表 手捏土器出土遺跡一覧

## 住居址出土例

番号	遺跡名	所 在 地	出 土 遺 墓	器種と数量	伴 出 遺 物	年 代	文献
1	才ノ崎遺跡	松江市竹久町110ほか	集落・祭祀、Ⅲ区第1～第6墓	壇72 高163	土器5、土器2、土玉、土鍬、鉛2	古墳時代末～奈良時代後半	①
2	原ノ後遺跡	松江市新庄村原	集落・集石遺跡中	壇3	須恵器、宝珠つまみの器、土師器、土器	奈良？	②
3	吉沢A遺跡	松江市大井町1118	谷間斜面に古墳時代後期の集落跡	壇10	須恵器 土師器等	6C後半～7	
4	堀畠遺跡	松江市西川津町	斜面上の集落跡		須恵器 土師器	5C後半	木古
5	能義遺跡第1区	安来市能義町能義	弥生～古墳の重複する住居跡	不明1	弥生土器、土師器、須恵器、石器		③
6	〃 第2区 同上		一辺3.4～3.7m方形プランの住居跡	不明1	土師器、砾石	古墳	③
7	前立山遺跡S113	鹿児島六日市町人字住連川	集落・斎穴住居	高環1 輪1	土師器	古墳前期	④
8	〃 S114 同上		同上	輪1	土器、石臼、砾石	弥生後期～古墳前期	④
9	〃 S117 同上		同上	輪2	銅鏡模様 土師器、勾玉、施	古墳前期	④
10	〃 S123 同上		同上	輪1	弥生土器	弥生後期	④

## 祭祀遺跡

11	(おとし)子遺跡	邑智郡石見町矢上後原	地下30～40cm 黒色土中 (2×2m)	壇50	高环2、环4、壇1 (以土器)土器瓦玉2、青白釉瓦片2枚	6世紀代	⑤
12	(やがさこ)你ヶ遺跡	邑智郡石見町矢上4491	丘陵先端部 水道祭祀？	? 25	土器器 (壇3、环4)		⑥
13	(いーじ)兵庫遺跡	邑智郡西ノ島町大字美田217	然把遺跡	环、高环20 以上	土器器九九器、上製 小器 (4×7.5mm)	5C後半～6	⑦

## その他の

14	友田遺跡	松江市浜乃木町宇田山2791-2792-1	弥生貼石方形壙	北 壙2、環1 高环1	弥生後期2 余生環1	不明	⑧
15	上ノ台遺跡	能義郡伯太町赤尾		高环2 環1	6C後半の土師器 壺、壺	古墳後期？	⑨
16	春日シムンダニ遺跡	八束郡東出雲町出雲郷	標高60mの須恵器 及び行燈前から出土	不明2	山陰中期の須恵器 土器片、カマド片	古墳後期	
17	出雲王工作跡 片ノ上地区	八束郡長湯町大字五造508ほか	丘陵緩斜面	不明數点	有孔円板3、碧玉製 切妻屋根型石製品	古墳	
18	タチヨウ遺跡	松江市西川津町鶴本	低地の包念壙	不明3	須恵器、土師器 木製品他	古墳	⑩
19	上組遺跡	出雲市下古志町	集落？	不明1			⑪
20	大東高校 グラウンド遺跡	大原郡大東町人町	玉作跡？	不明數点	有孔円板3	弥生後期～ 古墳中期	⑫
21	伊神社縁遺跡	浜田市下治町		壇3	土師器 (高环、壺、 壺他)	古墳中期～ 後期	⑬
22	竹田遺跡	邑智郡海士町竹田	丘陵頂部から斜面	不詳數点	銅剣 (中軸) 1 弥生土器	弥生後期	⑭
23	川角遺跡	安来市鰯谷町川角		輪2	須恵器 (壺) 土師器 (壺)	古墳後期	⑮
24	風呂ヶ谷遺跡	邑智郡石見町大字中野 字小原		壇2	土師器 (高环、壺)	古墳中期	⑯

#### 第4表の参考文献

- ① 「才ノ崎遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書IV』島根県教育委員会 昭和58年3月
- ② 内田律雄「原ノ後遺跡出土の小形手標土器」『松江考古第4号』1981年9月
- ③ 内田才「原始・古代」『安来市誌』安来市 1970年
- ④ 勝部昭、内田律雄「前立山遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1980年
- ⑤ 前島己基「石見における祭祀遺跡の新例」『季刊文化財第23号』島根県文化財愛護協会 昭和49年3月
- ⑥ 吉川正「石見、弥ヶ迫遺跡」『島根県埋蔵文化財調査報告書第7号集』島根県教育委員会 1981年
- ⑦ 勝部昭、西尾克己「隱岐島における祭祀遺跡の発掘調査」『季刊文化財 31号』島根県文化財愛護協会 1977年  
前島己基「日本の古代遺跡20島根」
- ⑧ 松江市教育委員会『松江匯都市計画事業乃木地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983年3月
- ⑨ 東森市良「古代から中世へ」『伯太町史』伯太町役場 1962年
- ⑩ 島根県教育委員会『朝鷹川河川改修工事に伴うタテチヨウ遺跡発掘調査報告書I』1979年
- ⑪ 松江考古学談話会「山陰地方における古墳時代の祭祀遺跡一覧」『松江考古』第2号 1979年
- ⑫ 東森市良「大東高校グランド遺跡」『日本考古学年報』26 1975年
- ⑬ 勝部昭、石井悠「石見国府跡確定地調査報告II」島根県教育委員会 1979年
- ⑭ 前島己基「竹田遺跡」『島根県大百科事典』1982年
- ⑮ 近藤正「山陰」「神道考古学講座」第2巻 1972年
- ⑯ 門脇俊彦、吉川正「遺跡と遺物」『石見町史』上巻 石見町 1972年

## 2. 出土須恵器の検討

### (1) はじめに

須恵器研究は古墳から出土した須恵器に着目しその編年を確立することから開始された。その後、その編年的研究は長い間続けられてきたが、大阪府の陶邑古窯跡群の総合的調査<sup>[1]</sup>を契機として、窯跡出土の須恵器をその対象とするようになり、全国的に窯跡出土の須恵器による編年が確立されるようになった<sup>[2]</sup>。さらに加えて最近、住居跡内からも須恵器が検出されるようになり今日の須恵器研究に新たな問題を提起している。今後は、窯跡・住居跡・古墳から出土した須恵器を総合的に検討し、編年や需給関係などの研究がなされる必要があろう。

島根県内の須恵器の研究史をみても、長い間古墳出土の須恵器を中心とした編年研究がなされてきた。<sup>[3]</sup>最近になって、県内ではじめて窯跡が調査され、須恵器研究に新しい問題を投げかけていると言えよう。

以下、21棟程の住居跡が集まった集落遺跡である堤廻遺跡から出土した須恵器について、若干検討したい。

### (2) 出土須恵器の出土状態と器種について

堤廻遺跡から出土した須恵器は破片で590片程になるが、土師器と比べると須恵器の出七量は非常に少なく、約5%を占めるにすぎない。このうち、器種が分かるものが約580片になるが、実測できたのは66個体にすぎず、大半は細片状態であった。また、住居跡内出土の破片は約200片であり、実測できたのは27個体にすぎない。

さてこれらの出土状態を見ると、6-28の有蓋高杯は4号住居跡内と住居跡外の西側斜面から各々出土した破片で接合している。このように本遺跡出土の須恵器で、住居跡の床面上から出土したものは皆無であり、また、同一レベルから時期が異なるものや土師器などと混在したような出土状況であった。このことは、6号住居の出土状態を見てもうなづける。このことより、本遺跡の住居跡内から出土した須恵器は、その住居の時期を示すものとは断定し難く、その住居が使用されなくなつてから須恵器が廃棄若しくは投棄されたと言える。

上のような出土状態であることより、器種構成についての検討はひかえ、須恵器の個体的特徴を中心にして以下述べてゆきたい。また、上のことについては確実な調査例の増加を待ちたいと思う。

さて、実測できた須恵器の概要を述べる。

#### (ア) 蓋 坯

37個体実測できたが、このうち坏蓋は13個体、坏身は24個体であった。

坏蓋は、直立する口縁部になだらかなカーブの天井部を持ち、その外面には回転ヘラ削りを有する。稜は口縁から2.0～2.5cm程の高さにあり、その端部は鋭く突出している。口縁端部は丸味をもち、内側に段を有したり、のみの刃状になっている。調整は回転ナデによっているが、個体によっては天井部内面に静止ナデを施しているものや、天井部外面にヘラ削りではなくカキ目を施しているものも認められる。器肉は全体的に厚い。

より詳しく見ていくと、天井部がやや平坦なもの口縁部は直立する傾向にあり（4-22、4-23）、山なりの天井部のものはそれはやや外反する傾向がある（2-24、5-84、6-2、6-8）。また、口縁部がやや外反気味になるものがある（1-15、5-84、6-2）。5-86の稜は他に比べてより横上方向に突出している傾向がある。

坏身は、深い底部の外面にヘラ削りを有する坏部に、かなり高い立ち上りを有する。立ち上り部は内傾しながら立ち上り中程より直立気味になり、端部は丸味を持つ。端部の形態はバラエティーに富み、無段で丸くなっているもの（2-74、6-10、6-11、6-68）、平坦になっているもの（3-31）、有段なものとに分れるが、有段なものはさらに内側が凹状になっているもの（2-25、5-88、5-89、5-91、5-92、5-111）、のみの刃の様にV状になっているもの（5-95、5-98）とに分けられる。また受け端部も丸味がありかなり厚いが、突山方向が上、横に分けられる。横方向に突出しているのは、5-88、5-91、5-96で上方向に突出しているものに比べたら受け部が短い傾向が認められる。

#### (イ) 高 坏

8個体実測できたが、明確に無蓋高坏か有蓋高坏かが分かるものは4個体しかなく、無蓋が2個体、有蓋が2個体となる。また蓋が1個体ある。

無蓋高坏は、緩やかに外反する口縁部と深い坏部に三方透しを有する低脚を持つ。坏部中央に突起を有し、その下に波状文を施す。脚と坏部の接合部にはヘラ削りが認められ（5-106は手持ちによるもの）、口縁端部は段を有し、丸味を持つ。脚部にはカキ目を施し、方形透しを三方に穿っている。

有蓋高坏は、やはり深い坏部に低脚を接合したものであるが、口縁端部は外反する段を有し、丸味を持つ。接合部にはヘラ削りを施している。脚には方形透しを三方に穿っている。脚端部は丸味を帯び外側に退化した稜をもつ。

蓋は、蓋坏の蓋につまみを付けた形態で、天井部にヘラ削りが認められる。稜はシャープである。

脚端部にはヘラ削りが施され、稜が認められないもの（2-28）があるが、退化して丸

味をもつ核をもつ脚が多い。

#### (ウ) 越

小形感が5個体、大形感が1個体出土している。玉葱状若しくは球状の体部に外反する頸部をもつ。小形感の口頸部は不明だが、大形感のそれは直線的に外反しながら立ち上り口縁部に至るもので、端部は段を有し、丸く仕上げられている(6-01)。1片程小形感の口縁部があるが、強く外反しており、頸部から口縁部に至る平坦部があまり認められない。外側の稜も退化している。体部は、底部にヘラ削りを有し、中央に凹線文と波状文や刺突文を施す。5-103のように肩部と胴部にカキ目を施すものもある。

#### (エ) 壺・壺類

10個体実測できたが、全体形が分かるものは1個体もなく、肩部より上の破片しかない。また直口壺と思われる口縁部が2個体程ある。この口縁部は直線的に立ち上り、端部はシヤープ感をもつ。口縁下方に上・下二条の凹線文を施し、その間に波状文を施す(5-102)。8個体は、口縁端部が丸く仕上げられており、口縁下端に二条の稜を有し、頸部には波状文やカキ口を施す。

#### (オ) その他

その他の器種には、碗が2個体、把手が1個体、不明が1個体(T字形、3-56)ある。碗には、把手付大形碗が1個体、小型碗が1個体ある。把手付碗は底部がヘラ削りにより平坦に仕上げられ、体部にはカキ目と波状文を施し、直立の口縁部をもつ。口縁端部は丸く仕上げられている。体部と口縁部の境は稜をなし、蓋環の受け部のようになっている(5-99)。小形碗は、底部がヘラ削りにより平坦になっており、緩やかに外反しながら立ち上り、口縁部に至る。口縁部のところで一条の稜をもち、口縁部も緩やかに外反し、端部は丸く仕上げられている。底部にはヘラ削りが、体部には波状文が、施されている(5-101)。

以上、各器種についての概要を列挙した。

#### (3) 出土須恵器の編年について

(2)で出土須恵器の出土状態と器種について述べた。次にこれらの時期について述べるが、須恵器の中で時期的変遷を最も捉えやすい蓋環を最初に分類し、その後に他の器種について触れたい。また、蓋環でセット関係になると思われるのは2-24(蓋)と2-25(身)のみである。よって、ここではより特徴が捉え易い坏身で分類することにする。

#### A 類

深い坏部に直立気味に立ち上る立ち上りをもつ。口縁端部は二段になっている。立ち上りは約2.3cmの高さを有する。受け部は0.4cm程横方向に突出し、申し訳なさそうについ

ている感を与える。底部の大半にロクロ回転が左回り方向の弱いヘラ削りが施され、その後に再度調整されているようである。口縁端部も受け端部も丸く仕上げられている。軟質の焼きで白灰色を呈する（5-91）。

#### B 類

坏蓋は、山なりの天井から緩やかにカーブを描きながら口縁部におり、口縁部はやや斜めになっているものである。口縁端部は二段で丸く仕上げられているが、稜は鋭く仕上げられ、口縁から2cmの高さにある。ロクロ回転が右回り方向のヘラ削りが天井部大半に施されている。焼成は良好で青灰色を呈する（2-24）。

坏身は、深い底部に中程より直立気味に立ち上る立ち上りをもち、口縁端部は段をなしている。立ち上りは1.6～1.8cmの高さを有する。受け部は斜上方に突出し、突出巾が0.6cm程ある。底部の $\frac{1}{2}$ 程にロクロ回転が右回り方向のヘラ削りが施されている。口縁端部も受け端部も丸く仕上げられている。軟質な焼きで灰白色を呈する（2-25）。

#### C 類

2-25よりも底部は浅くなるが、まだ深い傾向を残している。立ち上り部は内傾気味で、口縁端部はだれたような段をもつ。立ち上りは1.4cmの高さを有する。受け部は0.6cm程の巾をもち、横方向に突出している。底部の $\frac{1}{2}$ 程にロクロ回転が右回り方向のヘラ削りが施されている。口縁端部は丸く、受け端部はやや鋭く仕上げられている。焼成は良好で青灰色を呈する。（5-96）

#### D 類

浅い底部に1.3cm程の高さで、直線的に内傾する立ち上りを有する。口縁端部は無段で丸く仕上げられている。受け部は上方に突出し0.6cmの巾を持つ。底部の $\frac{1}{2}$ 程にロクロ回転が右回り方向のヘラ削りが施されている。焼成は良好で灰色を呈する。（6-11）

#### E 類

底部がさらに浅くなり、立ち上りの高さも1cmとさらに低くなる。立ち上りは直線的に内傾し、口縁端部は無段で丸く仕上げられている。受け部は上方に突出し、0.5cmの巾をもつ。底部の $\frac{1}{2}$ 程にロクロ回転が右回り方向のヘラ削りが施されている。焼成は良好で青灰色を呈する（6-68）。

以上、蓋坏をA～E類に五分類した。次にこれらの時期について述べたいが、ここでは県内で長い間普遍的に使われている山本編年をもとにして論じる。まず、著しく特徴が異なるA類とE類を検討すると、A類の口縁部や受け部の形態的特徴や技法的特徴が薬師山古墳<sup>注5</sup>、つまり山本編年I期（以下、I期・II期・III期・IV期と略す）のそれと、E類の口縁

部などの形態的特徴がIV期のそれと各々類似する。また、B類の口縁部などの特徴がやはりI期のそれと、D類の前述の特徴がIII期のそれと、類似することが分かる。つまり、A・B類がI期に、D類がIII期に、E類がIV期に比定できる。

さて、C類は、口縁端部の特徴はI期のそれを受け継いでいるが、立ち上り部や器形などをみるとI期よりも新しい傾向が読み取れる。が、II期はめんぐろ古墳の須恵器を標準としていることや出雲地方でのII期の検討が不十分であることなどにより、C類をII期に比定できるか不明である。今後II期の検討が充分になされた後、再度検討したいと思う。また、最近、I期の中でも薬師山古墳が金崎1号墳に先行する可能性があるという指摘がなされている。<sup>注9</sup>この視点に立ってA・B類をみるとA類がB類に先行すると考えられる。しかしI期の検討もまだ充分でないために詳細に言及することはできないので、A類がB類に先行する可能性があるという指摘に留めたい。そして、A～E類が時期の前後関係を示すことが明確になったので以下A期～E期のように呼び替えたい。

さて、他の器種についてみると、有蓋高坏は蓋の形態や深い杯部や口縁端部の形態などが金崎1号墳の特徴と類似すると思われ、よってB期頃に入ると思われる。無蓋高坏も金崎1号墳と類似すると思われるので、これも一応B期頃に入れておく。聰については、小形聰の球状の体部形態、底部の手持ちヘラ削り、肩部に入るはずの上下の沈線文がないことなど、金崎1号墳よりもやや古くもっていけるのではないだろうか。また、大形聰の胴部最大径がその $\frac{1}{2}$ 以上のレベルにあることや底部のヘラ削り調整などは、金崎1号墳よりも長砂古墳群の特徴に近いと思われる。よって聰はA期頃に入ると思われる。碗は金崎1号墳や薬師山古墳に見られず、長砂古墳群つまり金崎1号墳よりも古い時期に見られるものであるから、ここではA期頃に入れておいた。壺・甕類については、2-27はB期になるが、5-109の内外面のタキや口縁部形態が古い特徴とは言えないことや口縁部の二条の稜がめんぐろ古墳と類似する様相をもっていることなどから、5-109は一応B期とC期の中間に位置づけたが、時期が下るかもしれない。

以上、蓋坏を中心にして編年してみた（第3表）。

#### (4) ま と め

(3)で堤邊遺跡の須恵器を蓋坏を中心にしてA期～E期の5期に区分した。そして、A期・B期をI期に、D期をIII期に、E期をIV期に各々比定した。が、前述したように、出土状態が廃棄若しくは投棄された状態であり、住居跡の床面上からは出土していない。このことにより、ここでおこなった須恵器の編年がそのまま住居跡の時期を決定しうるものではない。

やはり、住居跡の床面上から出土した遺物でセット関係などを捉えることが必要である。

今回の調査ではそれがなされたので今後のそういう調査例の増加を待ちたい。

- 注1 森浩一「和泉河内窯址出土の須恵器編年」（『世界陶磁全集』1 1958）  
田辺昭三編『陶邑古窯址群』1（平安学園考古学クラブ 1966）  
大阪府教育委員会『陶邑』I・II・III・IV 1976～1979
- 注2 八女市教育委員会『立山山窯址群』1972
- 注3 山本清「山陰の須恵器」（『島根大学開學10周年記念論集』1960）
- 注4 丹羽野裕『島根県日脚遺跡』（『日本考古学年報』36 1986）
- 注5 山本清「山陰の須恵器」（前掲）
- 注6 山本清「島根大学敷地墓築山古墳遺物について」（『島根大学論集人文科学』第5号 1955）
- 注7 山本清「浜田市めんぐろ古墳遺物について」（『島根大学論集人文科学』第7号 1955）
- 注8 川原和人「浜田市めんぐろ古墳出土の須恵器について」（『島根考古学誌』第2集 1985）
- 注9 山本清「山陰の須恵器」（前掲）
- 松江市教育委員会『史跡金崎古墳群』 1977
- 注10 川原和人、井上寛光「島根県における初期須恵器について」（『考古学ジャーナル』1259号 1986）
- 注11 松江市教育委員会『松江市都市計画事業乃木土地区画整理事業区域内埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書』1983

### 3. 滑石製模造品について

SI-01の床面直上から臼玉が2点、SI-04の床面直上から同じく白玉が3点、SI-20の南部褐色土層から臼玉が1点出土した。

いずれも小形粗造のものである。これまで、鳥取県内で滑石製模造品の出土した例は第5表のとおりである。遺跡の数が少ないので確実なことは言えないが、中期の古墳や祭祀遺跡あるいは玉作遺跡から発見されており、今のところ前期の古墳等からは確認されていない。ところが鳥取県では上神大将塚のように前期古墳からも玉類を中心として多量に副葬されていることが注意される。

一方、住居跡では堤廻遺跡と同様玉類が数点ずつ出土するのが通例である。そして、住居跡出土例は中期に入ってからみられ後期中葉で途絶えるようである。

ところで、こうした滑石製模造品の出現について小出義治氏は、前期末に滑石製の大形精巧な模造品があらわれるのは首長層のあり方がより支配者としての政治的性格を強めたことを意味すると考えられた。そして次の中期型の古墳になると滑石製の模造品は小形粗造、扁平な形状となり、形式的、量産的傾向をとるという。

堤廻遺跡の盛期である5世紀後半頃に出雲国内では、忌部中島遺跡で臼玉とその剥片が有孔円板と共に発見されており、臼玉も製作していたことが知られているが、ここで製作された臼玉が、金崎1号墳や薬師山古墳ほか祭祀遺跡などにもたらされたと考えられる。<sup>注1</sup>

堤廻集落は、恐らく近隣の金崎1号墳や薬師山古墳被葬者たる豪族の傘下にあったので、臼玉もいくつかもたらされたのであろう。

このことは、当時入手しにくい古式の須恵器をいち早く堤廻集団が入手していることと深い関係があり、須恵器をもたらした流通ルート上に金崎・薬師山グループがおったものと推測される。

寺村光晴氏は玉作遺跡を検討された結果、古墳時代中期の「第二期」に大和政権が玉造の生産集団を部的な組織として編成したと考えられる。この部的な組織集団は在地の「玉作氏」の配下のもとに中央の「忌部氏」や「物部氏」に従属していた可能性が強いとされる。氏のいわれる如く、滑石製粗造の模造品製作が中央直属型の組織系列のもとに執行されていたとしても、地方支配強化の面から出雲地方の豪族にも分与していたものと思われる。<sup>注2</sup>

それでは住居内出土の意味はどう考えればよいのだろうか。臼玉1～2個では、一住居では祭祀は出来ないのではないか。やはり集落内で各戸から持ち寄ってムラ全体のお祭りに使用したのではないかと考えられる。それにしても、臼玉のもつ本来的な意味がどの程

注1

度理解されていたかといえば、一般階層では単に玉の一部であり、さほどの意識はなかつたのではないだろうか。

注1 小出義治「祭祀遺跡」『日本の考古学・古墳時代(下)』

注2 松尾 寿「一九二二年における栗師山古墳の発掘について」『山陰文化研究紀要・第22号』  
島根大学、1982年3月

注3 寺村光晴「古代玉作の研究」吉川弘文館 昭和41年9月  
その他参考文献一覧

高橋一夫「石製模造品出土の住居址とその性格」『考古学研究・第18巻第3号』考古学研究会、  
1971年12月

梶山林雄「石製模造品」『神道考古学講座 第三巻 原始神道期二』雄山閣出版

山本 清「島根大学敷地菅田ヶ丘古墳について」『山陰文化研究紀要 第17号』、1977年

山本 清「松江・井出平山古墳」『島根県埋蔵文化財調査報告書第IV集』島根県教育委員会、  
昭和47年3月

玉湯町教育委員会「史跡出雲玉作跡－発掘調査概報－」昭和47年3月

松江市教育委員会「史跡金崎古墳群 昭和52年度環境整備事業報告書」昭和53年3月

第5表 島根県内出土の滑石製模造品一覧

番号	遺跡及び遺構	出土位置	名称及び数量	伴出遺物	時期	文献
1	薬師山古墳		双孔円板 6		5C後半	山本清「島根大學教地薬師山古墳遺物について」
2	金崎1号墳	竖穴石室内	子持ち勾玉 白玉 2 1	須恵器高环、器台、壺、青銅製品、鉄製刀劍、ガラス小玉、勾玉、等	5C後半	山本清「出雲国に於ける方形墳と前方後方墳について」
3	經塚山方墳	礫塚中	勾玉 蜜玉 6 48	碧玉製管玉10	古墳時代中期	山本清「小規模古墳について」
4	荒神畠古墳	表採	有孔円板 1		古墳時代中期	島根県教育委員会「島根県文化財調査報告書 第5集」所収 山本清「古墳」
5	矢印遺跡	表採	勾玉 1	土師器高环 須恵器高环	5C後半	昭和47年松江市教育委員会、未報告
6	落子遺跡	地下30~40cm 黒色土中	有孔円板	土製勾玉 2 手捏ね土器 50 高环2环4等		島根県文化財愛護協会「季刊文化財第23号」
7	佐陀宮内遺跡	?	有孔円板			寺村光晴「古代玉作形成史の研究」
8	人将軍遺跡	?	有孔円板			同 上
9	中島遺跡	1号住居跡内	有孔円板			同 上
10	史跡出雲工作跡	69B IV号住居跡	臼玉、同木製品		須恵器II期	同 上
11	"	71B I号住居跡	臼玉、同木製品		須恵器II期	同 上
12	"		子持ち勾玉 白玉		5C後半	同 上
13	堤廻遺跡	S I - 0 1床面	白玉 2	須恵器、土師器等	5C後半	本書
14	"	S I - 0 4床面	白玉 3	須恵器、土師器、砥石等	5C後半	"
15	"	第5調査区 X - 1区黄褐色土層中	白玉 1	須恵器、土師器等	5C後半	"

## V 遺構の検討

### 1. はじめに

堤壘遺跡で発掘調査された竪穴住居跡は、総数 21 棟（うち建て替えがあったもの 2 棟）を数える。この数は、島根県下で発掘調査され報告のなされた竪穴住居跡の中では、鹿足<sup>注1</sup>郡六日市町の前立山遺跡について多いものである。これまで島根県下では、鳥取県の青木<sup>注2</sup>道跡、福市遺跡のようにまとまって竪穴住居が検出された例はなかった。これは従来、住居跡が低地や、平地に近い緩やかな斜面にあるのではないかと考えられ、丘陵斜面があまり省みられなかったためである。それが、近年の開発の激化と文化財への一定の関心の高まりに起因する発掘調査の増加により、松江市矢田町の才ノ峠遺跡や、安来市黒井田町の高広遺跡等、急斜面からの住居跡の検出例が多く知られるようになった。以下、堤壘遺跡から検出された、竪穴住居跡、掘立柱建物跡について若干の考察を加えたい。

### 2. 竪穴住居

竪穴住居は、いずれも丘陵斜面上に作られ、そのほとんどが谷側を見晴らせる北側斜面に立地する。地区別に見ると 1 区 2 棟、2 区 5 棟、3 区 6 棟、5 区 4 棟、6 区 4 棟で、4 区からは検出されなかった。

第 6 表 竪穴住居形態・規模・時期別表

判例	○陽丸方形	○陽丸長方形	□方形	◇長方形	☆多角形	△不明		
規模	1	2	3	4	5	6	7 (m)	規模不明
堤壘Ⅰ期			3.7m SI-07	4.1m SI-08-a				
堤壘Ⅱ期				4.2x5.2m SI-02-a		5.5x6.5m SI-06-b		不規 △ SI-18
堤壘Ⅲ期					○ SI-21-b			△ SI-16
					4.8m SI-12	4.8m △SI-15		△ SI-14
					4.8m SI-05	5.0m SI-11		
					3.6m 4m 4.2m SI-02 SI-08 SI-04	4.8m 5.1m 5.6m SI-09 SI-21-a SI-19	4.2m SI-10	
							7x11 t. ☆ SI-14	
時期不明			2.6m SI-10					
分類	D 群	C 群	B 群	A 群				

出土遺物から各住居の時期を見ると、堤廻Ⅰ期3棟、Ⅱ期9棟、Ⅲ期8棟、不明1棟であった。Ⅲ期以降の堅穴住居跡は、確認されていないため、堤廻の集落はそれ以降途絶えたと考えられる。只、2区の遺物包含層等から山陰須恵器編年のⅢ期の須恵器が検出されているので、堤廻Ⅲ期以降にも集落が続いている可能性が残る。<sup>注6</sup>

次に、堅穴住居の平面形態であるが、遺存状況が極めて悪いため、不明確な分類しかできないが、隅丸方形プラン1棟、隅丸長方形プラン1棟、隅丸方形プラン又は隅丸長方形プランと思われるもの3棟、方形プラン又は長方形プランと思われるもの10棟、多角形プランと思われるもの1棟、不明5棟の、5つの形態に分けられる。このうち、方形と長方形の区別のつかないものは、第7表において一括して方形として扱うこととした。

上記の形態を時期別に分けると、堤廻Ⅰ期は、隅丸長方形プラン1棟、方形プラン1棟、長方形プラン1棟で、そのうち2棟は、建て替えを行っている。出土土器の時期からみて、SI-08はⅠ期に、SI-21はⅡ期になってから建て替えを行ったようである。

Ⅱ期は、隅丸方形プラン1棟、方形プラン3棟、多角形プラン1棟、不明5棟である。Ⅲ期は、隅丸方形プラン1棟、方形プラン6棟であり、それに加えて時期不明の方形プラン1棟となった。I～Ⅲ期まで各形態が分布することから、時期別に形態の推移を知ることは難しいが、時期が新しくなるにつれて、隅丸方形プランから方形プランへと主流は移っていくようである。しかし、Ⅲ期の段階において未だ方形プランへの定形比は行われておらず方形プランと隅丸方形プランの混在型のようである。周辺の遺跡をみると、当注7丘陵と谷を挟んだ北側の丘陵に位置する柴II遺跡から、堤廻Ⅰ期に先行する鍵尾Ⅱ式の方形プラン堅穴住居が検出されており、堤廻周辺地域における方形プランの導入は、以外に早い時期に行われていたようである。

次に各住居の規模をみると、遺存状況の良いものについては、床面積を算出することができたが、その数はわずかであり、その他はすべて残存する一辺の長さを規模の基準として考えた。

建て替えのあったものを別々のものとして考えると、一辺が3m未満の小型住居D群1棟、4、5m未満のやや小型の住居C群5棟、6m未満の中型の住居B群10棟、6mを超す規模の住居A群6棟、形態不明2棟に分類した。時期別にみると、Ⅰ期は、A群1棟、B群1棟、C群2棟、Ⅱ期は、A群2棟、B群5棟、不明2棟、Ⅲ期は、A群2棟、B群4棟、C群3棟、その他時期不明なD群1棟に分けられる。このことから、堤廻における集落開始時のSI-07、SI-08-aといった住居は、あまり規模が大きくななく、時期がやや下ってから建て替えによって床面積を拡大するようである。Ⅱ期になるとC群は

なくなり、全体的に規模がレベルアップする様相を呈し、A群とB群に大きく分れる。

Ⅲ期になると、再びA群、B群、C群に分かれ、数的にはB群が最も多く次いでC群、A群の順となる。堅穴住居の性格については、掘立柱建物も含めてまとめの項で若干の考察を加えることとする。

堅穴住居の内部構造についてみると、柱穴以外に使用されたピットや土壌の問題があげられる。用途不明のピットの中には、支柱を支える補助的な柱に使用されたものも含まれているとは考えられるが、従来、「中央ピット」ないしは、「特殊ピット」といわれる性格のものが多く含まれていると思われる。類例は、山陰両県から検出される堅穴住居跡に多くみられ、その性格については様々な考え方がある。例えば、鳥取県の青木遺跡では祭祀関係跡とされ、形態、構造、位置が変化するようである。その他、工作用ピットと考える例や、炉跡と考える例、貯蔵穴と考える例等、「中央ピット」、「特殊ピット」の捉え方は多様である。堤廻遺跡では、使われる用途にかかわらず、その名称を一律に「特殊ピット」とした。堤廻では、11棟の堅穴住居から「特殊ピット」が検出され、その性格を考えると、SI-07では、埋土に炭化物や焼土が詰っており、SI-08のSK-02、SI-05のSK-01にも埋土に炭化物が多く含まれていたことから、炉跡としての使用が考えられる。又、SI-01、SI-04の「特殊ピット」については、付近の床面から玉類や赤色顔料を施した土器等、祭祀を行ったと思わせる遺物が出土しており、これらと何らかの関わりをもっていたのではないだろうか。他の例、「特殊ピット」については、資料が乏しく性格を考察するまでにいたらなかったが、SI-21のP01～03は、3つのピットが1カ所に集中して掘られ、このうちP01からは、石と炭化物が検出されている。遺物痕跡は認められなかったが、同住居跡内にもう一つ「特殊ピット」と考えられる土壌(SK-01)があり、同時期の同住居内に複数の「特殊ピット」が存在する類例はないことから、貯蔵穴の性格のものと考えたい。他の遺跡にも「中央ピット」や「特殊ピット」の用途不明なものがかなりみられる。このことから、この施設が、堅穴住居で暮す場合においてかなり重要な位置を占め、欠如した場合には生活になんらかの支障をきたす機能のものだったのではないだろうか。以上のように堤廻遺跡における「特殊ピット」は、多様な在り方を示し、時期にともなう特徴の変化はみられなかった。

次に堅穴住居内における炉の問題であるが、固定化したつくりつけの竈はいずれの住居にもみられなかった。7棟の住居からは、焼土及び炭化物のひろがりか、若しくは、浅い掘込みに焼土や炭化物の詰ったピットないしは土壌等の炉跡痕跡と思われるものが検出された。焼土や炭化物のひろがりは、1住居あたり1～3カ所みられ長時間床面に固定して

注8

祭祀関係跡とされ、形態、構造、位置が変化するようである。その他、工作用ピットと考える例や、炉跡と考える例、貯蔵穴と考える例等、「中央ピット」、「特殊ピット」の捉え方は多様である。

注9  
注10  
注11

堤廻遺跡では、使われる用途にかかわらず、その名称を一律に「特殊ピット」とした。堤廻では、11棟の堅穴住居から「特殊ピット」が検出され、その性格を考えると、SI-07では、埋土に炭化物や焼土が詰っており、SI-08のSK-02、SI-05のSK-01にも埋土に炭化物が多く含まれていたことから、炉跡としての使用が考えられる。又、SI-01、SI-04の「特殊ピット」については、付近の床面から玉類や赤色顔料を施した土器等、祭祀を行ったと思わせる遺物が出土しており、これらと何らかの関わりをもっていたのではないだろうか。他の例、「特殊ピット」については、資料が乏しく性格を考察するまでにいたらなかったが、SI-21のP01～03は、3つのピットが1カ所に集中して掘られ、このうちP01からは、石と炭化物が検出されている。遺物痕跡は認められなかったが、同住居跡内にもう一つ「特殊ピット」と考えられる土壌(SK-01)があり、同時期の同住居内に複数の「特殊ピット」が存在する類例はないことから、貯蔵穴の性格のものと考えたい。他の遺跡にも「中央ピット」や「特殊ピット」の用途不明なものがかなりみられる。このことから、この施設が、堅穴住居で暮す場合においてかなり重要な位置を占め、欠如した場合には生活になんらかの支障をきたす機能のものだったのではないだろうか。以上のように堤廻遺跡における「特殊ピット」は、多様な在り方を示し、時期にともなう特徴の変化はみられなかった。

注12

次に堅穴住居内における炉の問題であるが、固定化したつくりつけの竈はいずれの住居にもみられなかった。7棟の住居からは、焼土及び炭化物のひろがりか、若しくは、浅い掘込みに焼土や炭化物の詰ったピットないしは土壌等の炉跡痕跡と思われるものが検出された。焼土や炭化物のひろがりは、1住居あたり1～3カ所みられ長時間床面に固定して

の使用ではなかったと思われる。炉の中途であるが、暖房をとる目的以外に、移動式の竈片が検出されていることから厨房としても利用していたのではないだろうか。炉跡はⅠ～Ⅲ期までみられ、Ⅰ期の段階から掘込みのものがみられる。

もう1つの特殊な施設として、2区SI-21より検出されたベッド状遺構が挙られる。  
この遺構については、島根県内での類例ではなく、隣県の鳥取県からは青木遺跡で1例、福  
<sup>注13</sup>市遺跡吉塚地区で1例、同遺跡御所原で4例、同遺跡日新校地地区で1例、長瀬高浜遺跡  
<sup>注14</sup>  
<sup>注15</sup>  
<sup>注16</sup>  
<sup>注17</sup>  
<sup>注18</sup>で7例検出されている。ベッド状遺構は、少なくとも弥生時代末期には、西日本に普及して  
いたものと思われる。機能的には、寝所説、祭壇説等が考えられている。今回の調査では、その機能を断定できるような資料を得ることができなかった。そのため現時点では、  
ベッド状遺構を「しきり区分」と考え、住居内に特別な意味をもつ場所として設定したの  
ではないかと推定せざるを得ない。いずれにせよ、「特殊ピット」の性格とあわせて、資料  
の増加を待って再検討を要する問題である。

その他、住居の出入口や上屋構造等の問題を考えねばならないが、出入口の痕跡を今回  
の調査においては確認できず、また火災住居痕跡もなかったことから上屋構造も確認でき  
ないままにおわった。だが、SI-01では、等高線と水平な西側の壁が、中央部から住  
居の外側に向ってのびることから、この面を入口として利用した可能性も考えられる。

最後に堅穴住居に伴う構造として、住居の外周部に溝がめぐらものがSI-04、SI  
-17の2棟あり、いずれも住居より山側にあることから、水を防ぐための排水施設だと  
考えられるが、あるいは住居間を画する役割も兼ねていたのかもしれない。2区SI-18  
の西側に位置するSD-01、02の性格も、ピット群との切合いから、同時期と考えられ  
れ、SI-18に伴う排水溝であった可能性が強い。

### 3. 掘立柱建物

掘立柱建物はⅡ区において2棟検出され、柱穴内の遺物からSB-01は堤廻Ⅱ期と思  
われ、SB-02については出土遺物がないことから時期がわからなかった。この他、付  
近には60余のピットが確認されており、この2棟の他にも掘立柱建物はあったと思われる。  
ピット群からはSB-01以外遺物は検出されていないが、遺跡全体をみても古墳時代より  
新しい遺物はなかったことから、古墳時代の遺構と考えてもよいのではないだろうか。

掘立柱建物及びピット群の性格であるが、堅穴住居群と隣接するほど特定された範囲内  
に集中して建てられていることから、特別な地位にあった人々の住居か集積物を収納する  
ための倉庫と考えられる。そして、束柱をともなわない2間×4間、2間×3間という建  
築構造からみて倉庫よりも住居であった可能性がつよい。又、ピット群に切合いが認めら

れることや、SB-01とSB-02の主軸が異なることから住居の建て替えが行われたと考えられ、少なくとも堤廻Ⅱ～Ⅲ期までは継続して建てられてきたのではないかと思われる。

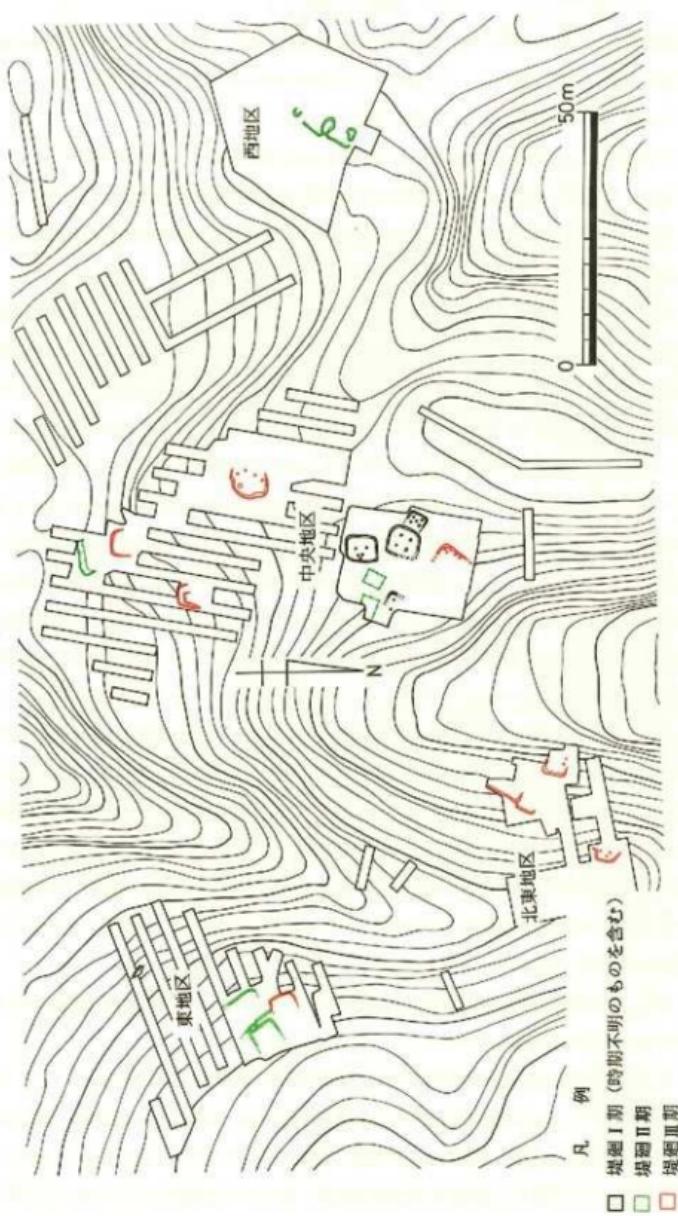
#### 4. まとめ

次に、堅穴住居と掘立柱建物の性格を考え合わせながら、堤廻遺跡における集落の在り方について若干の検討を加えたい。古墳時代の集落については、和島誠<sup>20</sup>・金井塚良一両氏による「集落と共同体」によって論述された見解があり、ここでは古墳時代の集落が有機的な結合関係をもつ数様からなる単位集団（世帯共同体）から構成されていることを明らかにし、農業経営の基礎単位と考えた。さらに、単位集団については、広瀬和雄氏が「同一住居に居住する集団を血縁集団としての世帯、その有機的結合体を世帯共同体と考えておきたい。」と定義している。以上のことを把握しながら考察を進めていきたい。堤廻遺跡の堅穴住居の分布状況から、第Ⅰ調査区を中心とする西地区、第Ⅱ・V調査区を中心とする中央地区、第Ⅲ調査区を中心とする東地区、第IV調査区を中心とする北東部地区の4つのまとまりに分けられる。これは甚だ恣意的な分割方法ではあるが、堅穴住居の集中する度合や、時期別の分布といった立地的傾向をもとにしたものである。

堤廻丘陵における集落の開始は、堤廻Ⅰ期に中央地区北側のSI-07を住居とする血縁集団により開始され、出土遺物や遺構の切合いからみてSI-08-aへと継続され、この住居にSI-07の血縁集団が移り住んだと考えられる。両住居の規模はいずれもC群に属し、最初に移住して集団の人員及び経済力がそれほど大きくなかったことをものにしている。次の段階になるとSI-08の規模が拡張され、又、隣接する地点にSI-21-aが建てられる。SI-08の拡張の理由としては、人員の増加と経済力の向上が考えられる。SI-21を住居とする集団は、SI-08の人員増加に伴い分化したものと考えるのが妥当であろうが、他地域からの新たなる移住者の可能性も考えられる。ともあれ、Ⅰ期の段階に両住居の血縁集団において、世帯共同体が形成されるに至ったわけである。Ⅱ期の初頭になると、SI-21にも拡張がみられ経済力が向上したことを探わせる。Ⅱ期の堅穴住居の分布は、中央地区のさらに上の斜面や、西地区、東地区にもみられるようになる。それに加えて、中央地区のSI-21東側付近に掘立柱建物が出現する。SI-21近辺には、それを引継ぐ規模の堅穴住居はみられず、Ⅱ期以後は掘立柱建物が主として建てられる様相を呈する。先の項でも述べたとおり、掘立柱建物を住居と解釈すれば、Ⅰ期より継続する世帯共同体の経済力の向上と新たな建築技術の導入によって実現したことであり、この経済力に優れた世帯共同体が当然堤廻遺跡における農業共同体の

注22

第61図 住居跡時期別配置図



<sup>注23</sup> 首長的存在と考えられる。只、掘立柱建物を住居とすると、集落内における倉庫の所在が問題となり、その有無によって堤廻遺跡の農業共同体の社会的位置が変化するものと考え  
<sup>注24</sup> られるが、今回の調査からそれを知り得ることはできなかった。

いずれにしろ、掘立柱建物の存在からⅡ期における集落の中心は中央地区であったと考えられ、東地区、西地区において形成された世帯共同体は從属的な立場にあったのではないだろうか。又、第7表でみると、各世帯共同体においても住居規模の格差がみられはじめ、共同体内に階級分化が生じてきたことを窺わせる。

Ⅲ期における集落の在り方をみると、中央地区と東地区ではⅡ期に続いて堅穴住居がみられることから、依然、世帯共同体が継続して形成されると考えられるが、西地区では堅穴住居が確認されなくなることから、世帯共同体が解体したか或は移動したものと考えられる。これに呼応して、北東部地区に4棟の堅穴住居からなる世帯共同体が形成されており、西地区的世帯共同体が移動したものかもしれない。住居規模をみると、中央地区的S-I-20が最も大きいが、首長の家屋はすでに述べたとおり掘立柱建物と考えられることから世帯共同体、或は農業共同体を社会的・有機的に結びつける共同家屋的なものだったのではないだろうか。そして、掘立柱建物及び共同家屋の存在から、移築集落の中心は中央地区にあったとみられ、Ⅱ期にみられはじめた世帯共同体相互の階級差は、Ⅲ期になつても継続するものと思われる。又、住居相互の格差も顕著になり、階級差もさらに広がるものではないだろうか。

以上、時期ごとに集落の変遷をみてきたわけであるが、そこから言えることはⅠ期に集落の開始された中央地区の世帯共同体はその後Ⅱ～Ⅲ期に渡っても継続し、Ⅱ期以降からは首長の家屋である掘立柱建物が建てられるようになり堤廻遺跡において支配的な地位を占めている。これに対して他の地域の世帯共同体は、Ⅱ期以後中央地区の世帯共同体から分化したか或は新しく移住した集団で、いずれも掘立柱建物を有しておらず、中央地区的世帯共同体に対して被支配的な性格を持っていたのではないだろうか。そして検出した遺構から見る限りでは、堤廻集落はⅢ期以降廃絶する様相を呈する。

以上、堤廻集落の在り方を住居の分布を中心に考えてきたが、これだけからは知ることができない諸問題も山積みされた。

第1に、堅穴住居の規模の問題として、時期不明のため前項では触れなかったが、D群に属するS-I-10の問題があげられる。現存するのは、北壁2.6mと西壁の一部のみであり、明確な規模は不明であるがまわりの立地をみてもそう大きく広がるものではないと考えられ、その規模から居住には不適当であり、また他の住居群からやや離れた位置にあ

ることから、當時使用されていたものというよりも何か特別の目的に使用されたものではないかと思われる。しかし、その性格については出土遺物が少なく遺物的考察も充分にできず、また世帯構成からも知り得ることができなかつた。

第2に、住居以外の遺構の検討を充分に行うことができなかつた。竪穴住居の周辺及び住居と切合う位置に穿たれた土壙の性格、住居内やその周辺に堆積した土器溜りの性格等論究すべき点が多く残されているが、検討するまでに至らなかつた。

第3に、何故このような急斜面に住居を作る必要があったかという問題があげられる。これについて島根県内の類例をみるとほとんどの竪穴住居が斜面に建てられている。このことから、地形的な制限をうけていると考えられ、それに加えて尾根状の平坦面は墓域として、低地は耕作地として利用するため、必然的に丘陵の斜面に居を構えざるをえなくなつたのでないだろうか。

第4に、堤廻遺跡と周辺の遺跡の関連がどのようにになっていたのかという問題がある。堤廻遺跡と平行する古墳時代前期から中期にかけての遺跡としては、谷を挟んだ北側丘陵上に柴古墳群・山崎古墳・馬込山古墳群等、多数の古墳が存在しており、さしつめ丘陵全体が墓域の様相を呈している感がある。また同丘陵の南側斜面には古墳時代前期前半の竪穴住居を検出して柴II遺跡が存在する。<sup>注26</sup>一方堤廻集落のある丘陵をみると、現在のところ古墳は確認されていないが、S I - 0 6 の土器溜りから円筒埴輪片が出土しており、丘陵上のいずれかに古墳が存在していたことを窺わせる。北側の丘陵上では古墳時代前期以後住居がみられず、それと呼応して堤廻丘陵で古墳時代前期後半から集落が営まれており、相応する丘陵の遺跡は密接な関係をもっているようにも見うけられる。しかし、今のところこれらを結びつけるような資料が乏しく、また今後の調査において遺跡の様相も変化する可能性もあり、早急にその関係を判断することはできない。

第5に、堤廻集落の終焉が何によって起こり、この地で生活を営んでいた集団が何処へ移動したのかという問題である。付近での6C以降の住居例をみると、松江市大井町薊沢A遺跡から古墳時代後期初めから奈良時代にかけての掘立柱建物群が検出されているがその周辺には同時代の須恵器窯が数多く存在しており、薊沢A遺跡の集団も須恵器工人と考えられ、堤廻集落の集団とは性格を異にするものと思われる。又、堤廻集落の終焉については火災や水害等の天災を原因とする可能性もあるが、住居の遺存状況から考えれば天災に遭ったと考えるよりも、むしろ意図的に放棄した傾向にあり、当時の社会情勢をもふまえながら検討する必要がある。この他にも考えなければならない問題は多々あり、今後の発掘調査の成果を待って再検討を試みなければならぬと痛感するしだいである。

- 注1 内田律雄他「前立山遺跡」(『中国縦貫自動車道建設に伴なう埋蔵文化財発掘調査報告書』鳥根県教育委員会 1980)
- 注2 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書 I～III』1976～1978
- 注3 米子市教育委員会 米子市福島市遺跡調査団『福島市遺跡』1968
- 注4 内田律雄「才ノ峰遺跡」(『国道9号線バイパス建設予定地区埋蔵文化財発掘調査報告書 IV』建設省松江国道工事事務所 島根県教育委員会 1983)
- 注5 鳥根県教育庁文化課『高広遺跡現地説明資料』1983、足立克己「高広遺跡の掘立柱建物群」(『季刊文化財第53号』鳥根県文化財愛護協会 1985年)
- 注6 山陰須恵器編年について、山本清「山陰の須恵器」(『鳥根大学開学十周年記念論集』1960)
- 注7 横山純夫「紫川遺跡」(『主要地方道松江一境線バイパス関係埋蔵文化財調査報告 I』鳥根県文化財愛護協会 1976・3)
- 注8 「青木遺跡発掘調査報告書 III』第IV章考察編第2節遺構論(注2参照)
- 注9 松江市矢田町平所遺跡(島根県教育委員会『平所遺跡 1、2』『国道9号線バイパス予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書 I・II』1976、1977)、八束郡玉湯町出雲玉作跡(玉湯町教育委員会『史跡山雲玉作跡発掘調査概報』1972)等があげられる。
- 注10 内田律雄他「前立山遺跡」(注1参照)等があげられる。
- 注11 仁多郡横田町「渋谷遺跡」(横田町教育委員会『沢田宅裏遺跡、縄免人塚遺跡、渋谷遺跡調査報告書』1982等があげられる。
- 注12 鳥取県大栄町「上種遺跡」(大栄町教育委員会『上種第5遺跡発掘調査報告書』1985)、『上種第6遺跡発掘調査報告書』1986)、鳥取県倉吉市「宮ノ下遺跡」(倉吉市教育委員会『宮ノ下遺跡発掘調査報告書』1976年)、鳥根県安来市早田町「叶谷遺跡」(鳥根県教育委員会『鳥根県埋蔵文化財調査報告書 第XI集 J』1985)等で「中央ピット」「特殊ピット」の問題にふれているが、いずれもその性格を言及するまでには至っていない。
- 注13 (注8参照)
- 注14 (注3参照)
- 注15 (注8参照)
- 注16 (注8参照)
- 注17 「長瀬浜遺跡」(鳥取県教育文化財団『長瀬浜遺跡発掘調査報告書 I～VII』)
- 注18 和島誠一・田中義昭「住居と集落」(『日本の考古学 IV』河出書房 1966)
- 注19 松江市東津町「勝負遺跡」のS I-03、04(注4参照)、鹿足郡六日市町「前立山遺跡」のS I-16、19(注1参照)、松江市竹矢町「長瀬遺跡」のS I-01(松江市教育委員会『竹矢久後1号墳・長瀬遺跡』1986)等にみられる。
- 注20 和島誠一・金井塙良一「集落と共同体」(『日本の考古学』河出書房 1966)
- 注21 広瀬和雄「古墳時代の集落類型－西日本を中心として－」(『考古学研究』第25巻第1号 1978)
- 注22 小笠原軒彦「畿内および周辺地域における掘立柱建物集落の展開」(『考古学研究』第25巻第4号 1979)
- 注23 農業共同体の形成については、都出比呂志「農業共同体と首長権－階級形成の日本の特質－」(『講座日本史 1 古代国家』歴史学研究会編 東京大学出版会 1970)
- 注24 広瀬和雄「古墳時代の集落類型－西日本を中心として－」(注21参照)によれば、倉庫を有する集落を支配的位置にある共同体、倉庫を保有しない集落を被支配的、從属的共同体という性格を付与している。
- 注25 申元眞之「農耕集落」(『岩波講座 日本考古学 4 集落と祭祀』岩波書店 1986)

- 注26 松江市教育委員会『柴占墳群』 1985
- 注27 松江市教育委員会『山崎占墳』 1984
- 注28 石橋逸郎・近藤正「松江・長込山古墳群」（『島根県埋蔵文化財調査報告書 第3集』島根県教育委員会 1971）
- 注29 （注7参照）
- 注30 （昭和58・59年度 松江市教育委員会調査）

## VI ま と め

今回の調査により、竪穴住居跡21棟と堀立柱建物跡2棟と検出することができた。

分布状況をみると大まかに4群に分類できる。西地区は2棟、中央地区は9棟であるが丘陵基部に5棟と堀立柱建物跡が2棟、斜面に4棟ある。東地区は6棟、北東部地区に4棟となる。全境的な調査ではなかったので正確なことは言えないが、分散して立地していたようである。

次に、各住居跡内及び周辺の出土土器の編年から、須恵器出現以前の土師器を堤廻Ⅰ期、同Ⅱ期とし、須恵器出現以後のものを堤廻Ⅲ期とした。さらにこのⅢ期は須恵器についてみると、山本編年と対照するとA・B類が山本編年のⅠ期に、C類がⅠ又はⅡ期のいずれかに、D類がⅡ期に、E類がⅣ期にほぼ平行するものと考えられる。

このようにして土師器、須恵器両者の編年から考えると堤廻遺跡は6期の段階を設定できる。

のことから住居跡の前後関係を考えると、堤廻Ⅰ期の段階では中央地区に3棟が集中して営まれ、Ⅱ期以後は各区に分散していく傾向にある。

第7表 島根県内の土器編年併行関係表

須 恵 器		土 師 器		住 居 跡
山本編年	堤廻遺跡	県内編年	堤廻遺跡	
		小 谷 式	堤廻Ⅰ期	中央区3棟
		大 東 式 ?	堤廻Ⅱ期	北東地区を除く4区に分散。計7棟 堀立柱建物1棟
I 期	A, B類 C類?		堤廻Ⅲ期	西地区を除く4区に分散。計9棟
II 期	C類?			
III 期	D 類			
IV 期	E 類			

堤廻遺跡は、古式土器の從来からの編年でいえば、小谷式の段階（堤廻Ⅰ期）から始まり、須恵器出現以後も山本編年のⅠ又はⅡ期の墳までは盛んに営まれているが、Ⅲ期、Ⅳ期については、住居跡と出土須恵器の出土状態が不明確であり、住居が営まれているのかどうかはっきり分からぬ。

ひるがえて周辺の遺跡を考えてみると、縄文・弥生から古墳時代へと続くタテチョウ  
・西川津遺跡の他、古墳時代前期の柴Ⅱ遺跡があり、又、古墳についてみると山崎古墳や  
柴古墳群のように、古式の須恵器を出土するなど5世紀から6世紀前半にかけての古墳も  
点在しているので低丘陵及び低地にまだかなり多くの集落遺跡があるものと推定される。  
<sup>注4</sup>

堤廻の初期に至り、古式の須恵器が、集落内にもたらされるということは、この時期の  
集落遺跡での須恵器の出土例が極めて少ないとから考えて異常である。加えて滑石製臼玉も  
出土していることから考えると、須恵器や滑石製臼玉がセッタあるいは前後して導入  
されたことが考えられ、日常生活で実際にどのように使用されていたのかは抜きにして  
も何らかの供給元が近くにあったのではないかと考えられる。それが金崎1号墳や薬師山  
<sup>注5</sup>  
<sup>注6</sup>  
古墳を造り得た豪族ではなかったと考えられなくもない。

ところで鳥取県では福市、青木両遺跡に代表されるように、大規模な調査が行われ、そ  
れなりの調査の進展もあるのだが、県内の住居跡あるいは集落跡の調査については例が少  
<sup>注7</sup>  
<sup>注8</sup>  
なく前立山遺跡があるのみで、他は単発的なものである。

このような状況の中で、本遺跡の調査は決して十分とはいえないが、一応の成果をみた  
ので、今後の集落遺跡研究に重要な資料を提供するものと思われる。

注1 山本清「山陰の須恵器」『山陰古墳文化の研究』所収 昭和46年

注2 九重式→鍵足式→小谷式→大東式と言う編年がなされている。

注3 島根県教育委員会『朝駒川河川改修工事に伴うタテチョウ遺跡調査報告書』昭和54年3月

注4 島根県教育委員会『西川津遺跡詳細分布調査報告書』昭和56年3月

注5 横山純夫「柴Ⅱ遺跡」『主要地方道松江一境線バイパス関係埋蔵文化財調査報告Ⅰ』島根県文化財愛護協会 1976.3

注6 松江市教育委員会『山崎古墳』1984

注7 松江市教育委員会『柴古墳群』1985

注8 松江市教育委員会『史跡金崎古墳群』1977

注9 山本清「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」『島根大学論集人文科学』第5号 1955

注10 米子市教育委員会・米子市福市遺跡調査団『福市遺跡』1968

注11 青木遺跡発掘調査団『青木遺跡発掘調査報告書Ⅰ～Ⅲ』1976～1978

注12 内田律雄「前立山遺跡」『中国縱貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』島根県教育委員会 1980



丘陵後方

調査区

第1調査区

第2調査区

古墳推定地 丘陵後方

第3調査区

調査区遠景（調査前）  
北側柴池から見る

第2調査区  
SI-06 遺物  
出土状況



同上  
SI-07



同上  
SI-08-b





第1調査区  
SI-05



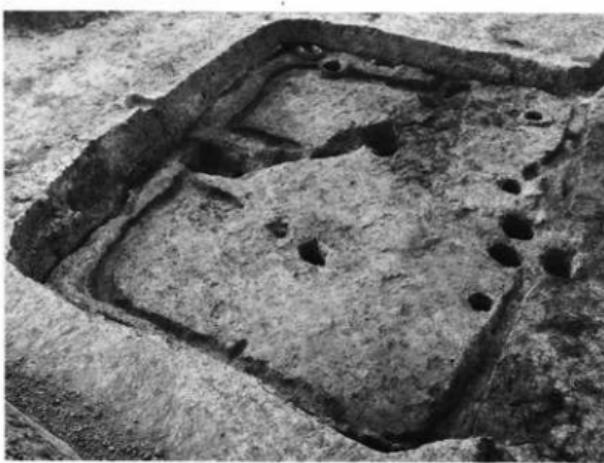
同上  
SP-01 遺物  
出土状況



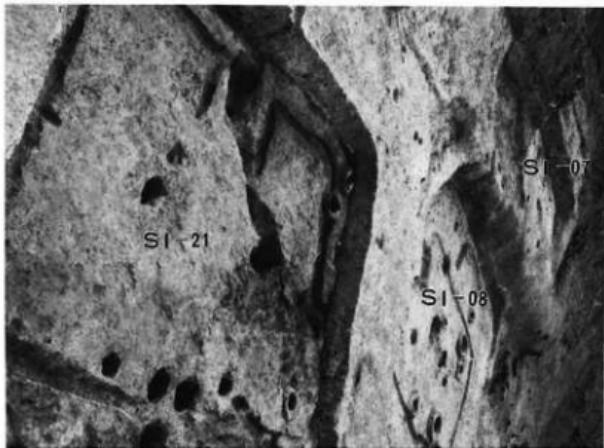
第2調査区  
SI-06



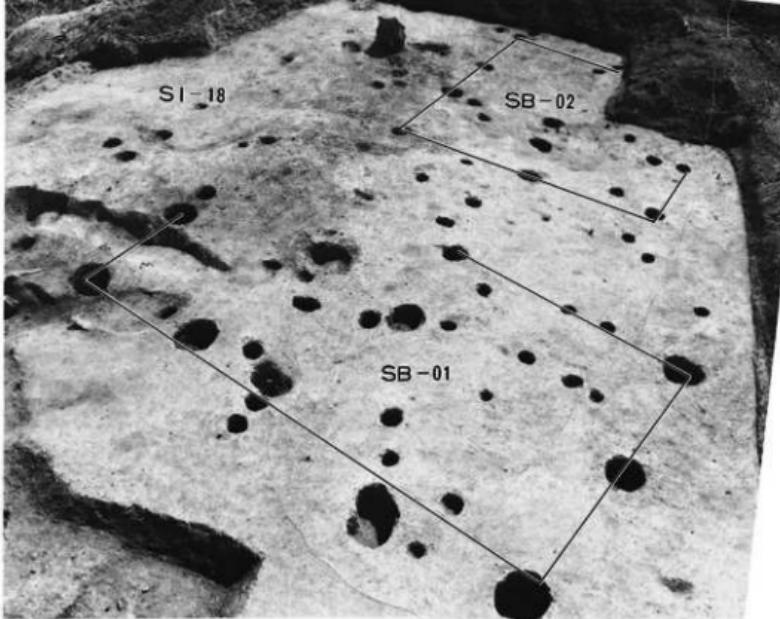
第2調査区  
SI-08-a



同上  
SI-21-a, b



同上  
南側よりSI-21,  
SI-08, SI-07  
を見る



第2調査区  
西侧よりピット群を見る



第3調査区  
SI-12

第3調査区  
SI-13



第3調査区  
北側より見る



第3調査区  
東側より見る



第4調査区  
Cトレンチ  
遺物出土状況



同上  
Cトレンチ  
遺物出土状況



同上  
Dトレンチ  
遺物出土状況





第5調査区  
Fトレンチ  
遺物出土状況



同上  
SI-16

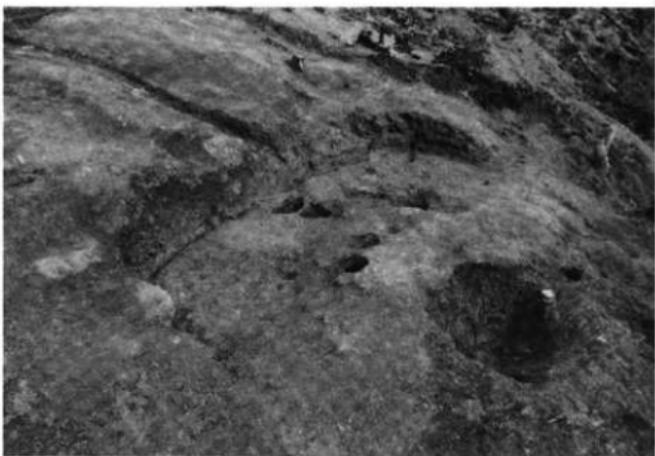


同上  
SI-19

第5調査区  
SI-20  
遺物出土状況



第6調査区  
SI-01  
北側よりみる



第6調査区  
SI-01  
西側より見る





第6調査区  
SI-02

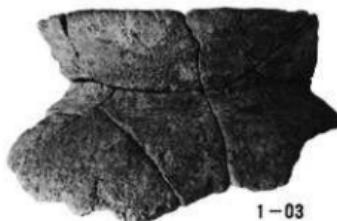


同上  
SI-03  
遺物出土状況



同上  
SI-02, SI-03  
西側より見る





1-03



1-04



1-05



1-06



1-07



1-08



1-09



1-10



1-11



1-12



1-14



1-13



1-15



1-17



1-16



1-18



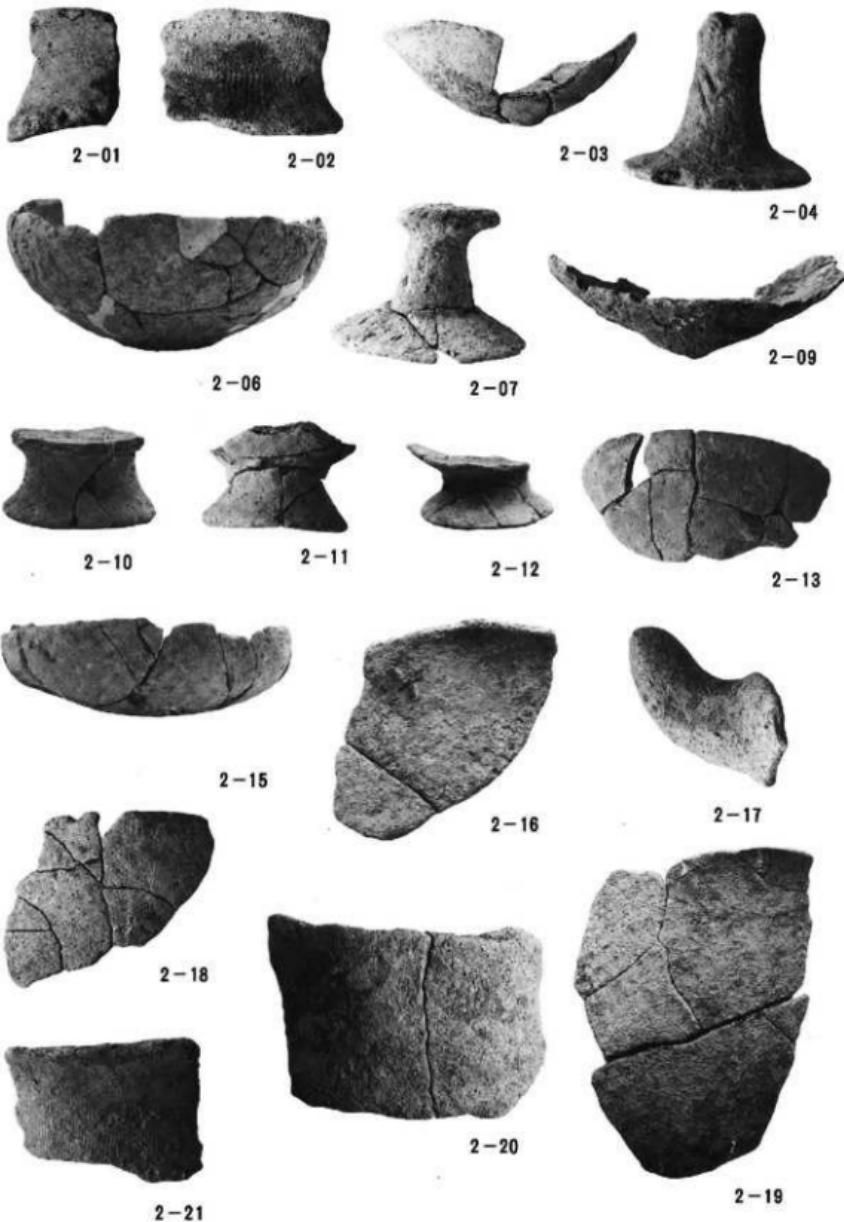
1-19



1-20



1-21





2-22



2-23



2-24



2-25



2-27



2-29



2-31



2-30



2-32



2-33



2-34



2-35



2-36



2-37



2-39



2-28



2-38



2-40



2-45



2-46



2-47



2-43



2-41



2-42



2-48



2-44



2-49



2-50



2-52



2-51



2-53



2-54



2-57



2-56



2-58



2-60



2-61



2-62



2-63



2-65



2-64



2-78



2-68



2-69



2-66



2-74



2-72



2-70



2-66



2-75



2-71



2-73



2-81



2-80



2-82



2-83



3-01



3-02



3-03



3-04



3-05



3-06



3-08



3-07



3-09



3-10



3-11



3-12



3-15



3-13



3-14



3-16



3-18



3-17



3-19



3-20



3-21



3-22



3-23



3-24



3-25



3-26



3-27



3-28



3-29



3-30



3-31



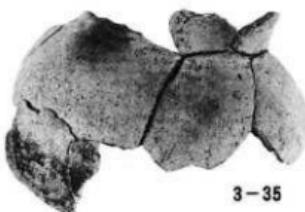
3-32



3-33



3-34



3-35



3-37



3-36



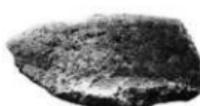
3-38



3-39



3-41



3-42



3-43



3-44



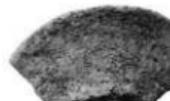
3-45



3-46



3-47



3-48



3-50



3-51



3-49



3-53



3-52



3-54



3-55



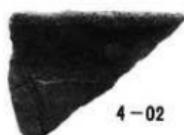
3-57



3-56



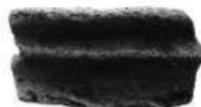
4-01



4-02



4-03



4-04



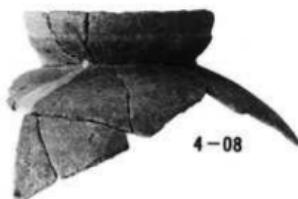
4-05



4-06



4-07



4-08



4-09



4-12



4-11



4-13



4-10